

明治大学 | 理工学部建築学科 | 理工学研究科建築学専攻

Archives

2025

from Department of Architecture
Meiji University

Site1

Site3

Site4

Site5

Site2



Archives 2025

from
Department
of
Architecture,
Meiji
University

Archives 2025の発刊にあたって

明治大学建築学科は、1949年の創設以来、1万有余の卒業生を社会に輩出してきました。建築学科は創設以来、着実に発展を遂げ、1989年の学部再編で理工学部建築学科となりました。現在の学年定員は173名で、総勢700名ほどの学生が学んでいます。大学院には、博士前期課程と後期課程が設置されています。2013年には本学4つ目のキャンパスである中野キャンパス新設に合わせ、国際プロフェッショナルコース(I-AUD)が開設され(2025年度に駿河台キャンパスに移転)、2017年の専攻再編で建築・都市学専攻となりました。現在は、建築学系、国際建築都市デザイン系(I-AUD)、総合芸術系の3系で構成され、約150名の大学院生が学んでいます。また、完全英語教育(EMI)で建築・都市デザイン教育を行うI-AUDの開設に合わせ、既存の学部教育と組み合わせ、UNESCO/UIA 建築教育憲章に則った6年制カリキュラムを構築し、2015年からJABEE建築系学士修士認定を受審し(エンジニアリング学士も同時認定、2014年度卒業生・修了生から適用)、国際通用性のある教育プログラムを提供しています。

『Archives 2025』は、上述の一連の取り組みの一環として刊行しているイヤープックです。建築学科、建築・都市学専攻における2024年度の主要な成果を記録・公開するために、卒業設計・修士設計の優秀作品に加え、I-AUDのスタジオの優秀作品や、環境・設備分野、構造・材料分野の卒業論文・修士論文の成果などを網羅し、掲載しています。加えて、毎年秋に開催している「明建シンポジウム」では、2024年度いっぱい約60年にわたる役目を終え解体される第二校舎2号館の歴史的意義を学び記憶を継承するためのシンポジウムを開催しましたので、その概要も収録しています。

2020年春からの新型コロナウイルス感染症拡大により、本学の建築教育は大きな影響を受け、相当部分をオンラインで実施することを余儀なくされました。しかし、2023年度からは、感染の収束に伴い全面的に対面授業を実施し、海外への渡航を伴う国際プログラムも従前どおり再開することができました。I-AUDの開設を機に開始した国際的教育は近年は学部教育にまで展開し、学科・専攻全体へと広がっています。従来の対面授業とのハイブリッドによる取り組みや国際的な取り組みで生み出された主要な研究・教育成果が、本誌に収録されています。

建築学科、建築・都市学専攻のさらなる発展のために、教員スタッフ一同、今後とも引き続き努力していく所存ですので、本誌をご高覧いただき、忌憚のないご批評、ご助言を賜れば幸甚です。

建築家・堀口捨己先生の設計による明治大学の校舎群は、老朽化やバリアフリー非対応などの問題から建て替えが進められており、生田キャンパス第二校舎2号館（斜路棟を含む）も2024年度いっぱいまで約60年間に及ぶ役割を終えます。

本会では、2号館の歴史的な意義を学び思い出を語らうことを通じてその記憶を継承していくことの重要性を確認します。

主催 明治大学理工学部建築学科
明大建築シシボジウム 二〇一四年 一月三〇日(土) 13:30~16:10
 明治大学田生田キャンパス第一校舎2号館20003教室 全体進行 門脇耕三(本学教授)

レポ-ト

明治大学生田第二校舎2号館お別れの会・記念シンポジウム

明治大学生田キャンパス第二校舎2号館の記憶の継承

開會挨撈

三耕協門
Kozo Kadowaki
本学教授 [構法計画研究室]

小山明男

Akio Koyama
本学教授 [建築材料研究室]

- 門脇** 進行を務めさせていただきます建築学科の門脇と申します。本日は、いまみなさまがいらっしゃる、ここ「明治大学生田キャンパス第二校舎2号館」のお別れの会として、2024年度の「明治大学建築シンポジウム」を企画いたしました。主催者を代表して小山明男先生からご挨拶いただきます。
- 小山** 本日は取り壊しが決まった堀口捨己先生（1895－1984）設計による「2号館」のお別れの会ということで在校生のみならずたくさんの卒業生にも足を運んでいただきました。訪れた卒業生の方々が「2号館」を撮影されているのを見て、改めてお別れを実感しています。一方、新しく図書館と教室棟になる「センターフォレスト」の建物の養生が1か月ほど前に外され、姿を現わしてきました。

した。古い建物を惜むとともに、新しく発展すること、新陳代謝も大事です。両者の橋渡しとしてこの企画が成立しており、私も明治大学の卒業生のひとりとして今日のシンポジウムを楽しみにしています。

門脇 ここ「2号館」は、明治大学工学部の校舎として、建築学科の開設者のひとりである堀口捨己先生によって設計され、1965年に竣工しています。60年もの間たくさんの方々が勤学に励んできましたが、2024年度をもって使用を停止し、来年度に取り壊されることになりました。この期に建築学科では有志の教員で堀口捨己の明治大学建築校舎についての研究を進めてまいりました。夏に明治大学で開催された日本建築学会大会では、展覧会としてその研究成果を発表させていただいています（「堀口捨己と明治大学校舎建築1955－65」展、2024年8月27日－30日、明治大学駿河台キャンパス）。本日は「2号館」のみならず、明治大学のキャンパスの成り立ちについてより深く知り、その記憶を次世代に引き継ぐことを目指し、研究の成果をみなさんと共有したいと考えております。

なお「斜路棟」と呼ばれる非常に印象的なスロープの建物も「2号館」の一部であり、解体される予定です。シンポジウムの後には、お別れの会の第2部として、この「斜路棟」を含めた「生田第二校舎2号館ツアー」を企画しています。



明治大学生田キャンパス第二校舎 2 号館 廊下が巻き付く外観 © 青井哲人



シンポジウムの様子 © 篠田優

目次

理工学部建築学科
理工学研究科建築・都市学専攻

レポート
明治大学生田キャンパス
第二校舎 2 号館の記憶の継承——
明治大学生田第二校舎 2 号館
お別れの会・記念シンポジウム
[明大建築シンポジウム]

卒業設計
作品
審査講評

スタジオワークス
学部作品
[建築設計／計画・設計スタジオ]
博士前期課程作品
[設計スタジオ]

博士論文・修士論文／修士設計
博士論文・修士論文 梗概
修士設計

卒業設計・卒業論文一覧

理工学研究科建築・都市学専攻
国際建築都市デザイン系 (I-AUD)

修士設計
博士前期課程作品
[Advanced Design Studio]

堀口捨己アーカイブから読み取る明大生田キャンパス・マスタープランの変遷

大河内学

Manabu Okochi

本学教授〔建築空間論研究室〕

ここ2年ほど、堀口捨己研究のワーキング・グループをつくり、いろいろな勉強と作業を行なってきました。例えば、国立近現代建築資料館に移管された堀口捨己先生の資料の一つひとつについてねいに検分し、「堀口捨己と明治大学校舎建築1955－65」展で展示するにふさわしい、または書籍に掲載すべき価値がある図面を選別しました。こうした作業を通じて堀口先生のお考えや、設計された校舎群について新たにわかったことがあります。本日は主にマスタープランと設計プロセスについてお話しいたします。

最初にお話するのは「生田キャンパスにおける寸法とモジュール」についてです。資料を見ていくと面白い図面が出てきます。例えば、座席数と通路幅の組み合わせをスタディし間口方向の寸法が検討されています。また、異なる収容人数の教室のサイズごとに座席の前後関係の検討がなされ、配列や適正な平面寸法が探られています。さらに重要なのは、生田キャンパスの校舎は1964年と65年に竣工していますが、堀口先生にはすでに駿河台キャンパスの「6・7号館」（1958）や、和泉キャンパスの大教室棟「第二校舎」（1960）の設計の経験があったという点で、これらのデータと比較しながら計画が考えられています。検討が進んでいくと、収容人数に合わせて、具体的に柱のスパン割りと、座席の配列寸法が平面に落とし込まれていきます。

工学部で最初に建てられた「1号館」の初期配置計画を実施図と照らし合わせてみると、東西に約150mの幅がある生田キャンパスをきっちり5,000mmピッチで割っています。桁方向についても5,000mmで割っており、グリッドの座標系を敷地全体にわたってきれいに適用し計画を立てています。生田キャンパスにある「1号館」から「4号館」までの平面図を並べてみると「3号館」だけが6,000mmスパンでつくられています。マスタープランをつくったときは全体が5,000mmピッチのグリッド・モジュールで計画されていたから、これはちよっと不思議です。「3号館」は主に研究室が入っていた建物です。私自身が現在「4号館」を使っている経験からすると、5,000mmスパンの研究室は狭く感じます。研究室として使うに



シンポジウムの様子 ©篠田優

も内観も「真壁」の表現になります。壁が斜めですから、1間の壁をみると左右で柱の見込みが大きく違って現れることになります。この後の「2号館ツアー」のときに見ていただきたいのですが、当然ながら開口部のサッシュも斜めになります。柱は垂直ですが、スロープ、壁、窓、手すりの線が様々な角度で横切りますし、自分が動けば見え方が変わるので、視覚的に非常に面白い印象を与えています。またスロープを歩いて降りていくときには進行方向に柱の見込みが大きく、つまり彫りが深く見えますが、逆に昇ってゆくときは浅い表情になる。

こうして、一定の合理的な必然性をもって構造躯体とスロープや壁・窓が決められ、それが結果的に外観となっているわけです。ファサードをひとつの独立したデザインの対象とする概念は、ほぼないと言っていいと思います。

内部では、堀口先生は梁を露出するような設計は基本的になさらないので、天井が張られていました。教室側面の上部はルーバーで覆われて柱も隠れますが、その天端に天井が来ます。駿河台の「6・7号館」の頃からこのボキャブラリーで設計されていました。

ここで軒に注目して近代建築史を振り返ってみましょう。イタリアのルネサンス期の《メディチ・リッカルディ宮殿》（1484）のようなパラッツォ建築は、地面にめり込むように重々しく建っていますが、トップのコーニスを大きく張り出し、建物に堂々たる全体性を与えるのが流儀でした。これが都市建築の基本として脈々と受け継がれてきました。20世紀初頭に建築家オーギュスト・ペレはアカデミーの伝統を受け継ぎつつコンクリートのラーメン構造を採用し、ル・コルビュジエらに大きな影響を与えた人ですが、彼はラーメンフレームに古典的な比例秩序を与えつつ細部を消していったものの、

がいる生田「2号館」は、これを小ぶりにしたような建物だとイメージしていただけると思います。

われらが生田キャンパスは、かつて陸軍登戸研究所があった土地を明治大学が取得し、まずは農学部が移転して開設されました。当時の『明治大学新聞』には、各キャンパスの整備計画が進んでいく様子が報じられています。そのなかで生田キャンパスに関しては、原っぱを牛がゆったりと歩いている横で3－8階建ての白亜のコンクリートの校舎が建とうとしていると伝えられています。それが農学部の後にやってきた工学部の校舎です。

もうだいぶ前に取り壊された「1号館」（1964）と、製図室のある「4号館」に挟まれるかたちで、いま私たちのいる「2号館」（1965）と、やはり取り壊された8階建ての「3号館」（1965）があり、この4棟が工学部として一体的にプランニングされました。生田キャンパスに限らず明治大学の堀口作品は、1990年代の後半から次々に建て替えられていくことになりますが、逆にいえば、目まぐるしい変化の時代に半世紀以上も使われる環境を堀口先生たちはつくったわけです。

「2号館」を改めて見てみるととてもかっこいいですね。中庭側から見ると、階段から両側へ広がりながら緩やかに上がっていくバタフライ型の斜路が印象的です。両端部にワン・スパンだけ開放して階段を置いています。さらに先ほど門脇先生が紹介された通称「斜路棟」と呼ばれる「2号館」付属の斜路、そしてキャンパス内を走るブリッジを介してほかの建物に接続されていました。

プランを見ると、柱割りが均等に5mスパンです。これが堀口先生と明大建築学科のチームが生田キャンパスの工学部エリア全体を計画した際の基本グリッドでもあります。みなさんの右手に見える「A館」の建物は、もともとあった「1号館」を壊した跡地の半分に建てられたものですが、この建物もじつは長手方向のスパンは5mピッチを完全に踏襲しています。これが工学部エリアのモジュールとして継承されている。

ところで、いま教室上部を見上げていただければおわかりのように、この建物の短手は3スパン分の15mを飛ばす門型フレームになっていますね。日本建築のように、5mの柱間を「1間」と呼び、短手3間を「^{はり}梁間」とみれば、この門型の架構を「^桁桁行」方向に10個並べて、9間、45mの長い建物をつくっている、という見立てができます。9間のうち両端1間が階段ですから、残る7間を4間と3間に分けて、それぞれに3つ、4つの教室を積み上げている。階段状の教室を支える梁は、必要な位置に入れているので高さは様々です。外のスロープも必要な高さに梁を持ち出して支えています。

壁は音響に配慮して斜めに入るので、外観

とはまったく違う「量をどう扱うか」というテーマを、堀口先生に突きつけたのではないかというのが、私たちの研究の仮説です。

駿河台では、都心のキャンパスらしい計画がなされたことがよくわかります。戦前から存続した校舎の間に埋め込まれるようにして「8号館」（1955）が、次に拡張的に「6号館」「7号館」（1958）がつくられました。「6・7号館」ではすでに鉄筋コンクリート・ラーメン構造の躯体を露出させ、そのまわりに廊下や階段等の導線を巻きつけるというアイデアが具現化している。みなさんがいまいらっしゃる生田「2号館」の原型といえます。また、この「6・7号館」がイギリスの建築雑誌『The Architectural Review』1959年6月号に、「A University is Circulation（大学はサーキュレーションである）」という見出しで紹介されます。つまり大学では授業が始まる前に大量の人間が教室に吸い込まれていき、授業が終わると大量に吐き出されてキャンパスの中を移動するということを、日本のいくつかの大学、とりわけ明治大学における堀口の作品が非常に先鋭的な形で形態化している、これはヨーロッパにもアメリカにもない動向だと報じたのです。これを受けて、当時、明治大学堀口研究室の助手だった早川正夫先生が『明大新聞』（第831号、1955年11月5日）に、「大学建築の新しい方向／サーキュレーション・システムとは」という記事を寄せています。

次に郊外型のキャンパスとしての和泉の場合、中央の大きな庭を囲むようなプランニングがなされています。そのなかで鍵を握るのが、断面の中に大型の階段教室を取る和泉キャンパスの大教室棟「第二校舎」（1960）です。DOCOMOMO Japan「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」100選（2003）に選ばれていますが、たいへん惜しまれつつ解体され、現在は「和泉ラーニングスクエア」が、このアイデアを受け継ぐかたちで建てられています。「第二校舎」は、サーキュレーションを外に巻きつける形式でつくられた大型の建物です。たいへんなエネルギーを込めて設計が進められたことがわかる分厚い資料が残されています。この建物には、全体で3,800人、一番大きな教室では900人収容できる、とてつもない大きさの教室が断面の中に組み合わさっていました。学園祭の風景を見ると、建物立面の斜路と前面広場の両方に学生たちがひしめいていて、90度折れ曲がった2つの面が一体的に場をつくっているように感じられます。堀口先生も、安全性を確保しながら大勢がスムーズに動くための建築をつくる、すなわちサーキュレーションという問題がたいへん重要であり、同時にそのことが表現になりうることをはっきりと自覚されて文章を書いていらっしゃいます。それが、和泉「第二校舎」（大教室棟）の発表時に書かれ、『建築』1961年1月号に掲載された「遠心的動線が創り出すもの」です。いまみなさん

堀口捨己の明大校舎建築——特に2号館の意匠について

青井哲人

Akihito Aoi

本学教授〔建築史・建築論研究室〕

もともと生田キャンパスの図書館には、堀口先生や堀口研究室の手がけた図面や執筆された書籍、書簡や写真などの資料が所蔵されておりました。これらの膨大な資料は、本日会場にお越しになっていらっしゃいます、本学建築学科の元教授である木村儀一先生と、東京工業大学（現・東京科学大学）名誉教授の藤岡洋保先生が、堀口捨己アーカイブスを組織し、整理、保存、管理にあたってこられました。2024年に文化庁国立近現代建築資料館に移管され、管理公開が進められることとなりました。さらに両先生のご尽力により、明治大学のキャンパスと校舎に関する資料については、展覧会、研究、出版等に際して、われわれ明治大学の優先的使用が許されることとなりました。こうした前提があり、この研究が進んできたことを、最初にご説明させていただきます。

この夏に行なわれた「堀口捨己と明治大学校舎建築1955－65」展のタイトルにある「1955年」は、堀口先生の設計による最初の明大校舎が竣工した年で、「65年」は堀口先生が本格的に関わられた校舎が最後に竣工した年、つまり生田キャンパスのこの建物が建てられた年になります。現在、同展を基にした書籍『堀口捨己と明治大学校舎建築1955－65―戦後社会と近代建築の交差／交錯』の刊行準備を進めています。

堀口先生の経歴を振り返ると研究と設計の両面において非常に豊かな成果が実っている時期があります。ひとつは戦前の1920年から1940年、つまり「分離派建築会」結成（1920）から「日本工作文化連盟」を創設（1936）の頃までで、当時、堀口先生が、若いモダニストたちを引っ張る論客として活躍していた頃です。もうひとつは1950年から70年までの多作な時期です。この間、日本においては工業化社会への転換が急激な経済成長を促して都市人口が膨張し、高等教育が一挙に大衆化して各大学の学生数が爆発的に増大していきます。そうしたなかで、堀口先生の明治大学キャンパスの計画が進められた。そのことが、戦前の近代建築

はなるべく広いほうがいいのではないかと、当時の先生方のご要望があったのかもしれませんが。すなわち、実施段階になってなんらかの事情で5,000mmでは厳しいという判断がなされ、「3号館」だけは最終的にはイレギュラーな寸法割になったのではないかと推察できます。

現在でも当時のキャンパスの名残りを見ることができます。「2号館」の「斜路棟」の柱が根元で切られて補修されていますが、その結果トマソン化（無用化）しています。「1号館」を取り壊してできた「A館」と接する外構がコンクリートの床になっていて1,000mm角の目地割り5つ分で、すなわち5,000mmモジュールの痕跡がキャンパスの中に認められるのです。この後のツアーで実際に見ていただければと思います。

生田キャンパスは多摩丘陵の端に位置し、南北に5mほどの高低差がある斜面が続きます。断面の高さ方向の検討図を見ると、斜面に対してどう階段を設定し、スロープなどでどう高低差をつないでいくかがよく考えられています。低い北側に高い建物を配置することで垂直方向の移動の負荷を軽くする意図があったと推察できます。

最後に配置計画の変遷について見ていきます。堀口研究室の助手として生田キャンパスの基本計画に携わっておられた宮崎孚さんが『近代建築』1965年6月号に書かれている原稿には時系列が示されていなかったのですが、図面から計画の変遷を推測することができます。初期案（フェーズ1）では並行配置の考え方を採用しています。さまざまな教室群、事務室や実験室など、各室の関係性を考慮しながら、配置したことがうかがえます。

次の案（フェーズ2）では、「3号館」と「4号館」の西側に大きな口の字型の平面をもったボリュームが新しく計画されています。東西に5,000mmグリッドが敷かれ、それを頼りに柱の割り付けを考えていったことがわかります。この過程では並行配置と口の字の囲み型の中庭をハイブリッドで

考えていたのだと思います。すごく面白い案です。

最終案（フェーズ3）では並行配置に戻ります。先ほどの口の字型のプランの図面を下敷きに、色鉛筆で上書きしながら検討している様子がわかります。フェーズ1とフェーズ3では、各「部門」の配置がそっくり入れ替わっています。初期案では、「学生実験室部門」が南側にあり「事務管理・研究室部門」「小教室群」が北側にありました。最終案では、「事務管理部門」「研究室部門」は分かれ、それぞれ中央広場のそばにある。「学生実験室部門」が一番北側にあって、「3号館」は、4層の建物の上に平面をつくって広場的な機能をもたせ、さらにその上に浮かせたボリュームを5層乗せた大規模な高層棟としてまとめられました。やはり、キャンパスとはサーキュレーションであるというお考えが堀口先生の頭に強くあって、例えば、学生の大教室や研究室、事務室への移動は頻度が高く密になるので、初期案で北側にあった「事務管理部門」「研究室部門」をなるべく広場に近づけたかったのではないかと考えられます。さらに「斜路棟」は、学生が移動するアクティビティが頻繁に表出する空間として表現されています。

今日はお別れの会ですので、「2号館」の個人的な思い出を最後にお話いたします。私が明治大学に着任したのは20数年前ですが、当時、木村儀一先生にこの「2号館」の天井のデザインについて説明を受けた記憶があります。堀口先生の生田キャンパスの校舎の場合、デザイン的な色気はほぼ感じられません。唯一非常に意匠が凝らされているのは天井ではないでしょうか。例えば、大教室では、厚みの違う天井の仕上げ材を貼ることで（あるいは2枚貼りの箇所を設けることで）市松状にしています。柔らかな曲面をもち大きなトップライトがある、このような堀口先生の天井については、当時から気になっていました。いまは設備の更新がたいへんという理由で、この天井は剥がされてしまいました。この天井の元になっているのが、和泉キャンパス「第二

校舎」の大教室です。生田は基本的に教室はすべて同じ向きで積層されています。黒板が同じ方向にあり、中央の界壁を基準に左右対称になる。一方、和泉は高さが限られているので教室の向きを互い違いにして、天井の懐などの無駄をできるだけ排除し階高を抑えることで収めています。天井に梁形を見せたくないという意識は当然あったと思うのですが、大教室以外では悪戦苦闘した形跡があります。それでも傾斜をもった床と天井をうまくデザインして収めていこうという意図が随所に見られます。

和泉キャンパスの「第2教室」の天井伏図を見ると、それぞれ最上階の大教室にはちよつとずつ違った天井の意匠を与えて、上から光を採り入れています。トップライトをつけて、ハイサイドから採り入れた光を真下に落としていくというアイデアは生田の「第二校舎」より前に和泉「第6教室」でかなりのスタディが検討されて、そこで確立した方法を使っているのだと思います。

生田第二校舎 2号館の音環境・ 光環境計画

上野佳奈子

Kanako Ueno

本学教授【建築環境計画研究室】

これまで、生田キャンパス第二校舎「2号館」を実際に使うなかで、両側採光、遮光用ルーバー、要所の吸音など、教科書で教わる基本的な要素が基本に忠実に設計されているという印象を抱いてきました。今回改めて、藤岡洋保先生の『表現者・堀口捨己―総合芸術の探求』（中央公論美術出版、2009）で設計の考え方を確認したところ、「最大で700人を収容する大教室であつてもマイクなしで授業できることが求められた」とあり、驚愕しました。「大教室では、採光・照明・音響が重視されたので、それに対応すべく断面が段状になった天井がつくられ、そこに照明が組み込まれた。そして高窓にはルーバーが配された」という記述もあります。

具体的に見ていきましょう。光環境は、両側に採光を取ることで教室内の照度ができるだけ均一になるようつくられています。可動ルーバーは詳細な設計がなされており、今日もルーバーの角度を前方と後方で変えて採光、遮光しています。最上階ではトップライトの四方に窓を設けつつ、直射光を遮る装置がついています。四方の窓脇にある内部改め用の扉を開けることで、大教室の夏季の換気に利用する構想もあったようです。

次に音環境についてお話します。平行面間



梁の上に載るトップライト © 小林正人

ではフラッターエコー（音が壁と壁の間を繰り返して反射することで起きる音響障害）が出ますが、それを防止するために、内装で処理するのではなく、構造壁がハの字型に入っています。こうした例はたいへん珍しく、なぜ構造壁を斜めにしてまでエコー対策をしたのか疑問に感じるところです。そこで堀口先生が明治大学の校舎の設計に携われた1955年から1965年頃の音響設計に着目して時代背景を振り返ってみます。

日本では、前川國男先生設計の《神奈川県立音楽堂》（1954）頃から本格的な音響設計がなされたホールが建ち始めます。同時代に建設された《旧NHKホール》（1955）は、現在、世界的に活動されている永田音響設計の創設者である永田穂先生が、NHK技術研究所在籍時代に手がけられたものです。永田先生は、後に「音響設計の資料といえば、限られた吸音材の吸音率資料くらいしかなかった」（『永田穂建築音響設計事務所News』95-9）と振り返っていらっしゃいます。

一方、《神奈川県立音楽堂》は、1954年から1989年まで長きにわたって明治大学の兼任講師として建築計画原論と建築音響特論を受けもっていた石井聖光先生が音響設計を担当されています。当時は新しい資料がないなか、1951年にロンドンに竣工した《Royal Festival Hall》の音響設計報告を参考にしながら、「工事の最終段階で何度も音響測定を行い、問題点を見つけて修正工事を行う手法」（「私と音との関わり」『日本音響学会誌』〔67巻2号、日本音響学会、2011、pp.94－95〕）を踏襲しプロジェクトを進めたそうです。ここで採用されているのが側壁がジグザグの形をした屏風折型の拡散体です。

石井先生は同じ時期に、1961年の火災によって焼失した重要文化財である日光東照宮の本地堂（薬師堂）の復元に合わせ、天井に描かれた「鳴き竜」の研究と復元を手がけていらっしゃいました。天井を水平な平滑面にすると中央が垂れ下がって見えてしまうので、左官の技術で平ら

に見えるように中央に「むくり」（曲線）をつけるのですが、この「むくり」の影響で音が反響することがわかり、どのくらいの数値で「むくり」をつけると竜が鳴くのかを4分の1の縮尺の音響模型実験を行なって検討し復元したそうです。また、村野藤吾先生設計の《日生劇場》（1963）での音響設計を担当された石井先生は、やはり10分の1の縮尺音響模型実験を行なっています。

こうして、音楽ホールでは音響が美しく響くような設計を追求され、「鳴き竜」現象（音の往復反射）が生じる天井の形や大きさを検証された石井先生が、教室の設計でエコーを避ける方法を検討された結果、ここ生田キャンパス第二校舎「2号館」の斜めの壁が提案されたものと考えられます。普通は内壁で音響の拡散効果を出していきますが、厳しい予算の制約のなかで、構造壁に音響的な機能をもたせる設計が取り入れられたのでしょう。このような視点をもって改めてこの校舎を見てみると、この斜めの壁の見え方もまた変わってくるように思います。

生田第二校舎 2号館の構造計画

小林正人

Masahito Kobayashi

本学教授【構造力学研究室】

和泉「第二校舎」と比較することで、この生田「2号館」の特徴を構造計画の観点から示していきたいと思います。

今年の建築学会の大会に際して「堀口捨己と明治大学校舎建築1955－65」展を建築学科で企画しました。展示パネルには、この生田のプロ

ジェクトは、教員チームを含む組織性の高い仕事として捉えるべきものとありましたが、私もまさにその通りと思っています。実際にこの生田キャンパス校舎の構造設計は、当時の建築学科の構造分野の教員が行ないました。「1号館」を鉄筋コンクリート（RC）構造の大家である狩野芳一先生が担当されました。現役教員との関係で言いますと、小山明男先生の師匠のひとりになるうかと思っています。「3号館」は木質構造で著名な杉山英男先生の手によるものです。梶川久光先生の先生である野口弘行先生の先生にあたります。「4号館」は製図室がある建屋で、亀田登与三郎先生が担当されました。長らく小倉弘一郎先生の助手をされており、明建会の会長も務められました。私は亀田先生から応用力学を習いました。そして「2号館」を担当されたのが小倉弘一郎先生です。小倉先生のご専門もRC構造です。高強度鉄筋や異形鉄筋の開発普及に多大な功績のある先生で、現在私たちがRC造建物の建設にあたり異形鉄筋を使うことができるのは小倉先生のおかげといっても過言ではありません。また1968年に十勝沖地震が起こった際にはRC柱のせん断破壊が大きな問題になりました。その教訓を踏まえ1971年に建築学会のRC規準が大改定されています。それを主導されたのも、当時のRC構造研究の泰斗といわれた小倉先生でした。「2号館」の設計については堀口先生と小倉先生との間でどのようなやり取りがあったのかを私は残念ながら存じませんので、これからお話しする内容は私の推測であるご理解いただければと思います。

調査に際し、構造図面はすべて国立近現代建築資料館からお借りしました。「2号館」の床伏図を見ると、大きな教室が2つ配置されています。ここ「2003教室」は、15m×25mで2層の吹き抜けになっています。この建物全体は上に行くほど教室のボリュームが大きくなり、下に行くほど荷重が大きくなって柱が増えるので、構造計画の観点からは常識的な配置になっていると言えます。建物の短手方向はスパン15mのワン・スパンのラーメン架構になっていることも大きな特徴です。これを長手方向に5mピッチで配置し、1架構あたりの負担荷重をうまく制御することで、無柱空間の大教室を成立させるシステムになっています。

次に和泉の「第二校舎」の構造図です。構造システムはほぼ同じなのですが、和泉「第二校舎」は、20mの大スパンで、生田より5m大きい。そのためラーメン架構の配置は4mピッチになっています。このことから堀口先生が重視された5mグリッドと強く調和しているのは、生田の「2号館」だということが構造計画の観点からもわかります。

ここからはスパンに着目したいと思います。15mスパンというのは当時のRC構造の限界に近いです。私はこの建物を30年近く見てきて、ずっとRC構造と信じてきたのですが、このシン



生田キャンパス A館前外構 5m × 5m モジュールの痕跡 © 大河内学

ポジウムの準備を進めるうちに、本当にRC構造なのだろうか、中に鉄骨が入っている鉄骨鉄筋コンクリート（SRC）構造なのではないかと疑問をもちはじめました。考えてもわからなかったので、国立近現代建築資料館に行って構造図を見たところ、30年近く思い違いをしていたことがわかりました。生田の「2号館」はSRC構造でした。梁の内蔵鉄骨は当時主流だったラチス形のものです。ウェブが開いていますので、現代的な言い方をするとは非充腹形となります。アングル材とフラットバーを組み合わせて製作されています。工期やコストの面から有利なRC構造の検討もなされたと思いますが、最終的にSRC構造が選択された理由について私なりに考えてみました。

ひとつ目は、堀口先生が設計された《常滑市立陶芸研究所》（1961）でも用いられている巨大なトップライトの存在です。生田「2号館」では、蝶が羽を広げたような形なので、構造図にはバタフライと書かれています。このトップライトは柱のない梁のちょうど中央に載っています。RCのボリュームで換算すると、20t程度はありそうです。このバタフライを支持するには、やはりSRCでないと難しかったのではないかと思います。

2つ目は、みなさんがいまいるこの「2003教室」です。1スパンで2層の吹き抜け空間となっており、大梁は、先ほどのバタフライを背負いながら、非常に大きな荷重を伝達しなければなりません。それを受ける部材は、いま見えているワン・スパン架構の柱だけです。外廊下はありますが、向こう側にそれを受ける梁がないのでたいへん厳しい。しかもこの柱は10mもありますので、梁が内側に倒れ込むような挙動を柱だけで曲げ戻さなければならず、やはりRCでなくSRCでないと十分な剛性、耐力が確保できなかったというのが、私の見立てです。一方、このようなシビアな条件下でも、SRCを採用したことによって、梁せいは1.2m程度に抑えられています。15mスパンに対して、約12分の1という値です。現在は天井が張られていませんけれども、このことによって、十分な天井の高さが確保されて、開放的な教室が実現されたのだと思います。

これまで鉛直荷重に着目してきましたが、水平荷重、主に地震荷重にどう抵抗しているのかを見ていきます。構造図で「2003教室」の長手方向の梁の記号を見るとすべて小梁（B梁）でした。つまり、長手方向の地震荷重に対しては、外壁に面する2つのラーメン架構だけで抵抗していることになります。外側に耐震補強のブレースが付いており、この構面の延長上に鉄骨ブレースがあるので、間違いないと思います。

短手方向については、3構面に壁が入っており、耐震壁で抵抗する計画になっていると思われます。特にこの教室の境、黒板の裏側に非常にダイナミックな耐震壁を見ることができます。これは耐震計画上、極めて重要な部材です。仕上げがなく型枠の跡がはっきり見え、当時の施工状況などもよくわかるので、見学の際にぜひご覧

になってください。

最後に柱です。生田「2号館」の主な柱断面は650×800mmで、一番外側の柱は650mm角の正方形の断面です。内側の柱は、この教室から外壁側に向けて150mm柱が太くなっています。外側に断面をふかして断面二次モーメントを大きくし、効率よく抵抗させようとしたことが見てとれます。和泉「第二校舎」では600×800mmですので、生田「2号館」の柱の見付け幅が50mm大きい。外壁構面で地震荷重をすべて負担するためには、柱断面を大きくしなければならなかったと考えられます。生田「2号館」の柱のピッチは5mです。見付け幅が650mmで、結果として構造骨組みがより強調されたたくましい印象になっています。この柱のピッチと見付け幅は、屋上のバタフライとともに、「2号館」の意匠上の特徴を形づくっていますが、これらは構造計画上の工夫と工学的な判断によってもたらされたものと考えられます。

● **門脇** 構造計画についてチーム性の高さが認められましたが、じつは意匠においてもチームの連携がなされていました。基本計画を堀口研究室が行ない、実施設計を早川正夫先生や高橋競一先生をはじめとしたお弟子さんたちが手がけていらっしゃいます。これまでは、この建物じたい堀口作品のなかでは高い評価がされてきましたが、非常にユニークな設計手法であるだけでなく、建築物としても、日本近代建築史、あるいは世界近代建築史のなかでも極めてユニークだと指摘できるのではないのでしょうか。われわれからの話題提供は以上になりますが、じつはお別れにあたり、学生の有志グループがこの校舎の特徴を捉える映像を作成しました。最後にその映像を見ていただくとともに、監督を務めた大学院博士前期課程2年生の川本航佑さんに解説いただきます。

〔4分間の映像上映〕

● **川本** 動画の場合、基本的には動きがある対象を撮ることが多いと思います。建築は動くことではなく、だからこそスチール写真が支配的なメディアでした。ただこの「斜路棟」の場合は、人の移動を誘発する、あるいは人の運動があることによって建築たりうる建築だと考えていますので、人間が動いていく過程で建築が「光景」になるあり方を映像で表現しました。

最初の全体を撮ったロングショットでは、「斜路棟」の全容を説明すると同時に、人の歩く行為に宗教性、あるいは演劇性を帯びさせることを意識しています。これは堀口捨己先生が大学建築を設計する際に、西洋における修道院を日本的に解釈しているとも思えることと関係しています。演出家・映画監督のピーター・ブルックが著書『なにもない空間』の冒頭で、なにもない空間を人間が歩いている姿を別の人間が見

つめるだけで演劇になると述べていますが、「斜路棟」はそういった特性を限界まで引き出すような建築であり、それらをカメラを用いて観測的に描いていくことを意識しています。例えば何日もかけてこの建築を撮影することで、天候によって建築がさまざまな表情を見せていきます。そういった偶然カメラに収められた小さな出来事の集積から「斜路棟」が生み出す群像劇的なものを映像で表現しようと意図しています。

● **門脇** 映画的な一瞬が現われる点に着目して建築を映像化した作品でした。修道院が大学建築のモデルになっている一方で、この校舎は並行配置という近代的な手法でつくられています。しかし、外側に廊下があって、中庭を挟んで「斜路棟」があることによって、修道院の回廊型の空間がここに復活しているとみることもできるのではないのでしょうか。



本稿では触れられなかったが、4題の講演と映像の紹介のあと、質疑、見学ツアーに続き「2号館の思い出を語る会」が開催され、多くの参加者でにぎわった。現役の学生・教員ばかりではなく、幅広い世代の卒業生の参加者が見られたことは、2号館がいつの時代も生田キャンパスの象徴であり続けたことを物語っている。外廊下や斜路に展開する学生の活動で彩られた2号館は、使用の停止までまさに「生きられて」きたのだ。

2025年6月現在、立ち入りが禁止され、学生の姿がなくなった2号館では、解体工事が始まっている。仮囲いとともに、斜路棟の真横にあった立派な桜の木が、解体の邪魔になるからだろうか、何の予告もなく切り倒されてしまった。ひとつの時代と風景が、いまはかなく消えゆこうとしている。

門脇耕三



堀口賞

宇宙 トウキョウ わたし
佐藤萌

建築学科賞

首都圏郊外の漸進的コモンズ化計画
—— 田園都市 2.0
中村颯

優秀賞

赤い部屋
藤原李葉

記憶と寛容のブリコラージュ
—— 飯田市安東邸はなれの改修プロセス参加を通じた地域活性化への挑戦
片岡学飛

水へのもたれかた
後藤雄大

生稜賞

水へのもたれかた
後藤雄大

津川賞・中村賞

私は、
大田祥悟

佳作

人々と共に自給する郊外型スタジアム
—— みちを介した資源循環のデザイン
中野耕太郎

show-window recipe
—— 「見せる」から始まる新しい生活を
奥畑稜

備えあれば慰いあり
—— 仮設住宅の公園備蓄
神崎彩

共有する食行動
—— 住み方調査による食空間の模様替え
喜入終介

十六号線漂流記
我田蒼弥

Solefulから Soulfulへ
—— 視覚障害者が認知する多覚的都市
高橋直仁

堀口 寛
JIA 神奈川コンクール 出展作品
HORIGUCHI Award
Selected Work
for the JIA Kanagawa Contest

宇宙
トウキョウ
わたし

佐藤 萌
Moe Sato

Profile

- ・2002年
埼玉県生まれ
- ・2021年
埼玉県立所沢北高等学校 卒業
- ・2025年
建築計画(連)研究室 卒業
- ・現在
明治大学大学院同研究室 在籍

作品データ

- ・建物用途:
時計台、歩道橋、地下鉄出口、バス停、
仮設物
- ・敷地所在地:
東京都港区
- ・作品総点数:
A1 図面9枚、模型5点

・設計主旨

わたしが空を見上げるとき、頭上を太陽が回る。

1958 年ランドマークとして建設された当時日本一の高さを誇る鉄塔は、年間を通してさまざまな場所に影を落とす。時間の経過とともに、塔の周辺は変化するが影は今日も変わらず、私たちは無関係に動き続ける。それは太陽と塔の関係であり、その影の中に入り込んだ私たちは間接的にもその一部始終を目撃する。言わば「日食」の観測者となる。

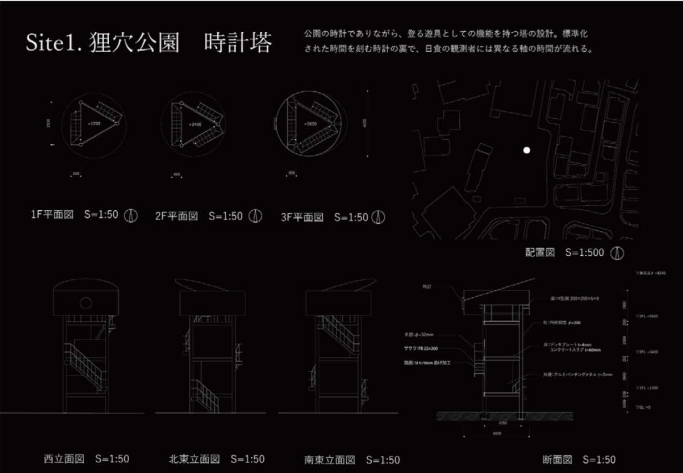
太陽は光を飛ばし、建築物は影を投げかける。

観測地で、私たちは影の中に入ると同時に、塔に隠れた太陽の存在に気づき凝視を始める。それは日食という遠く離れた複数の時間の重なり合いの瞬間であり、向き合いの場となる。そして、私たちの中を流れるゆったりとした時間は、見れば見るほどに引き延ばされてゆく。

わたしが空を見上げるとき、私たちは太陽の周りを回る。

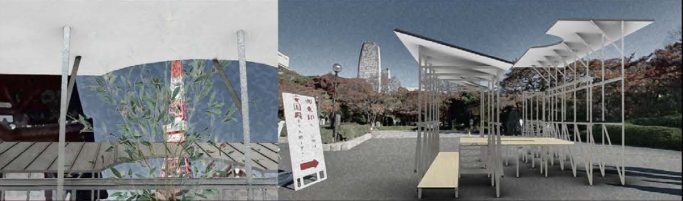
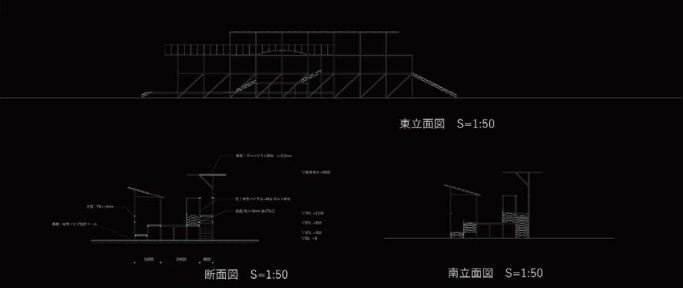
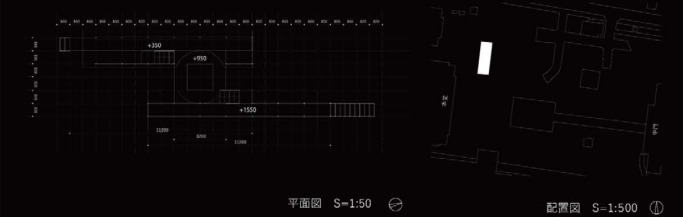
・講評

太陽、東京タワー、身体という三つの異なる存在が建築によって関係づけられ、相互の影響関係が自覚化されるとき、「覗く」という極めて素朴な行為が突如として人間の構想力を極限まで高める崇高な行為へと転化する。



Site2. 増上寺

七夕祭りの時期に設置される仮設構造物。期間に照いを置き、塔に接する際の足場となる。構造物と本堂、塔とそれにかかる構造物によって日食は見え隠れする。



宇宙

uchu

トウキョウ

tokyo

わたし

watashi

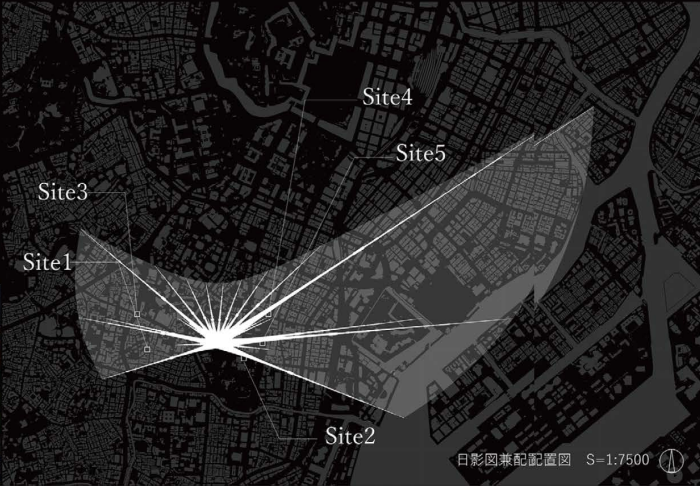
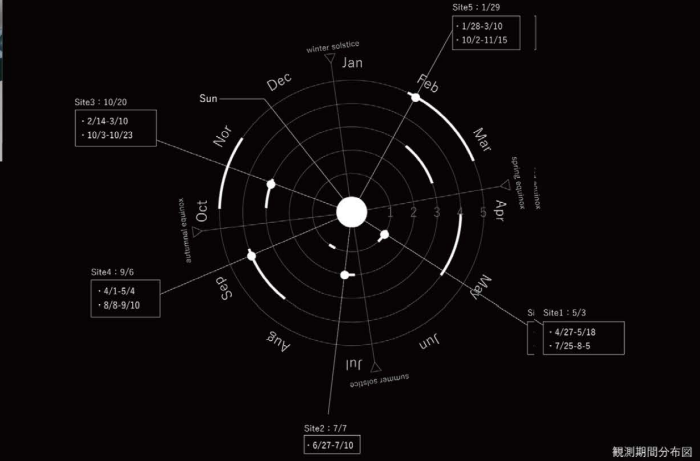
わたしが空を見上げるとき、頭上を太陽が回る。

1958 年ランドマークとして建設された当時日本一の高さを誇る鉄塔は、年間を通してさまざまな場所に影を落とす。時間の経過とともに、塔の周辺は変化するが影は今日も変わらず、私たちは無関係に動き続ける。それは太陽と塔の関係であり、その影の中に入り込んだ私たちは間接的にもその一部始終を目撃する。言わば「日食」の観測者となる。

太陽は光を飛ばし、建築物は影を投げかける。

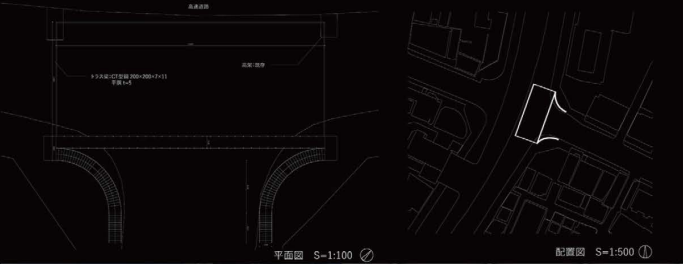
観測地で、私たちは影の中に入ると同時に、塔に隠れた太陽の存在に気づき凝視を始める。それは日食という遠く離れた複数の時間の重なり合いの瞬間であり、向き合いの場となる。そして、私たちの中の中を流れるゆったりとした時間は、見れば見るほどに引き延ばされてゆく。

わたしが空を見上げるとき、私たちは太陽の周りを回る。



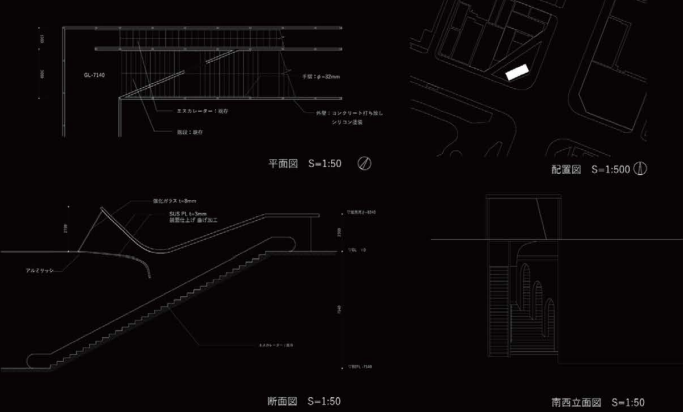
Site3. 飯倉片町交差点 歩道橋

飯倉片町交差点にかかる歩道橋の設計。タワーの影と、そこに入り込む自分自身の影をフレームが切り取る。フレームは高速度道路の高架の構造体に依存する。



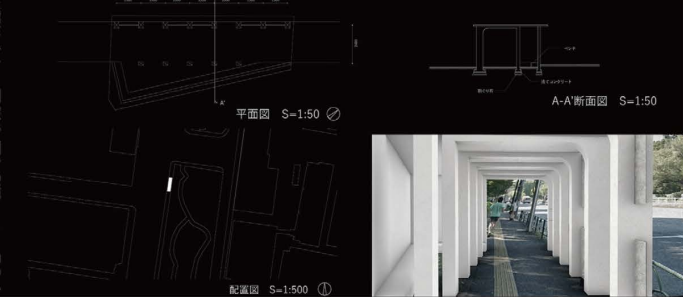
Site4. 御成門駅 A5 出口

地下鉄御成門駅の出口の改修。登りのエスカレーターで、空を覗き後ろを振り返ると日食に出会う。

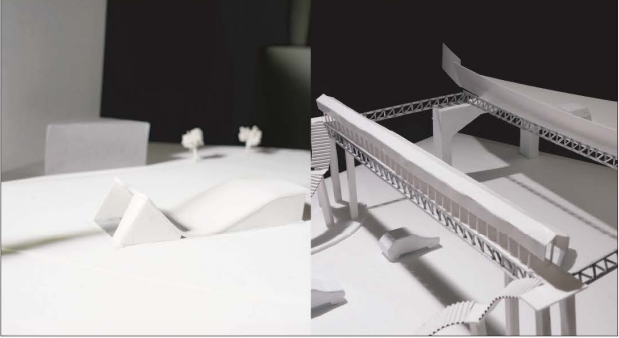
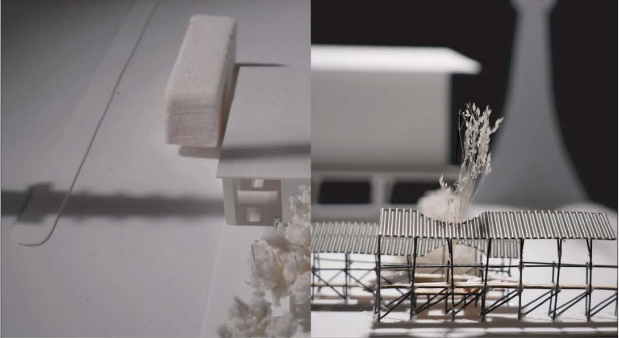
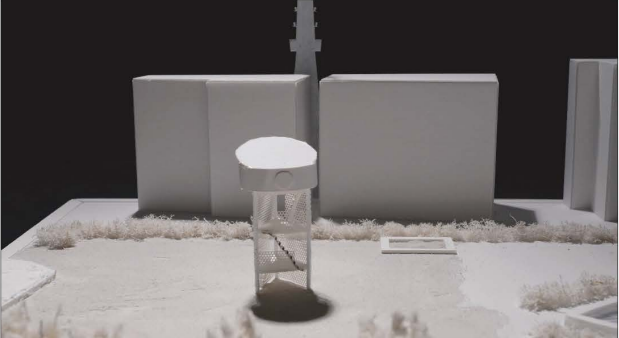


Site5. 港区役所前 バス停

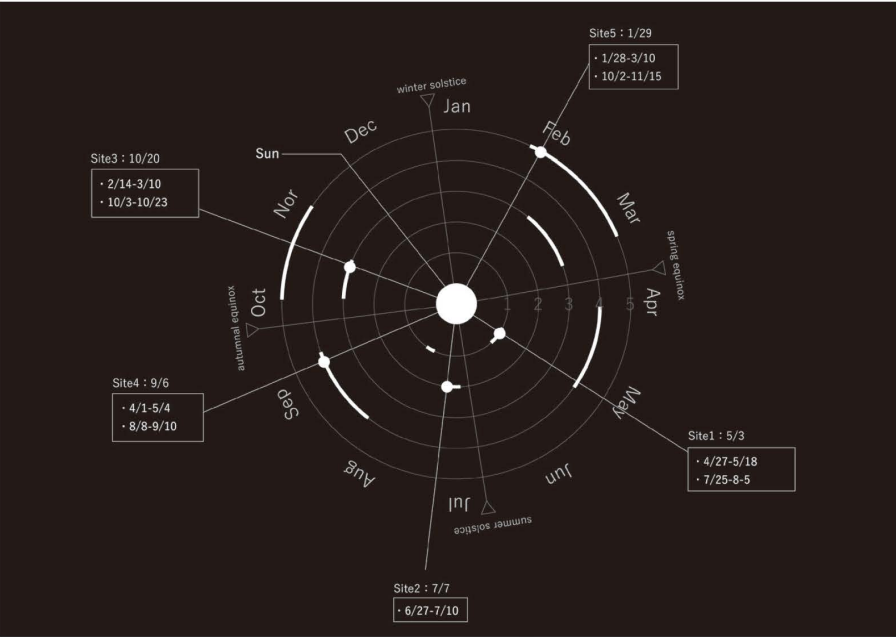
港区役所前バス停の設計。バスを持つその間、ベンチに座り日食を観測する。通行する車、歩行者によって視線は断続的に遮られ、日食という異なる時間と重なりあうリズムを生み出す。



4



5



1



2



3

1. 日食期間分布図
2. 日食する東京タワー
3. 日影図兼配置図
4. 模型(全体)
5. 模型(部分)

首都圏郊外の の漸進的 コモنز化 計画

田園都市 2.0

中村颯

Hayate Nakamura

Profile

- 2002 年
神奈川県生まれ
- 2021 年
国立大学法人東京工業大学附属
科学技術高等学校 卒業
- 2025 年
地域デザイン(川島)研究室 卒業
- 現在
明治大学大学院同研究室 在籍

作品データ

- 建物用途:
首都圏郊外住宅地のマスタープラン、
複合施設(ファブ工房、レストラン、
町内会施設、資源ヤード、オフィス、
直売所、住宅等)
- 敷地所在地:
神奈川県川崎市麻生区はるひ野
- 作品総点數:
A1 図面 12 枚、模型 4 点

設計主旨

本計画は、首都圏郊外の緑地
管理や空き家等の課題に着目し、「街のストック」として活用し、
新たな暮らしのあり方を提案する。田園都市構想を現代的に
再解釈し、「交通」「ストック」「コモ
ンズ」の三要素を基盤とした「田
園都市 2.0」を提示し、世代交代
前の「はるひ野」で、再開発に頼ら
ない漸進的な改善による持続
可能な都市を目指す。空き地・
空き家を「フィールド」・共有の生
産機能」に改修し、「コモنز」とし
て活用することで、コミュニティの
発展と共に多様な形態のコモン
ズが形成され、さらにその多様化
によって街全体の資源循環を促
す拠点施設を計画する。「はるひ
野」での実践を通じて、同様の課
題を抱える首都圏郊外の新た
なモデルとなることを目指す。

講評

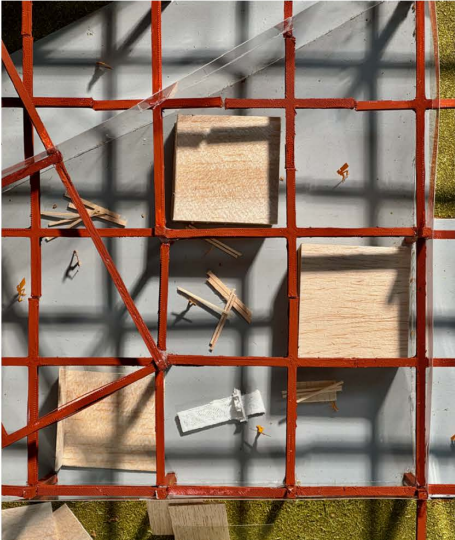
都市と里山の中間的存在であ
る郊外に対し、再開発に頼ら
ず、都市の時間的変容を受け
入れながら、コモنزの形成を
通じて新たな暮らしのビジョン
を示す提案。現代にマスター
プランを臆せず提示する姿勢
を高く評価したい。



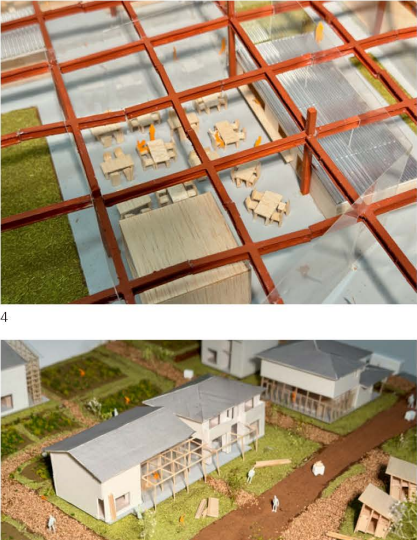
1. はるひ野の現況
2. はるひ野の未来
3. 拠点施設:資源のフローを支える拠点施設のファブ工房



4. 拠点施設:食のフローを支えるレストラン
5. 住区:住区に引き込まれた共生里山と住宅の一部を改修した製材所
6. 住区:空き地を活用した畑と住宅の一部を改修した加工場



7. 住区:空き地を活用した畑と住宅の一部を改修した加工場
8. 住区:空き地を活用した畑と住宅の一部を改修した加工場



9. 住区:空き地を活用した畑と住宅の一部を改修した加工場
10. 住区:空き地を活用した畑と住宅の一部を改修した加工場



11. 住区:空き地を活用した畑と住宅の一部を改修した加工場
12. 住区:空き地を活用した畑と住宅の一部を改修した加工場

優秀賞

Award of Merit

赤い部屋

藤原李菜

Momona Fujiwara

Profile

- 2002年
埼玉県生まれ
- 2020年
沼津高等学校 卒業
- 2025年
建築史・建築論(青井)研究室 卒業
- 現在
明治大学大学院同研究室 在籍

作品データ

- 建物用途:
劇場
- 敷地所在地:
東京都町田市
- 作品総点数:
A1図面12枚、模型1点、映像1本
作品上演

設計主旨

演劇の最大の特徴は、観客がリアルタイムで認知する全ての情報が観劇体験に影響を与える点である。多様なエンタメが溢れる現代において、演劇ならではの周辺環境を広く取り入れた公演を提案する。

お客さんは「赤い部屋」で語られる話に想像を膨らませることで完全に閉ざされた空間でなくとも人々を物語へと引き込んでいく。

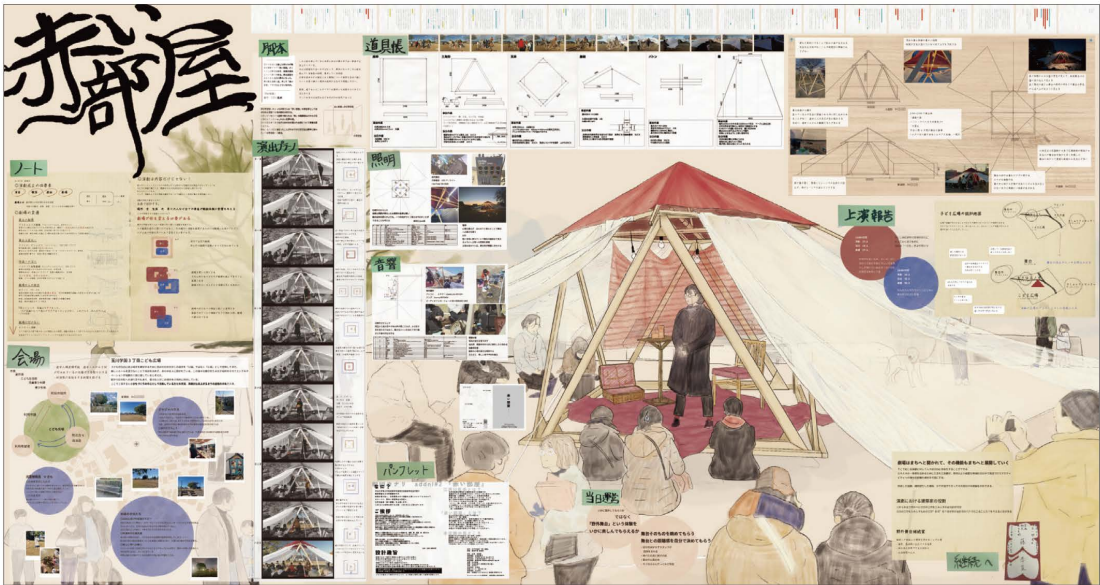
開催地であるまちの情報や風景、文化、人々の営みを反映し、舞台の形や内容は土地の特性に応じて柔軟に変化し、まち全体が劇場となる。

観客はその土地周辺の環境や地域住民とのつながりを感じる観劇体験をすることができる。

講評

野外演劇は珍しくない。この試みの面白さは、演目の特性も活かしながら、芝居小屋によって住宅地に同心円状の複層的領域をつくり、小屋をその一部とし、そして日常を演劇化したことだ。これが来場住民の絶賛を得た。

- 客席から役者が舞台へ上がる
- 役者が客席からも話し客席の境界を越える
- 小道具を出すことで場面を変化させる
- 客席にいたスタッフが舞台の境界を越えてくる
- 役者が街に向かうことで非日常が日常に紛れ込む
- 終演後にお客さんと会話をする時間を設ける
8. 当日配布したフライヤー



7



8



9

優秀賞

Award of Merit

記憶と寛容のブリコラージュ

飯田市安東邸はなれの改修プロセス参加を通した地域活性化への挑戦

片岡学飛

Manato Kataoka

Profile

- 2002年
静岡県生まれ
- 2021年
浜松日体高等学校 卒業
- 2025年
建築・アーバンデザイン(佐々木)研究室 卒業
- 現在
未定

作品データ

- 建物用途:
地域拠点
- 敷地所在地:
長野県飯田市
- 作品総点数:
A1図面12枚、模型1点

設計主旨

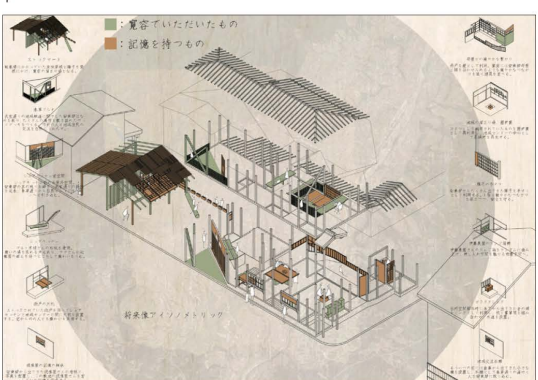
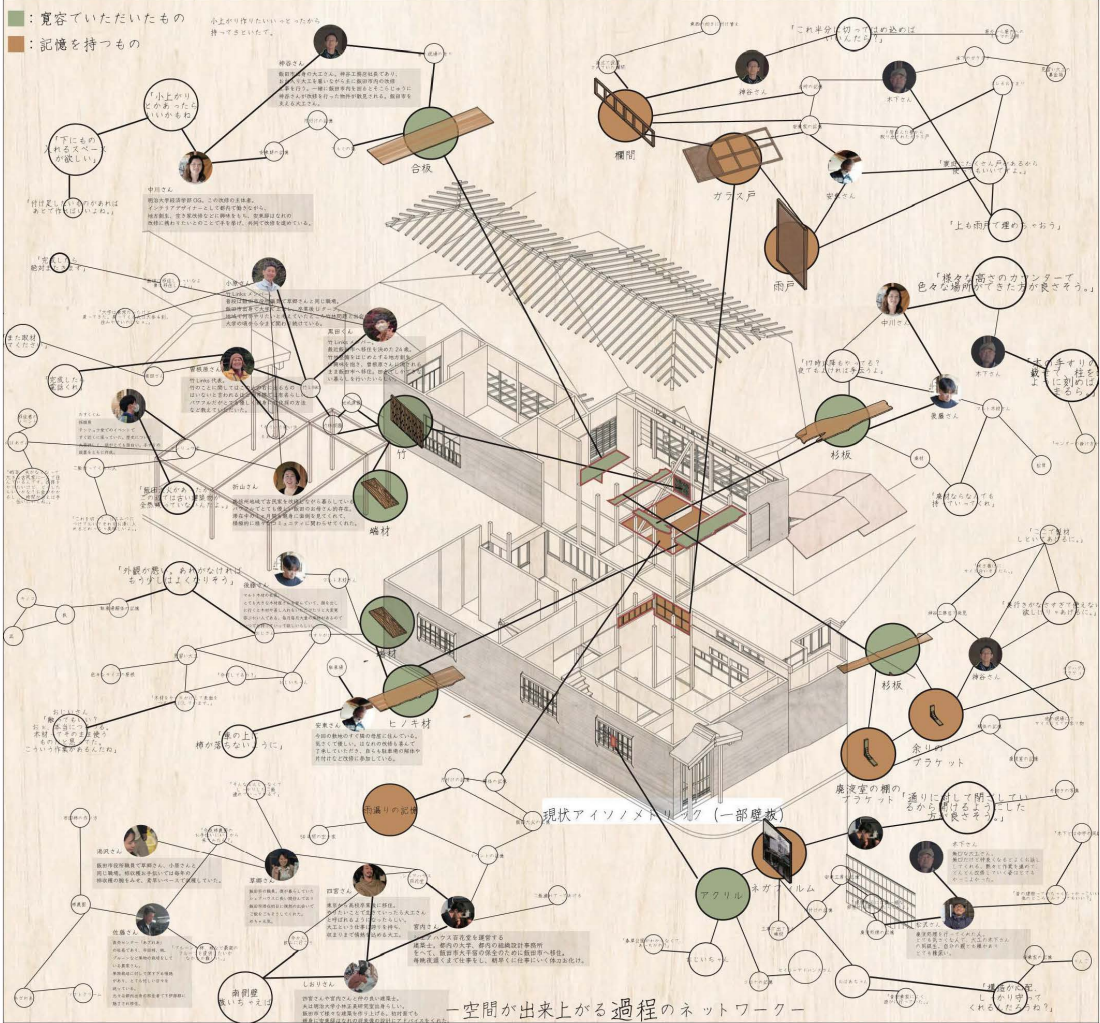
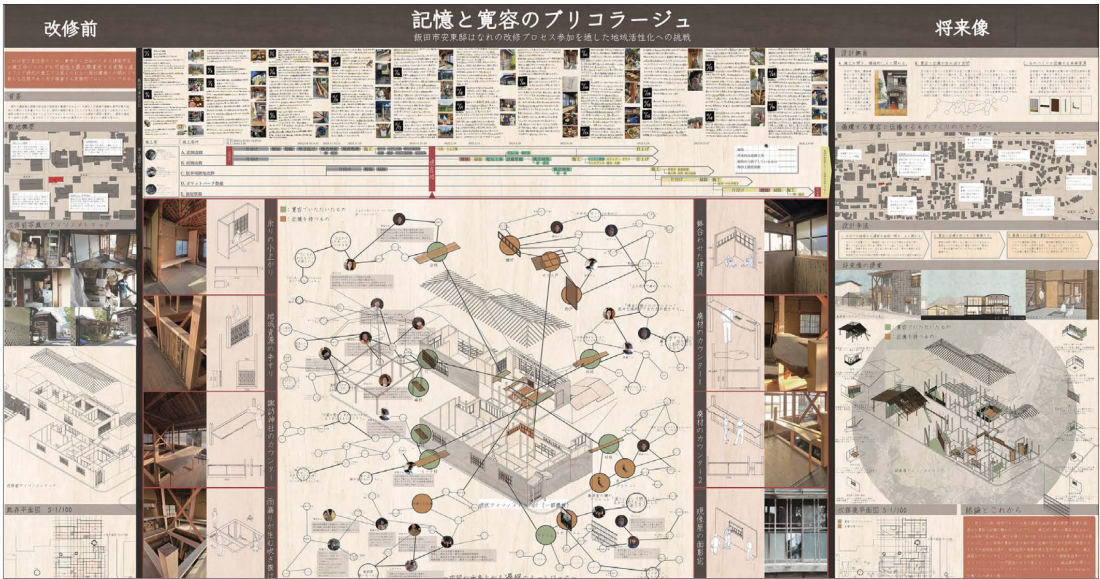
衰退する地方の空き家問題に対し、建築という「行為」は何かできるのか。本来、建築は地域と関わりながら成り立つものであったが、現代の施工現場では安全性や効率性などにより施工過程がブラックボックス化し、地域との関係性が希薄になっている。

これは実際に施工過程そのものを地域に公開し、住民を巻き込み、新たな地域拠点を形成するプロジェクトである。施工を通じて地域の記憶や差し入れや廃材などの寛容を集積し、それらを建築に反映することで、単なる改修にとどまらない、地域特有の価値を持つ空間を生み出すことを目指す。

この実践を通じ、従来の施工方法では得られなかった周辺環境との新たな関係性や新たな改修のあり方を模索する。

講評

施工プロセスは空間以上の価値を持ち得るか？自身の問いに真摯に向き合い地元大工協力のもと空き家改修に1カ月取り組み生成されたひと・もの・空間ネットワークの描出を試みた意欲作。さて、問いへの答えは？



- 安東邸はなれの将来像アイソメ
- 記憶と寛容を用いて実際に施工した空間
- 1カ月の飯田市滞在で出来上がった安東邸はなれを中心とするネットワーク



3

優秀賞・生稜賞
JIA 神奈川コンクール出展作品

Award of Merit/
SEIRYO Award
Selected Work
for the JIA Kanagawa Contest

水への もたれかた

後藤雄大

Yudai Gotoh

Profile

- 2002年
神奈川県生まれ
- 2021年
神奈川県立横須賀高等学校 卒業
- 2025年
建築計画(連)研究室 卒業
- 現在
京都工芸繊維大学大学院
西澤徹夫研究室 在籍

作品データ

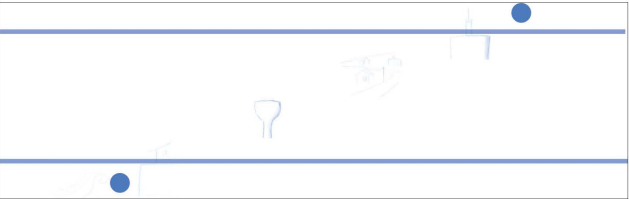
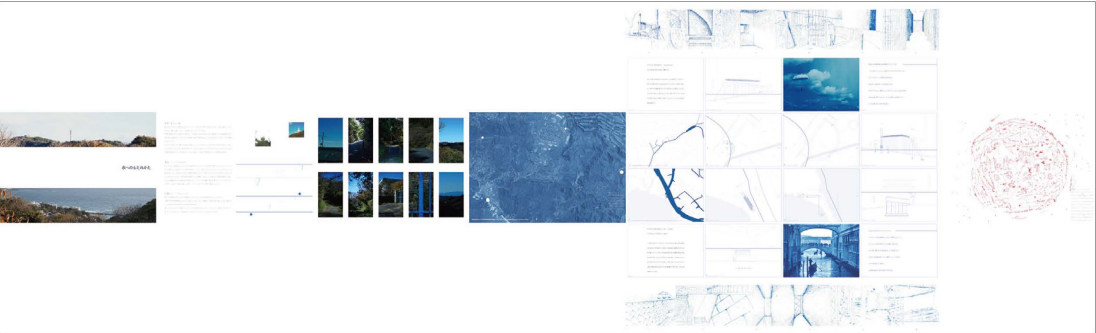
- 建物用途:
展望台、スロープ
- 敷地所在地:
神奈川県横須賀市秋谷
- 作品総点数:
A1 図面12枚、模型3点、
ドローイング13点、映像作品

設計主旨

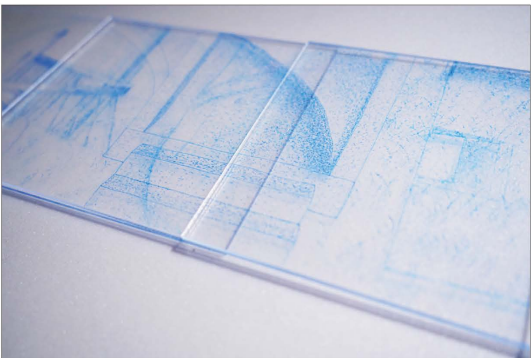
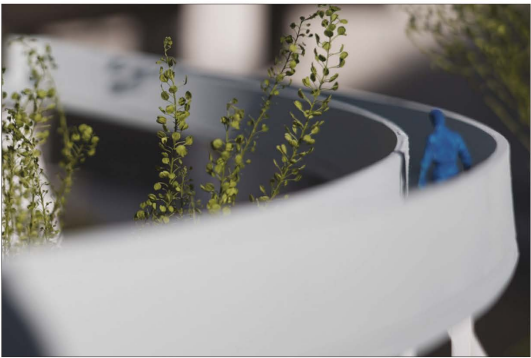
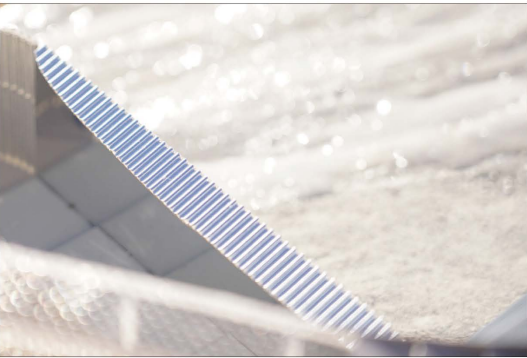
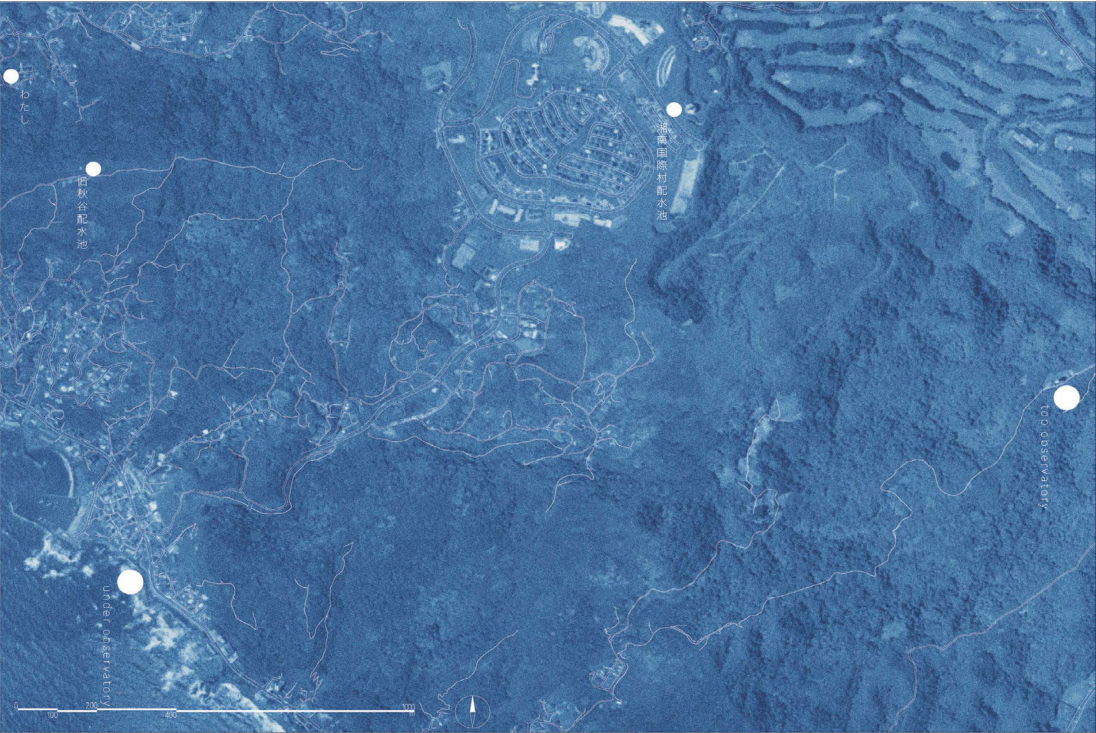
配水池とは浄水場からの水を街の高位置に溜め、重力を用いた自然流下によって家々に配る役割を持つインフラである。私が暮らした家の裏山でも稼働していた。しかしそれより上方への宅地造成を機に廃墟化し、新たな配水池が建設された。それは人の領域が、近代化や情報技術に依る、意識の範囲での「地球の内化」とは裏腹に、物理的限度を持つことを示していると言える。そうした上限と海＝下限に挟まれた領域が、現実としての私たちの領域である。本制作では示された上下のborderに外接した人間の運動をデザインする。これは外界を掬おうとするものではなくむしろ不可視だが確かに在るborderと挟まれた領域への引力の現れである。

講評

二つの建築物によって、水が上から下へと流れていくという最も日常的な物理的現象と、宅地開発という生々しい人間的・経済的営みを重ね、それを直接的に身体に伝達しようという壮大かつミニマリストチックな提案。



1. 本案の構成
2. 全体配置図
3. 模型=下限(海側)
4. 模型=上限(山側)
5. 模型=全体と既存(旧)配水池
6. ドローイング=アクリル、ゲルインキ



生稜賞について 生稜賞は設計演習を担当する兼任講師の有志により選出される賞である。選考では以下のような点が議論にあがった。自身の作品への論理的な理解があるか。他者と共有可能な言語化、視覚化が為されているか。フィクションを越えて、建築になるための検討を踏めているか。

[2024年度幹事
=湊景亮、亀田康全、宮地国彦]

選評 配水池という地域のインフラに着目し、その水位によって人の住むエリアが限定されているという、都市を断面的に捉える切り口が何よりも新鮮であった。風景の一部であり生活に不可欠なものでもある水という存在に対して、それに寄り添う2つの装置としての建築を設計し、都市と生活との密実な関係に新たな視座を与えている。重力を意識させる傾いた床や水位を意識させる視線の誘導など、身体に直接訴えかける細やかな設計も魅力的であった。空間体験とヴィジョン、ストーリーが一体的であることが評価され、生稜賞に選ばれた。

[宮地国彦]



7

7. 模型=下限(海側)

8. 模型=全体と既存(旧)配水池

9. 模型=上限(山側)

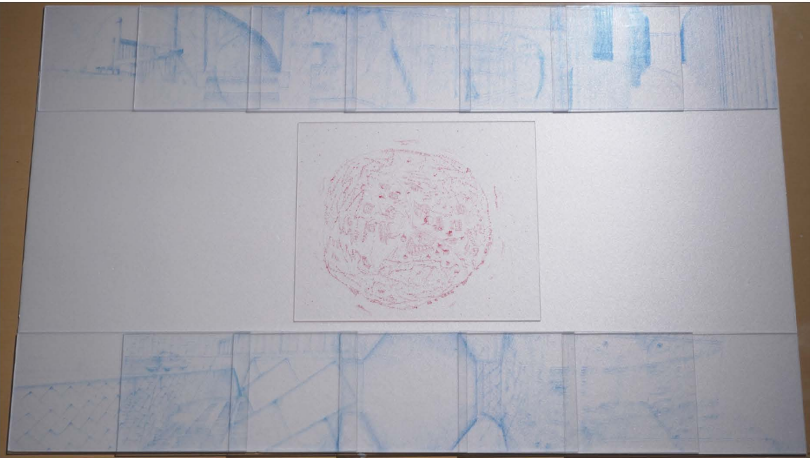
10. ドローイング=アクリル、ゲルインキ



8



9



10

津川賞・中村賞

Tsugawa Award/
Nakamura Award

私は、

大田祥悟

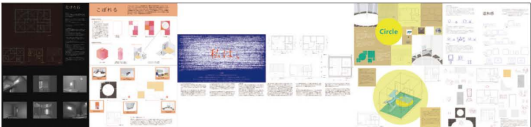
Shogo Ota

Profile

- 2002年
東京都生まれ
- 2021年
都立日野台高等学校 卒業
- 2025年
建築計画(連)研究室 卒業
- 現在
明治大学大学院同研究室 在籍

作品データ

- 建物用途:
住宅
- 敷地所在地:
なし
- 作品総点数:
A1 図面10枚、
模型4点



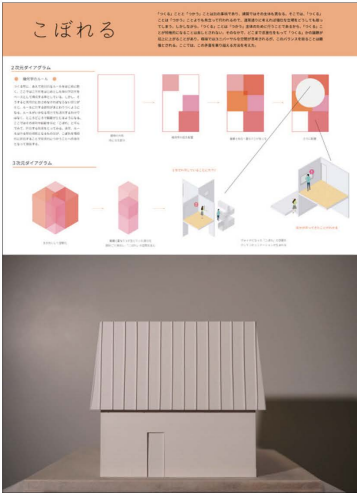
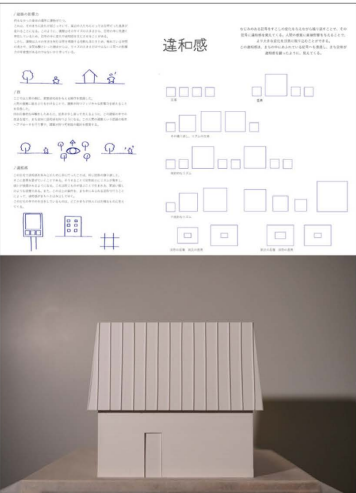
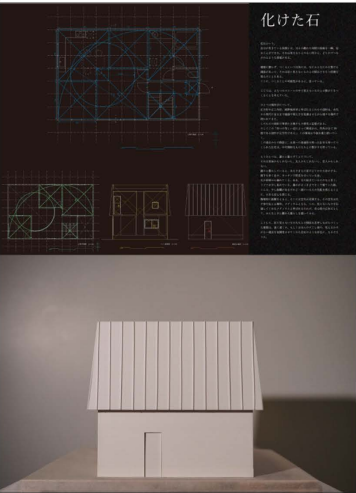
設計主旨

ひとつの住宅としての作品と同時に、客観的には不可視の領域にある「コンセプト」に基づいた4つの異なる説明がその住宅に対して与えられている状況も作品として提示する。

現前される物的作品と現前されない形而上的作品の切断された関係性を、建物と建築家の間にも確認することで、現代におけるそれら双方のあり方を問う。

講評

全く同じ建物を4つの異なるコンセプトから「語り直し」を行った実験的な作品。建築という枠組みにおいて、作品や作家がどのような意味の機構を持つのか探求した意欲的なプロジェクトである。



佳作

Honorable Mention

人々と共に 自給する 郊外型 スタジアム

みちを介した資源循環のデザイン

中野耕太郎

Kotaro Nakano

Profile

- 2002 年
神奈川県生まれ
- 2020 年
國學院大學久我山高等学校 卒業
- 2025 年
地域デザイン(川島)研究室 卒業
- 現在
明治大学大学院同研究室 在籍

作品データ

- 建物用途:
スタジアム+生産関連施設
(製材所、農作物加工場、
廃棄物処理場、ストックヤード他)
- 敷地所在地:
東京都町田市
- 作品総点数:
A1 図面 12 枚、模型 2 点

・設計主旨

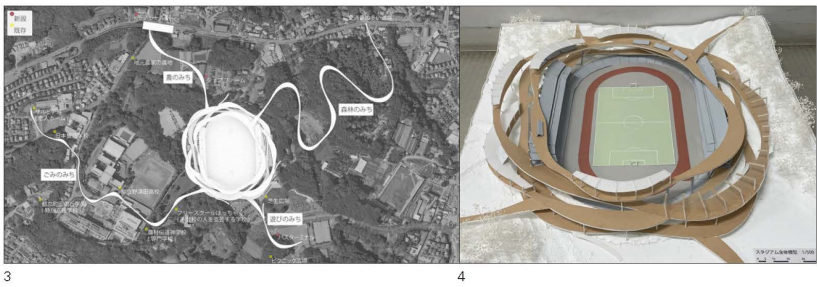
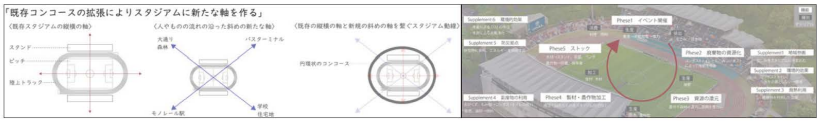
郊外のスタジアムを再利用と生産機能を持つスタジアムに改修する計画。試合開催時に発生する廃棄物をスタジアム内で資源化し、隣接する農地や森林に還元することでスタジアムを中心とした資源循環を形成する。既存コンコースを拡張した「みち」が地域との接続を強化すると同時に、人々ものが循環するネットワークを構築している。

・講評

大規模建築であるスタジアムを、郊外都市の資源循環を担う場として捉え直す提案。人や資源の流れを「みち」として統合し、都市のネットワークへと接続する構想を、迫力ある造形と結びつけた点を高く評価したい。



1. 既存コンコースの拡張によりスタジアムに新たな軸を作る
2. スタジアムで完結する資源循環ネットワーク
3. スタジアムと地域を一体的に再編する
4. スタジアム全体模型 1/500



佳作

Honorable Mention

備えあれば 憩いあり

仮設住宅の公園備蓄

神崎彩

Aya Kanzaki

Profile

- 2002 年
東京都生まれ
- 2021 年
東京都立戸山高等学校 卒業
- 2025 年
地域デザイン(川島)研究室 卒業
- 現在
明治大学大学院同研究室 在籍

作品データ

- 建物用途:
公園設備(遊具、ベンチ等)、応急仮設住宅、集会所
- 敷地所在地:
東京都練馬区光が丘
- 作品総点数:
A1 図面 12 枚、模型 20 点

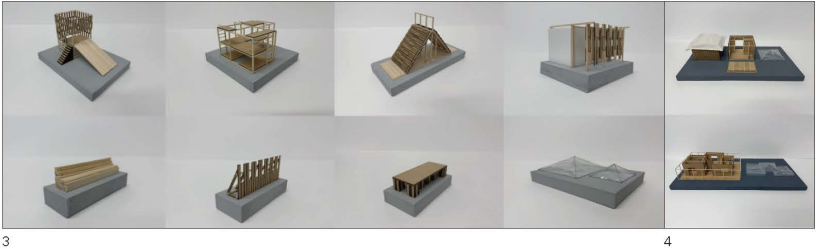
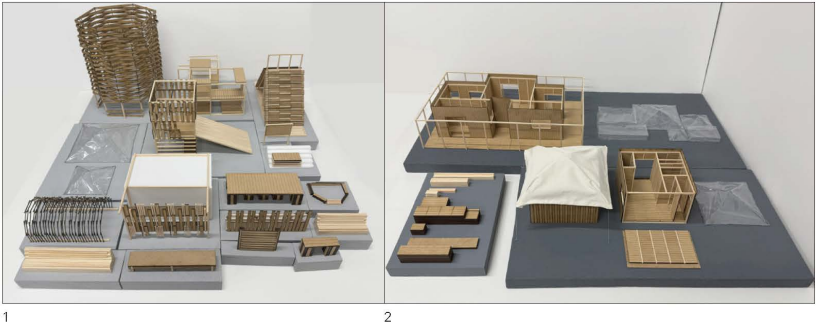
・設計主旨

避難所に指定されている公園を敷地に、使われながらストックできる応急仮設住宅を提案する。日常では遊具やベンチといった形で部材をストックし、災害時にはそれらを解体し組み替えることで応急仮設住宅 40 軒・集会所 1 軒の建設が可能な設計とした。使うことで点検され、愛着を持つことで非常時の安心感に繋がる計画である。

・講評

都市における備えの風景を再構成する提案。ストックの概念を拡張し、遊びや愛着を通じた資源の維持・活用の仕組みをデザインし、非常時と日常を重ね合わせる新たな都市の在り方を示している点を高く評価したい。

1. ストックの模型写真。
遊具、ベンチ、テーブル、棚など
2. 災害時仮設の模型写真。
仮設住宅に使われる材料、
仮設住宅、集会所
3. 左上から滑り台、見はらし台、上り台、
トイレ、ベンチ 1、棚 1、テーブル 1、風船
4. 上から仮設住宅、集会所



佳作

Honorable Mention

show-window recipe

「見せる」から始まる新しい生活を

奥畑稜

Ryo Okuhata

Profile

- 2003 年
神奈川県生まれ
- 2021 年
希望ヶ丘高等学校 卒業
- 2025 年
建築史・建築論(青井)研究室 卒業
- 現在
明治大学大学院同研究室 在籍

作品データ

- 建物用途:
住宅
- 敷地所在地:
東京都世田谷区代田
- 作品総点数:
A1 図面 12 枚、模型 5 点

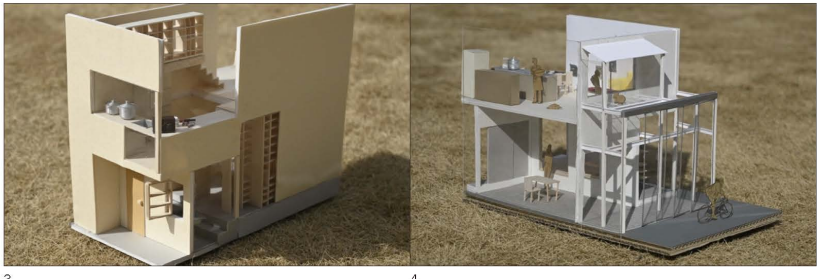
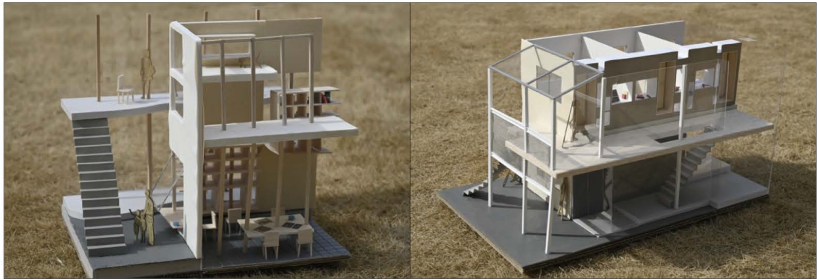
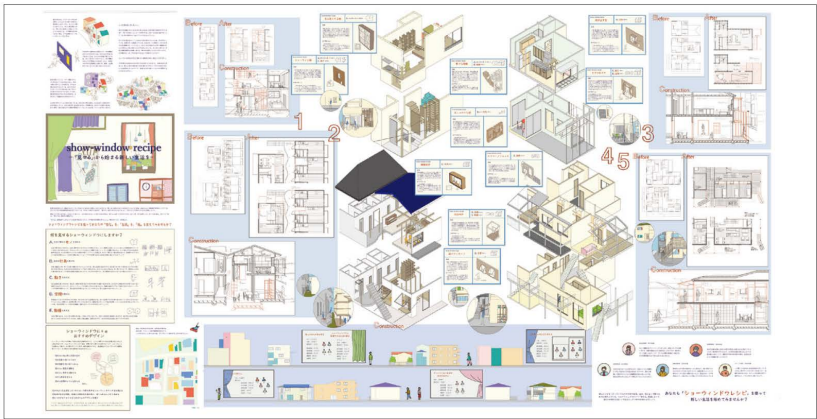
・設計主旨

多様な生活がされている現代に、同じ場所で同じ時間を共有することは難しい。プライバシーが大切にされている住宅に部分的に「見せる」空間を取り入れる。分断されていた内と外の関係性を「見せる」空間、ショーウィンドウを使って編集していく。住宅に住人が取り入れやすいようにショーウィンドウレンピを作成した。

・講評

ショーウィンドウの研究をふまえ、対象を店舗から住宅へ移して展開された卒業設計。生活の一部を街と重なり合う領域へと編集する諸提案は朗らかだが、家族、公共性、ジェンダーなどへの現代的な問いが弱かった。

1. アトリエのある住宅+アパート
1/20 模型写真
2. 動線を見せる住宅 1/20 模型写真
3. キッチンを見せる住宅 1/20 模型写真
4. 玄関とガレージを見せる住宅
1/20 模型写真



佳作

Honorable Mention

共有する 食行動

住み方調査による
食空間の模様替え

喜入柊介

Shusuke Kiire

Profile

- 2001 年
神奈川県生まれ
- 2020 年
横須賀高等学校 卒業
- 2025 年
建築史・建築論(青井)研究室 卒業
- 現在
明治大学大学院同研究室 在籍

作品データ

- 建物用途:
住宅
- 敷地所在地:
神奈川県川崎市
- 作品総点数:
A1 図面 12 枚、模型 4 点

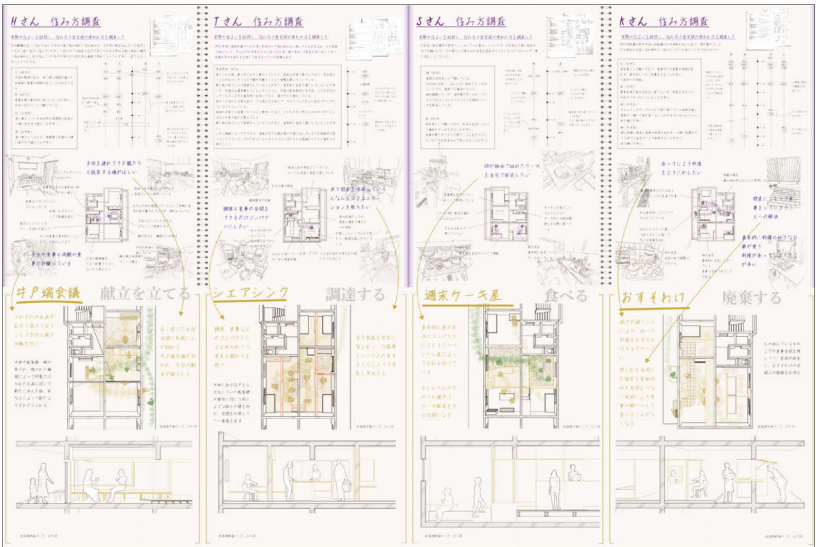
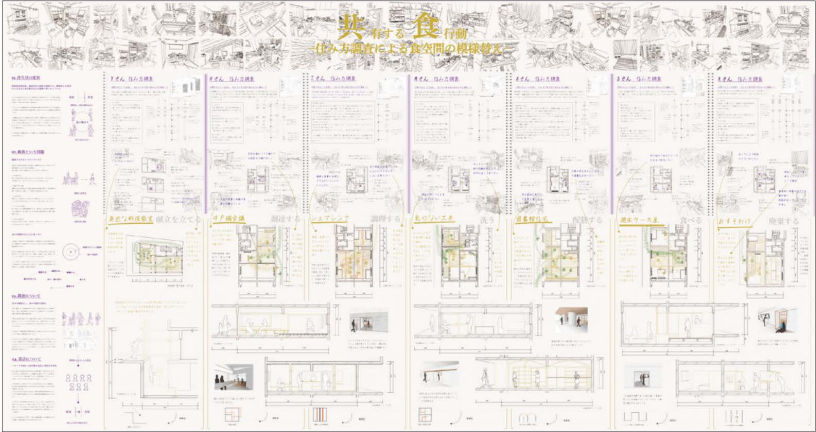
・設計主旨

7 家庭に対して住宅を訪問し、住まい方や食空間の使われ方、生活リズムなどの緻密な調査を行い、食行動の一部を共有することで家族間や地域の人々とのつながりを生む設計を行った。個々の設計はあくまで食行動の一部を共有する個別解であるが、住宅の区画などを操作し、人々における所有と共有の編集するような設計とした。

・講評

本来の家族団欒が失われた——これは強迫的幻想だが、共食の意義は普遍的であるに違いない。この立脚点は魅力的だ。実際に複数家族に入ってその実情を知る調査もパワフルだったが、新たな虚構の説得的表現には至らなかった。

1. 住み方調査から食行動の一部を共有する設計へのアプローチ



佳作

Honorable Mention

十六号線漂流記

我田蒼弥

Soya Wagata

Profile

- 2002年
東京都生まれ
- 2021年
都立新宿高等学校 卒業
- 2025年
構法計画(門脇)研究室 卒業
- 現在
漂流中

作品データ

- 建物用途:
住宅
- 敷地所在地:
16号線沿い
- 作品総点数:
A1 図面12枚、模型4点、コラージュ1枚

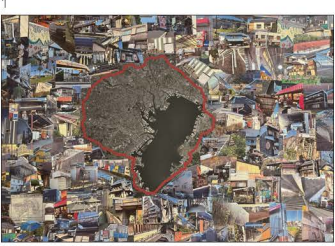
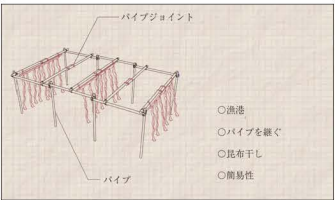
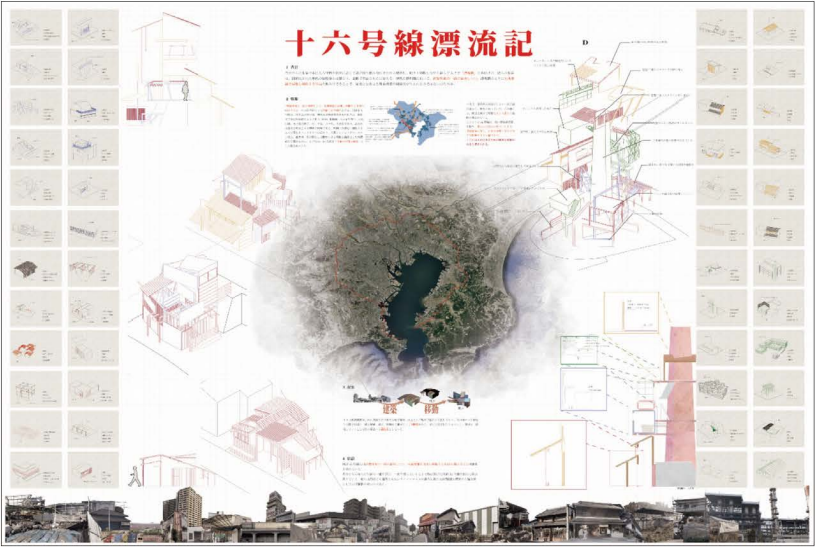
・設計主旨

「漂流族」は、手に入る材料を状況に応じて選び、組み合わせながら建築し、移動しながら暮らす人々である。国道16号線において、彼らは消費社会の一部を活用しつつ生活資源を採集し、柔軟な住環境を構築する。この暮らしは、従来の固定化された社会とは異なる新たな関係性や社会構造を生み出す可能性を持つ。

・講評

16号線上に多彩なコンテクストを見いだし、道路を用いた資材の交換により、一種のキメラ建築をつくり出そうとするプロジェクト。その背景に見え隠れする営みは、都市辺縁での新たな生活像の成立を示唆している。

- 十六号線調査
- 十六号線調査コラージュ
- 最終キメラ住居1/30



2



3

佳作

Honorable Mention

Soleful から Soulful へ

視覚障害者が認知する多角的都市

高橋直仁

Naoto Takahashi

Profile

- 2002年
埼玉県生まれ
- 2021年
蕨高等学校 卒業
- 2025年
建築・アーバンデザイン(佐々木)研究室 卒業
- 現在
明治大学大学院国際プロフェッショナルコース(I-AUD) 在籍

作品データ

- 建物用途:
ストリート
- 敷地所在地:
東京都府中市
- 作品総点数:
A1 図面12枚、模型1点

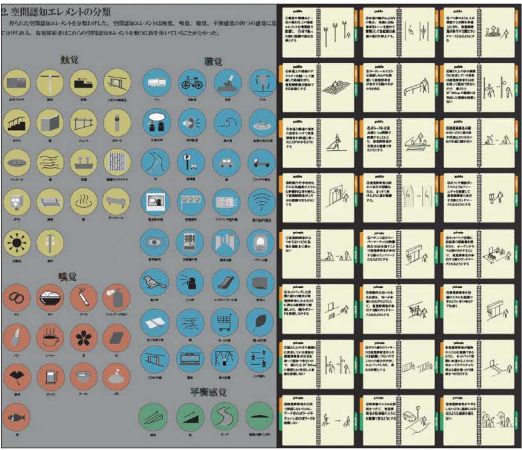
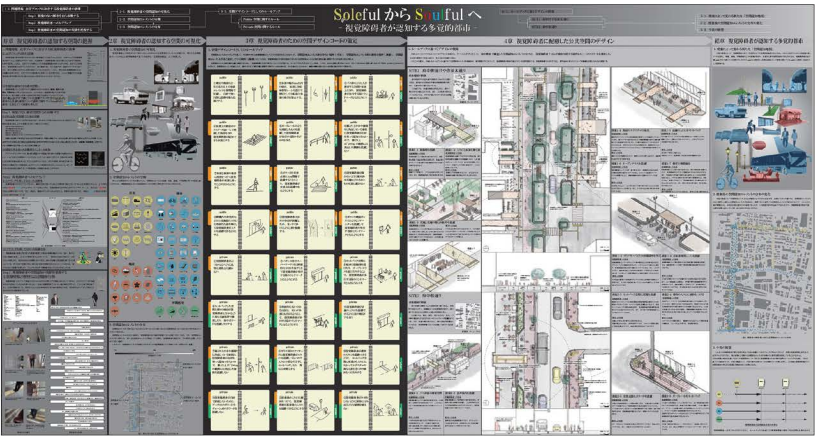
・設計主旨

視覚障害者のためのストリートを設計した。三つの調査を通して視覚障害者の空間認知方法を明らかにし、それをもとに設計を行った。視覚障害者が足の裏(sole)だけで感じていた誘導ブロックだけのSolefulな都市から多様な感覚によって感慨で満ちているSoulfulな都市へ変化することを期待する。

・講評

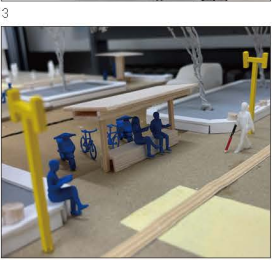
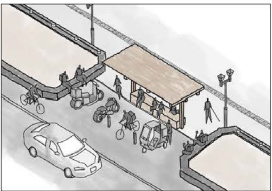
障害者と健常者の共存する都市空間とは？視覚障害者の空間認知を障害者の協力を得て描き出し、デザインコードと公共空間デザインの提案を試みた力作。空間デザインが調停する両者の関係への肉薄は今後の課題か。

- 空間認知エレメントの分類
- 空間デザインコードとしてのルールブック
- アイソメ
- アイソメを模型で表現した部分



1

2



4

審査講評

津川恵理

Eri Tsugawa

建築家

ALTEMY 代表



私は、広場・道路・モビリティ・西陣織・AR空間などを設計する建築家です。

建築は英語で「Architecture」といい、建築術・建築学・建築様式・構成などの意味をもちます。建築家は、建物を設計するだけの職業なのでしょうか。私はそんな問いを学生の時から持ち続け、「Architecture」という専門的な概念を社会に広く提唱できないかと挑戦してきました。

日本のGDP(国内総生産)の中での建設業の割合は5%ほどを占めていますが、東京オリンピック2020、大阪・関西万博、都心の再開発もいつかは落ち着きを見せ、この建設ラッシュはいつまで持続するのだろうか、と建築家として疑問に思う瞬間があります。欧州などでは環境配慮型の事業が主流になり、建設に対してCO₂削減への需要も高まる中、新築の建築を建て続けることへの違和感を建築家としてどうしても拭えずにいます。

かといって、全ての建築が木材でつくられ、環境配慮へと一点集中して開発が進められていくことにも違和感を覚えます。それでは、これからの建築家はどのように建築に向き合えばよいのでしょうか。

1968年、ハンス・ホラインが「すべては建築である」と提唱したこと

近年の卒業設計には、近代的な普遍性を基盤とした建築観からの大きな転換が見られる。かつては自由と平等、社会的寛容の普及を目指し、人々を縛る古い属性とは無縁の、ユニバーサルな人間のための普遍的建築が評価されたが、今や地域コミュニティや家族、伝統、慣習といった固有の人間の属性に深く目を向ける作品が多数を占めている。これは行きすぎた自由による分断や孤独といった問題への応答であり、人と人の関係を再構築する試みで喜ばしいことだが、審査側としては短時間で特殊な場所と属性固有の建築言語を理解した上で、設計の創造性や人々の連帯を評価する難しさがある。

今年もまた、縮小社会を背景としたリノベーションやエレメント的提案といった小さな建設的実践が多く、都市計画や新築といったスケールの大きな提案へのある種の諦念が通底していた。今後の仕事は近代や新自由主義の後始末とばかりに、過疎地や災害地、高齢者住宅など、功利主義の外にある領域へのボランティア的アプローチが主流となっている。この動向への共感の一方で、建築家の活動が小さな場所に閉じ込められ、結果として既存の制度や枠組みを補強してしまう危うさも感じる。将来、設計を生業にして社会変革を構想すべき学生たちが俯瞰なき局地戦に志願していくのを見るのは辛い。奉仕的实践は制度改革を目指すべきで、建築にまつわる制度批判が不可欠である。加えて、例年見られるライトノベル的設計にもふれておきたい。これもまた個々人の多様性や小さな物語を重視する傾向だが、それゆえに批評やリアリティの追求から逃れた自閉と誤解されやすい。建築は国家や共同体、家族、宗教などの物語

建築は人と社会を繋ぐ重要な媒介であり、その役割と可能性には尽きることがない。今年の卒業設計作品からは、フォルムとしての建築ではなく、背後に潜む価値や仕組みに対する鋭い意識が各作品に反映されているのが印象的である。全体としては主題の多様性が見受けられる一方、際立って突出する提案はやや希薄に感じられた。しかし、『水へのもたれかた』は、文脈に対する思索的な

卒業設計は学生自身が自由にテーマを選ぶことによって、現代の若者の悩みを垣間見ることができる貴重な体験であり、また米国の卒業制作から30年以上実務経験を経た私にとって、明治大学の学部講評会で発表された学生たちの設計は新鮮でとても刺激になりました。今年の学生たちの作品傾向については大きく2つに分かれており、創造性豊かな提案ではありつつも解決策を提示するのではなく疑問を投

を参照すれば、それは「建築はすべてに応用可能である」と読み替えることができるかもしれません。

そう思うと、昨今の卒業設計では、建築を幅広い概念として提示する作品が増えてきたように感じます。時間軸を操り、建築をする行為自体の概念を揺さぶるもの／1つの建築のドローイングを1年かけて描き、その過程に新しいプロセスがあることを提示するもの／土を掘り井戸水を汲み取ることで、生きること自体を再定義するもの等、建築そのものの存在を揺さぶる提案に、近年の全国の卒業設計展で出会うことができました。それらを学生の時のポートフォリオの一部として終わらせるのではなく、是非真剣に、社会と向き合い本気で提示していつてはしいと学生に願いを託したくなります。

実務をしていると、新規的で挑戦が伴う提案には必ずリスクが付き物だと感じます。その時に、いかに周りを巻き込み、建つ前に賛同を得て、一緒にリスクを背負ってくれる覚悟を関係者に持ってもらえるか、その機運の醸成が肝になります。

これからの建築教育では、①建築の拡張性、②プレゼンテーション能力の向上、③コミュニケーションデザインに力を入れて、是非新しい歴史の一步を刻んでいく同志にこれから出会えることを期待しています。

をもっともらしく現前させる装置である。そこに小さな物語や虚構を用いるのであれば、人々の共有や連帯のために活かされるべきであり、単なる象徴に頼らない空間形式とふるまいの相関を明確に言語化すべきだろう。懸念すべきは、近年の卒業設計に諦観や厭世、対症療法、非営利性、内向性といったネガティブな要素が多く見られることだ。これらは設計業・建設業における協働性や前向きな態度と相反するため、避けるべきと考える。一方でそれこそ現代の都市生活における切実な実感であるとするならば、重要なのはそうした矛盾を内包しながらも多数の人々を魅了する建築的構想力だ。実際、巨大再開発へのアンチテーゼは多く提示されていたが、批評性を持った積極的な開発提案は乏しかった。例えば、新自由主義的な開発論理に対して、行政制度や規制を創造的に仮説し、富裕層や大企業中心の都市構造をずらすようなアイデアもあり得たはずだ。公共貢献における容積緩和やトランプの関税など、資本主義と保護主義が再構成される新時代にあっては、建築が政策仮説と結びつくことで現実を変える提案が求められている。新自由主義の砂漠でも憧憬的コミュニズムでもない、具体的な制度への介入として、建築がどのような役割を果たせるのか。その問いを突きつけるような作品に、今後はより大きな期待を寄せたい。

堀口賞の《宇宙 トウキョウ わたし》は、塔を日食という自然現象と個々の身体やふるまいとの中に関係づけ、都市に生きる喜びを創出した。塔のシルエット模型や影の図面といった、建築・都市・自然・身体を結ぶ新しいノーテーションの開発も見事だった。

応答が印象的であり、設計教育の国際的な評価基準にも十分に応えうる内容であった。また《赤い部屋》は、舞台芸術に関する知見と経験を空間として結晶させた力作であり、その熱量と構成力は高く評価されるべきものである。卒業設計が個々の問題意識の集約点であるとするれば、この経験が今後の探究の出発点として、引き続き意味を持ち続けていくことを願っている。

げかけるプロジェクトで少し具体性に欠けたところがあった作品。もう一方は非常に現実的な問題(改修でもあり、実際に建てたプロジェクト)を解決する設計ではありつつも、規模の小さいポイントを突き詰めたプロジェクト。どちらもこれからの実務には必要なことではありますが、学生の間はずっと自由なアイディアとともに大きな建築的な切り口で疑問を投げかけるような尖った作品も作ってもらいたいと思いました。

学部2年[秋学期] 建築設計3

Undergraduate Program 2nd year
Architecture Design Studio 3

交差点に立つ オフィスビル

Office building at an
intersection

優秀作品

馬場咲和花|伊藤隆太|松谷葵
安斎日菜|内藤誠|山本愛子
高野瑛人|松澤実結輝

課題主旨

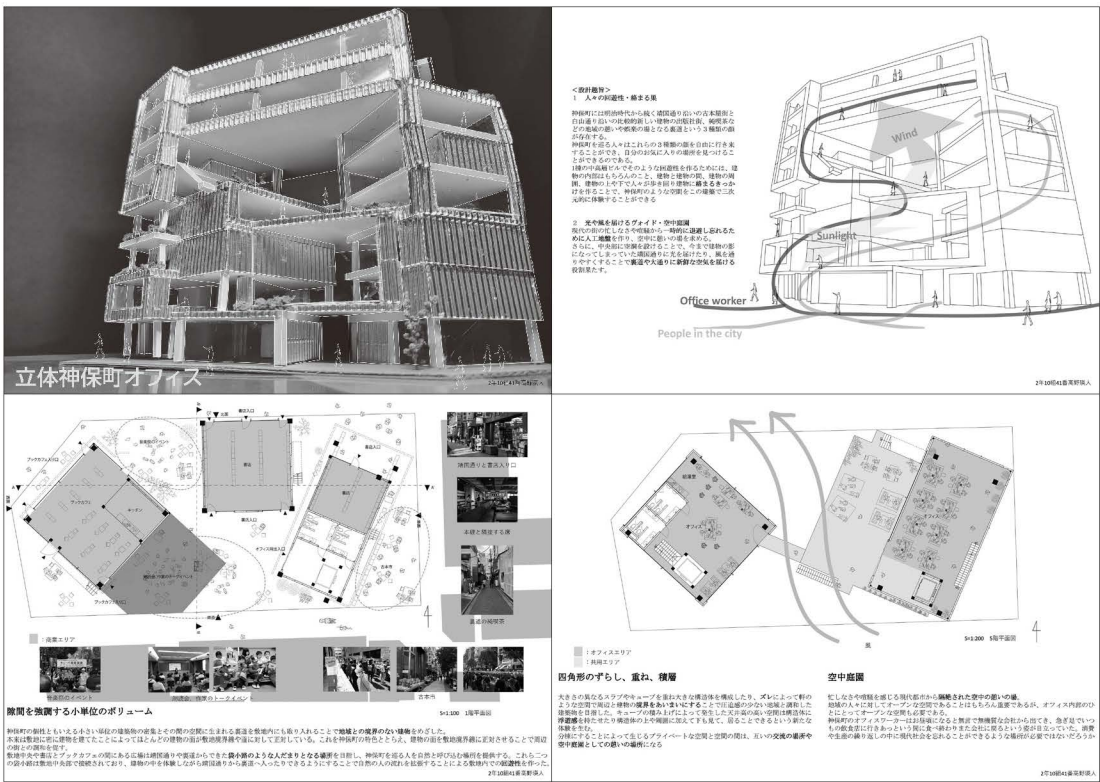
神保町駅前の交差点に面する敷地に中規模のオフィスビルを設計する。オフィスの執務スペースは、出版・メディア関係の賃貸オフィスを想定し、ワークスペースとしての快適性を十分に担保しつつ、フレキシブルなスペースであること。接地階は、書店とカフェを組み合わせたブックカフェとして使用するため、歩行者が立ち寄りやすくなること。周辺の古書店街などの個性ある界隈の魅力を高めるため、店舗の連続性や店先・道路などパブリックな空間との関係を重視すること。建物全体として、建物を特徴付けるストラクチャー（構造体）とファサード（外装）を美しくデザインすることが求められる。

指導教員

川島範久|田中友章|山本俊哉
中佐昭夫|長谷川欣則|藤藤麻木
田村直己|畑江未央|宮戸明香

立体神保町オフィス

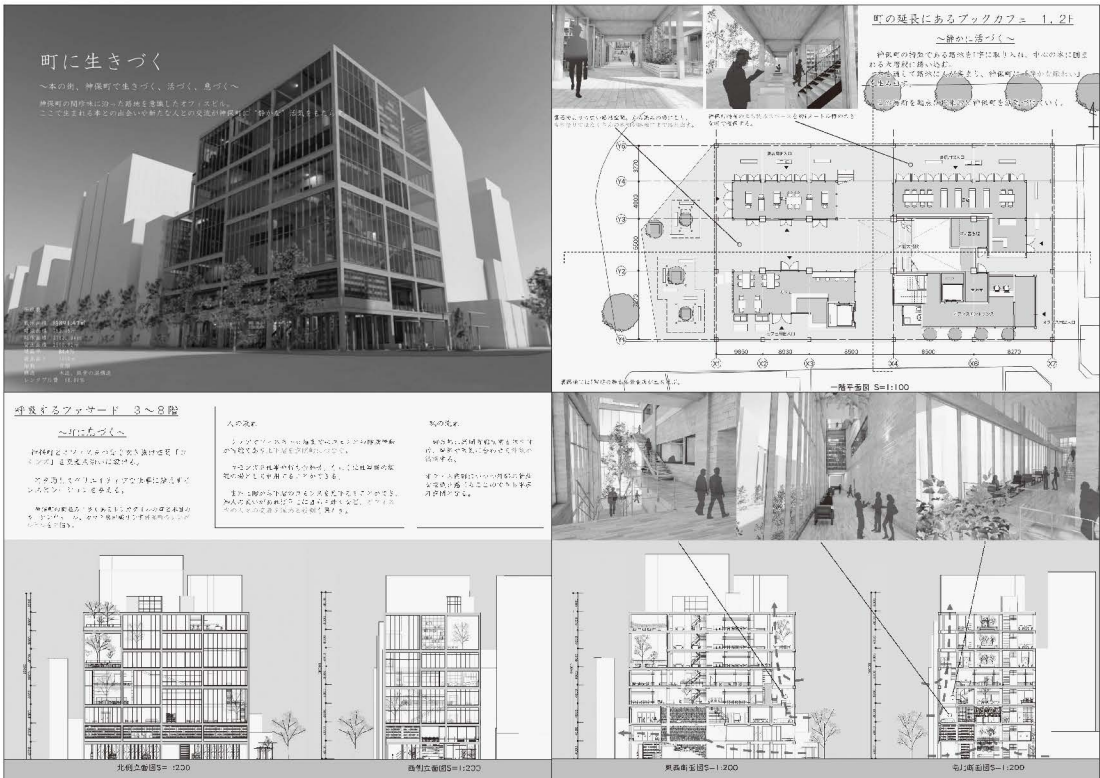
—
高野瑛人



町に生きづく

本の街、神保町で生きづく、活づく、息づく

—
馬場咲和花



街のスケールに応じてボリュームを砕くことで風や光を取り込み、間に生まれた立体テラスを利用する人々の活動が都市に活気をもたらすことを期待させる。社会的価値を考え、計画・構造・環境を統合して建築を提案した点を高く評価した。

こどものための空間

Space for Children

優秀作品

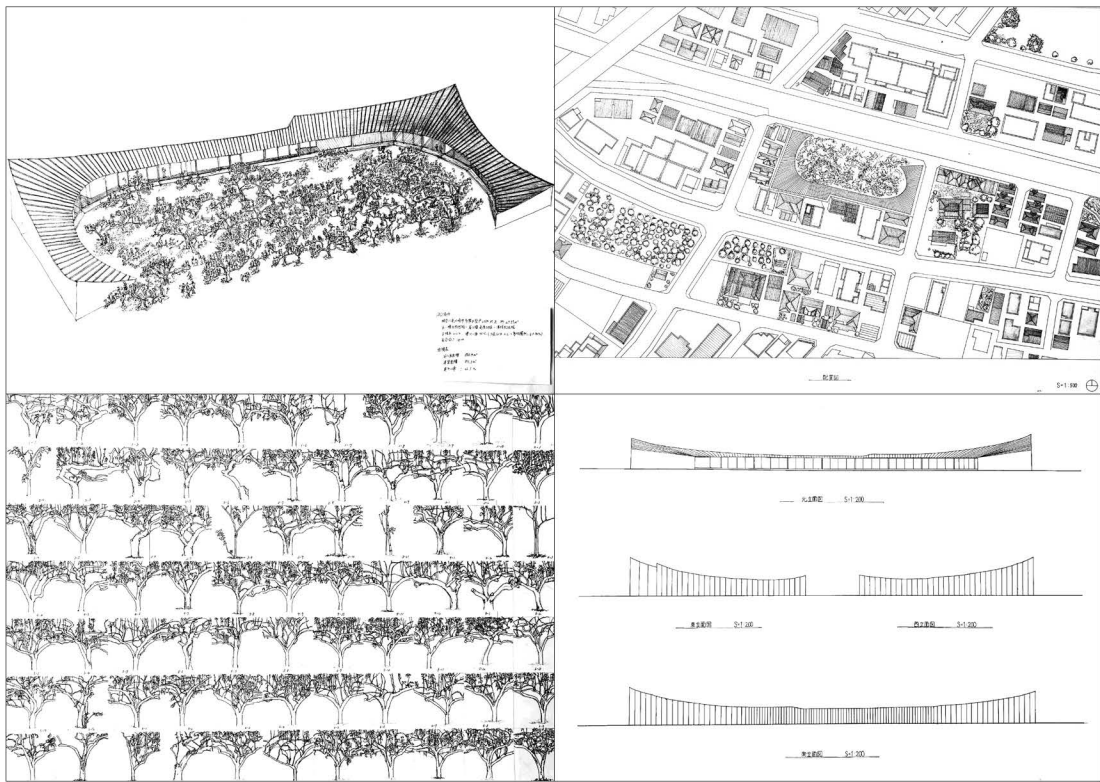
杵淵遼安|風間大介|下田伊織|仲東子
嶋村彰|藤田千宝|林莉央|城内理人

課題主旨

登戸駅近くの南武線沿いの生産緑地を敷地として、幼稚園を設計する。幼稚園は、様々な遊びを通じて基本的な生活習慣を身につけ、集団行動をトレーニングしていく「遊びの場」である。従って、緩やかで自由な空間が望ましく、子どもたちのアクティビティが誘発される建築が求められる。設計にあたっては、その空間に相応しい構造形式を考えることも重要であり、自然と触れ合い、光や風や季節を感じたりできる空間を、快適性への工夫を含めて提案することが求められる。

梨園を残した幼稚園

—
嶋村彰

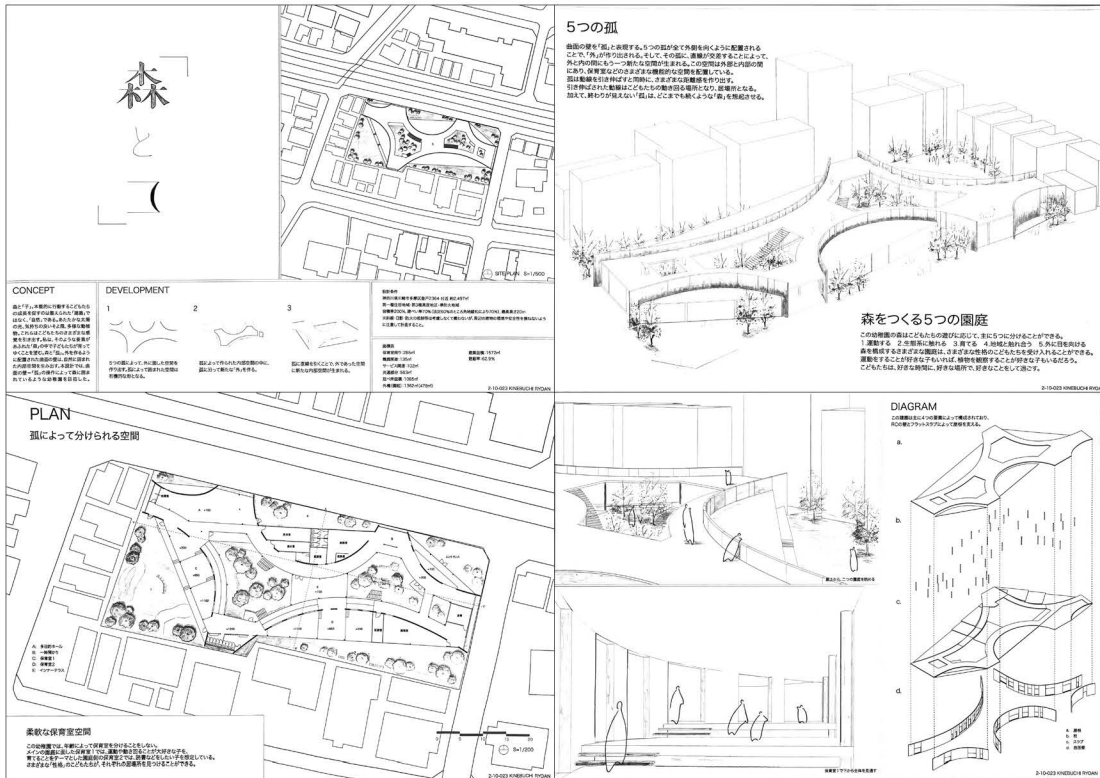


森とコ

—
杵淵遼安

緻密な現地調査により、敷地の既存果樹を一本も切ることなく園舎との同居を実現した挑戦的な力作。スケッチや模型も、保育環境と敷地の歴史に丁寧に向き合った熱量が感じられる表現が出来ており、案の強さを高めている。

弧を描く曲面の壁が園舎の建築空間だけでなく、外に向かって開いた大小5つの園庭と中庭を区分するとともに子供たちのアクティビティを誘発する動線空間を形づくり、高低差のある空間を生み出している。図面も模型も美しい。



学部3年[春学期]
建築設計総合 a

Undergraduate Program 3rd year
Architecture Design Studio a

集住の
現在形：
多様な国籍
の学生が
混住する
学生寮

Meiji-U. International
Student Dormitory

優秀作品

岡村知夏|軍司明日香|小林宙輝
篠原穂花|松本悠真|松本一航
森尾真帆|由良萌|大下美苑
鈴木皓人|長谷川楓|藤森祐羽
松本大輝|宮田康平|今野朱
大宮美希|高橋賢生|長谷川智大

課題主旨

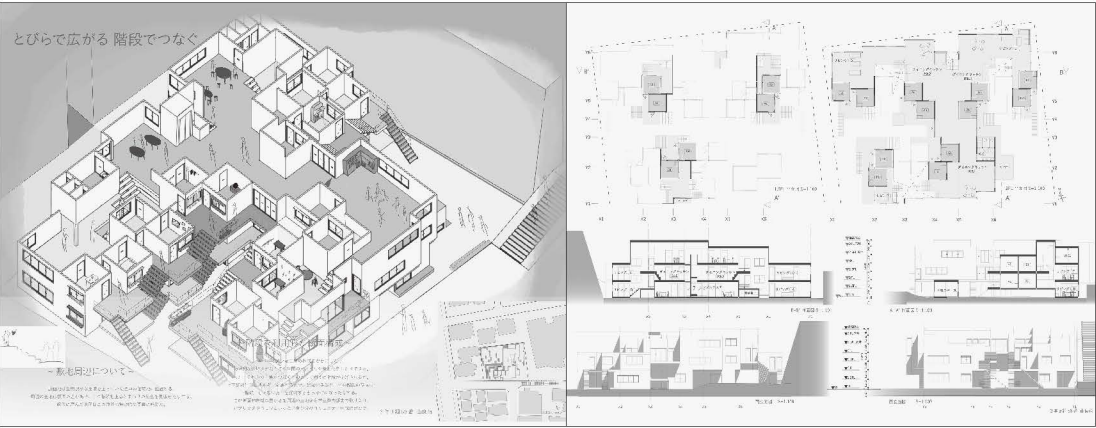
大学の国際化を背景に、多彩な出自をもつ36人の留学生・日本人学生が混住する国際学生寮を設計する。専用・共用部の配分とユニット構成がどんな集住文化を生み出すかを検討するのが課題の主旨だが、同時に地域と大学をつなぐ小規模学生寮のパイロットケースとして公共空間とグランドレベルのデザインも検討する。

指導教員

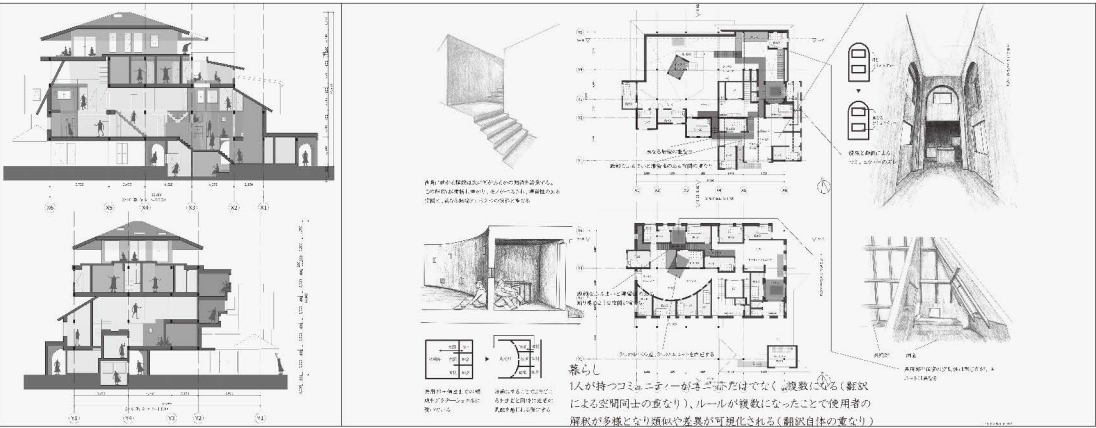
青井哲人(コーディネーター)|山本俊哉
川津彩可|駒田由香|本橋良介
廣瀬隆志|亀田康全|宮地国彦
酒井夕佳|内部美玲|田代朋彦



軍司明日香|滲んで溶け合う



由良萌|とびらで広がる 階段でつなぐ



宮田康平|翻訳の重なり



高橋賢生|溢れて混ざる

学部3年[春学期]
建築設計総合 b

Undergraduate Program 3rd year
Architecture Design Studio b

学びの
現在形：
明治大学
生田
ラーニング
センター

Meiji-U. Ikuta
Learning Center

優秀作品

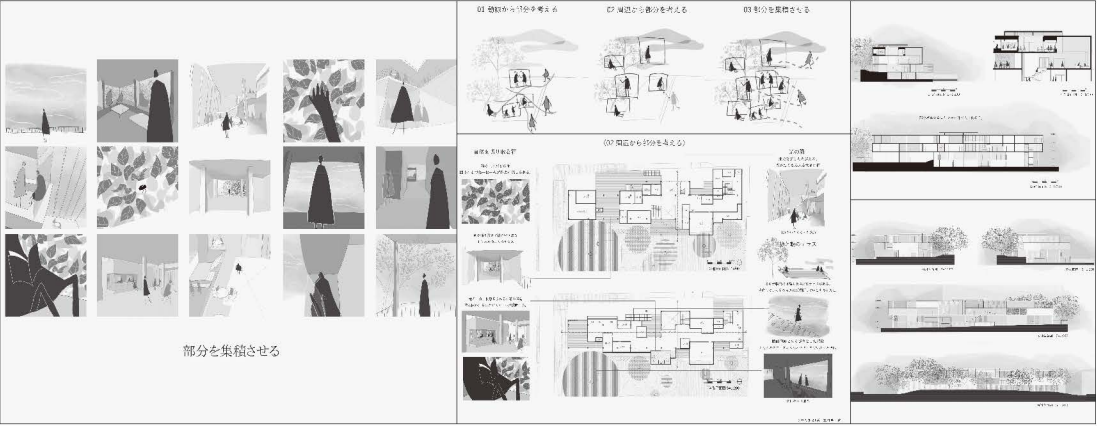
軍司明日香|篠原穂花|鳴海希亜菜
池田真郷|江尻佑|大下美苑
亀井遙加|川田一樹|呉士文
相良龍之介|鈴木皓人|奈良優樹
松本大輝|宮田康平|元井佳祐
太田朝陽|大宮美希|小島葵
高橋賢生|長澤由芽|中島綾菜
西野梨央|長谷川智大|森田響

課題主旨

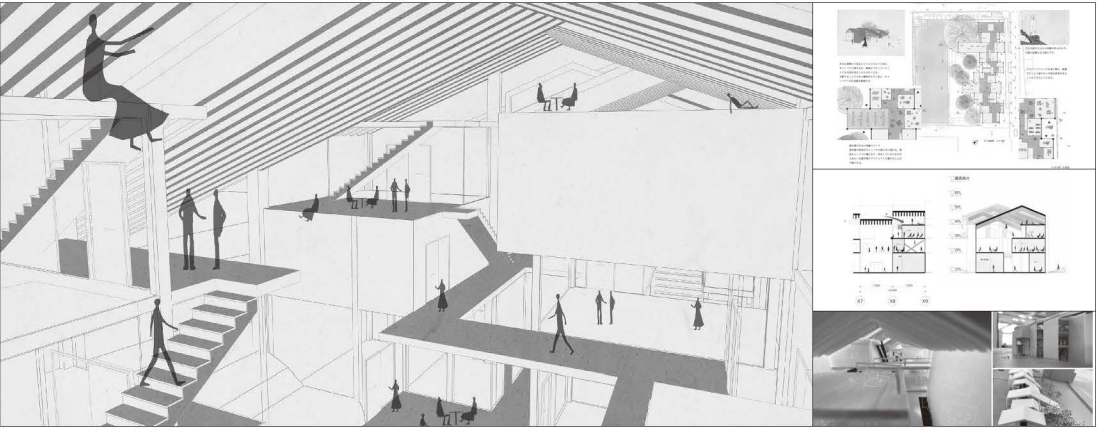
従来の制度、組織、形態をこえたアクティブで創発的な学びが生まれるようなラーニング commonsを生田キャンパスの中央に設計する。出題プログラムは異なる利用形態を想定した多彩な大きさの空間を具体的に要求しており、それらの関係と距離をつくるとともに、キャンパス全体を活性化する空間環境のデザインが期待される。

指導教員

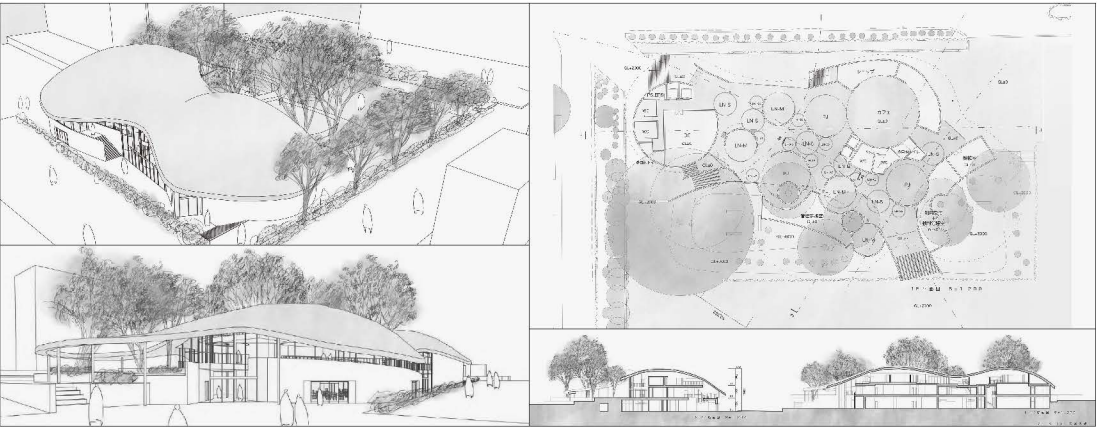
青井哲人(コーディネーター)|山本俊哉
川津彩可|駒田由香|本橋良介
廣瀬隆志|亀田康全|宮地国彦
酒井夕佳|内部美玲|田代朋彦



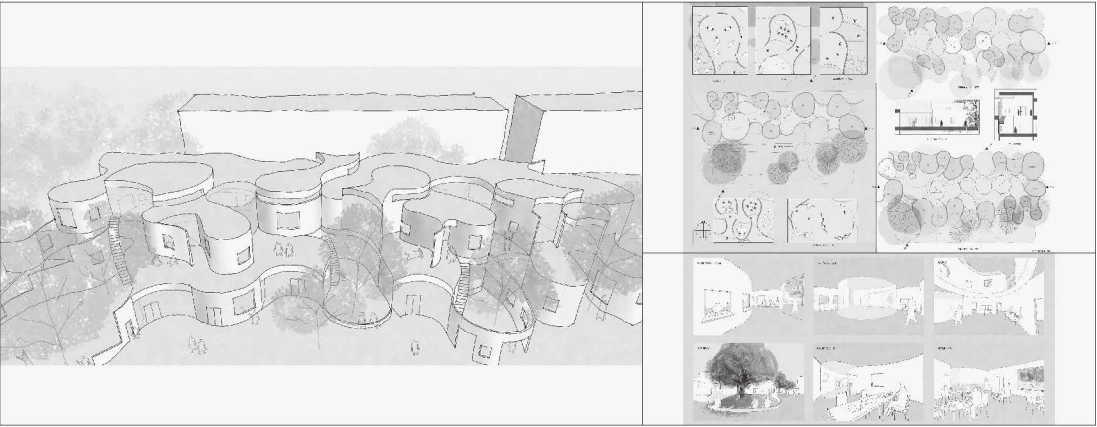
軍司明日香|部分を集積させる



江尻佑|ずれの重なり



松本大輝|あわい



高橋賢生|絡まる杜

学部3年 建築設計スタジオ 1a/1b

Undergraduate Program 3rd year
Architectural Design Studio 1a/1b

コンテクスチュアル・ デザイン・スタジオ

Contextual Design Studio

「出来事」から 建築を考える

Thinking Architecture
Through the Lens of Events

指導教員

伊藤孝仁

コミュニティ・デザイン・ スタジオ

Community Design Studio

New Ordinary: Spaces shaped by how we live

指導教員

アレクサンドラ・コヴァレヴァ

エンジニアリング・デザイン・ スタジオ

Engineering Design Studio

普遍性と固有性を 両立するデザイン

Design that Balances
Universality and
Specificity

指導教員

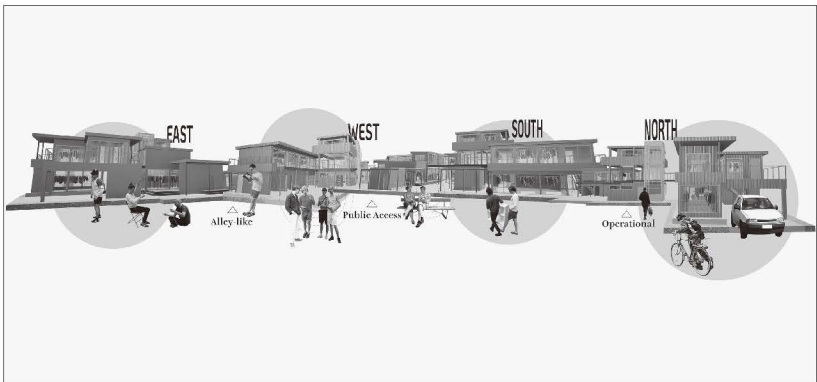
藤貴彰

神宮前三・四丁目地区「関係の想像」複合型コミュニティ施設のデザインを通して

Imagining Relationships in the Jingumae 3rd and 4th Districts:Through the Design of a Mixed-Use Community Facility

・課題趣旨

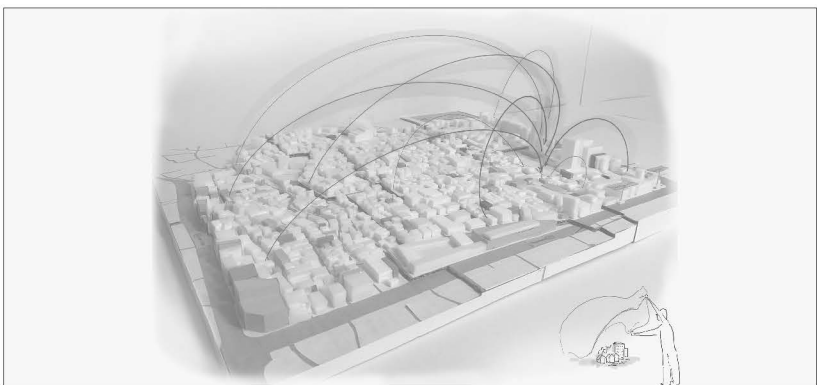
「都市のエスノグラフィー」をテーマに、フィールドに飛び込み得られた具体の経験を創発的に記述し、建築設計へと展開することを試みる。



OPEN INFRASTRUC- TURE HUB

小林宙輝

主客が曖昧な開かれた裏の空間を「オープンバックヤード」と定義。古着屋の工程を分解して地域独自のインフラ空間を設計した。



Common Kit Chain

由良萌

このプロジェクトは食品ロス問題に対して、地域の人々が参加する形でフードロスを循環させる場をつくり新たな地域文化を育む。



開く 閉じる

長澤由芽

家具と一体化した手動ルーパウォールにより、個々人の振る舞いが光・風・熱を部分最適化し、全体性を再定義する。

各スタジオの全体講評選出者リスト

伊藤スタジオ|小林宙輝
コヴァレヴァスタジオ|由良萌
藤スタジオ|長澤由芽
連スタジオ|江尻佑

オープン・デザイン・スタジオ

Open Design Studio

アイデアの コモンス化による 建築デザイン

Architectural Design
through the Commons of
Ideas

指導教員

連勇太郎

アセット・デザイン・スタジオ

Asset Design Studio

個人資産と 地域資源から 建築を構築する

Constructing Architecture
from Personal Assets and
Resources

指導教員

佐竹雄太

コンストラクション・デザイン・ スタジオ

Construction Design Studio

Designing with Unknown Performances of Elements

指導教員

門脇耕三

佐竹スタジオ|池田真郷、元井佳祐、
長谷川智大
門脇スタジオ|川田一樹

・課題趣旨

ユーザー自身が生活環境を創造する方法としてのボタン・ランゲージに学び、新しい建築設計手法を探索する。

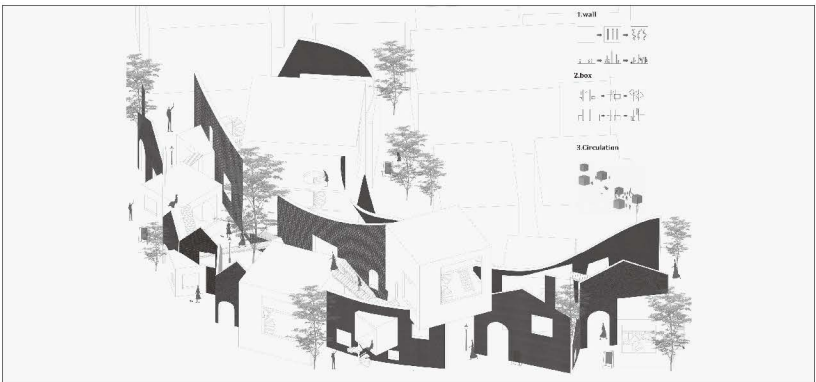
・課題趣旨

個人の資産と、地域資源という異なる観点からアプローチし、不動産事業としての建築の構築を試みる。

・課題主旨

建設のための有形・無形の「資源」に着想を得て、それらの力能を引き出すことで建築とその生産システムを構想する。

・**全体趣旨** 神宮前三・四丁目地区において、住民・商業者・来訪者間の良好な関係のあり方を想像し、地域住民のためのコミュニティ施設を中心とする複合施設を計画・設計する。併設する他のプログラムやそこの住民と来街者の共存のあり方は、各自が地域の事情を考慮しながら想像し創造する。



Layers of Liveliness

江尻佑

レイヤー状のファサード、小さな余白群、特徴的なドアや階段など、5つのパターンを核に設計を展開。



渡す

池田真郷、元井佳祐、
長谷川智大

子どもの第三の居場所を軸に、そこへの多様な関わり方を通しコミュニティが生まれ、人と人をつなぐ橋渡しとなる場所を提案する。



The post-fast fashion community

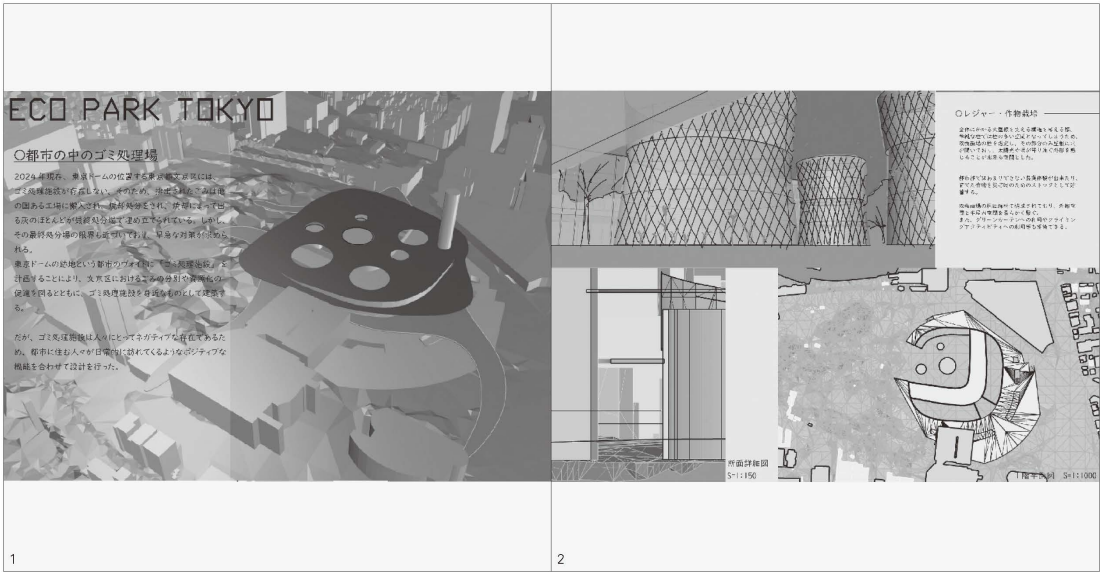
川田一樹

廃棄衣服をリサイクルして建材として活用した、衣服のアップサイクルのための工房と販売所のコンプレックス。

ECO PARK TOKYO

新井陽

2024年現在、東京都文京区には、ゴミ処理施設が存在しない。そのため、排出されたごみは他の区にある工場に搬入されている。東京ドームの跡地という都市のヴォイドに「ゴミ処理施設」を計画することにより、文京区におけるごみの分別や資源化の促進を図るとともに、ゴミ処理施設を身近なものとして建築した。

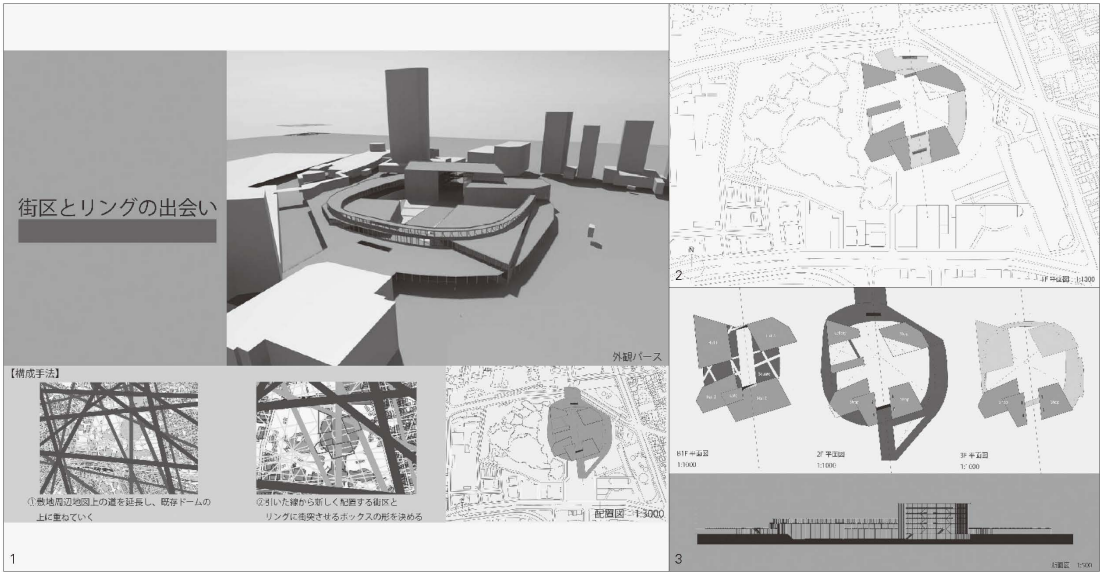


1. 鳥瞰パース
2. パース、平面図

街区とリングの出会い

吉原若奈

地図上で敷地周辺の道を延長し、既存のドームの上に重ねていくと、そこに新たな街区が現れる。この街区を元に、ホールや商業施設として使われるボックスの形を決め、既存のリング部分に衝突させる。また、外側のリングとは別にドーム内部にもこの街区割りを元に新たな抜け道を設けることで多様な動線を生むことを考えた。

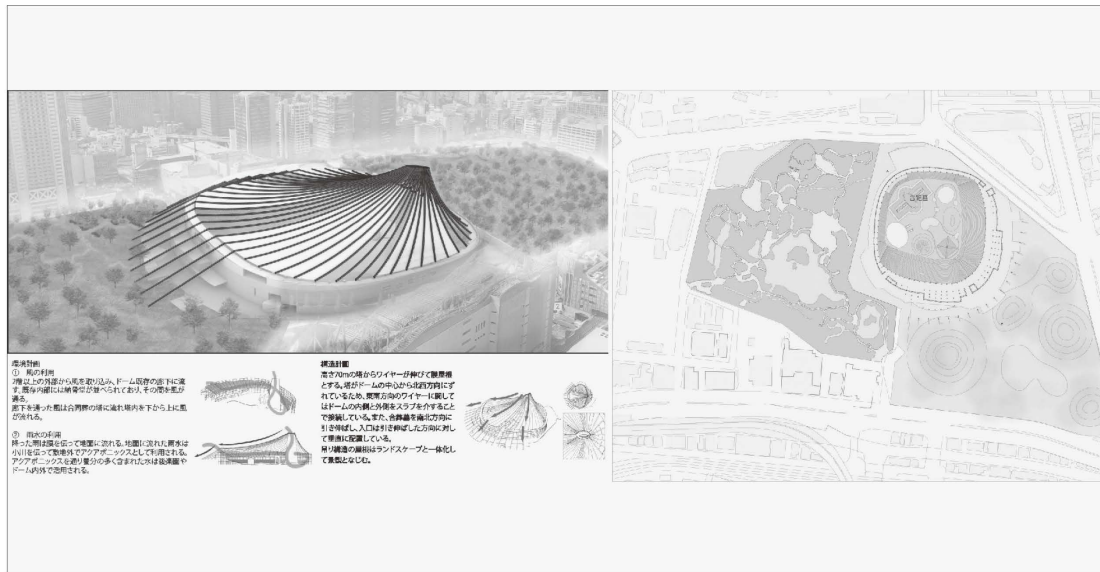


1. 右上:外観パース 左下:デザインの構成手法
2. 1F平面図。暗灰色で示されたホール空間と淡灰色で示された通路空間に分かれる
3. 上:B1,2,3F平面図。B1Fは1F同様にホールとして、2Fよりも上の階は商業空間としての利用を想定している 下:南北方向の断面図

安らぎの場となる 霊園計画

平田彩乃

都市レベルで行われている日常生活と霊園での体験を東京ドームとその周辺敷地に集約した。ドーム内には塔と塔からかかる膜屋根が求心性を与え、ドーム外は公園であり自然葬にも使用される。東京ドームから敷地外までをグラデーションに繋げている。生活の一部に故人や自身と向き合う空間を計画した。



- 左:鳥瞰パース 右:平面図

博士前期課程1年[春学期] 設計スタジオA

Graduate Program 1st year
Advanced Design Studio A

都市に溶け出すヴォイド

白銀綾乃

小石川後樂園、東京ドーム、ドームシティを一体とし、回遊自体を目的とした都市体験を計画した。塀や外壁等により周辺地域と隔たれている印象を抱くドームを崩しながら広げ、動線を通す。コミュニケーション、購買活動がオンラインで完結できる時代において、歩き回ること自体が都市体験の特徴だと考え、江戸時代から保存されてきた後樂園の回遊性を都市に拡張した。



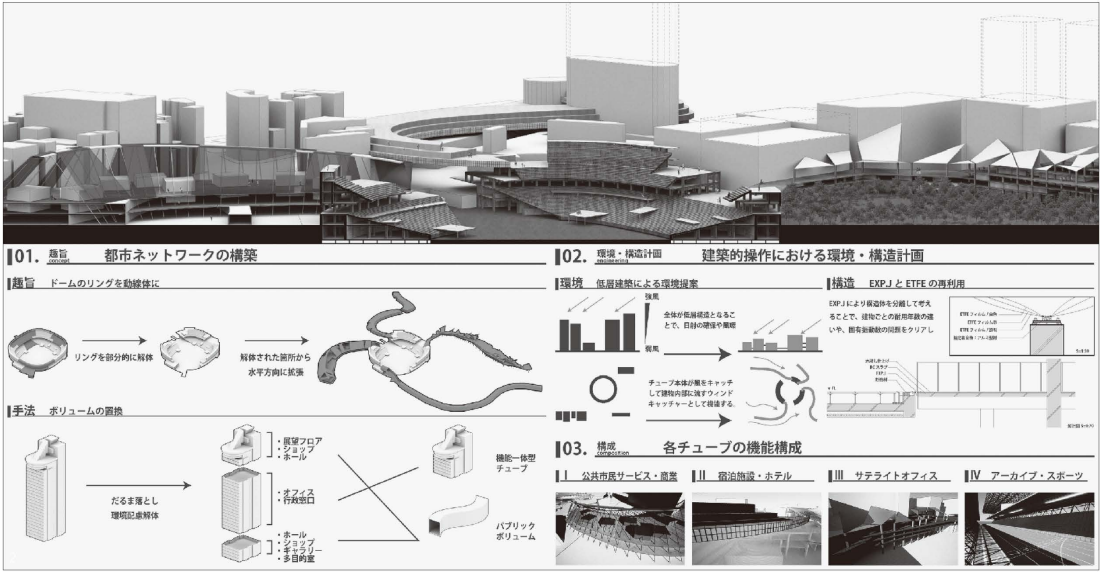
1. 全体パース:後樂園の回遊性を拡張する
2. 詳細パース、ダイアグラム:周辺地域との親和性を図る
3. 配置図:全体構成

都市置換接続

vol.01 _TOKTO DOME

山崎直樹

ドームのリングを一つの動線体と捉え、部分的に解体することで外部との接続を可能にする。スタンドアローンが基本となる現状の都市構造に対して、横に接続する形態を用いることで新たな都市のネットワークを形成する。周辺の高層建築から床面積の置換を行うことでチューブを伸ばし、既存の建築と閉ざされていたドームを都市に開放した。



- 上:全体構想図
下:設計手法と環境・構造計画

ヴォイドの戦略 2050

藤ノ木凌介

ヴォイドの戦略で不在(ヴォイド)は資本主義から逃れ、平板化されない独自性を持つ空間であった。しかし、そのヴォイドは公共性を持つが故、多様性を受け入れなければならない、使い方・使う人が平板化し、独自性を失っていると考えた。そこで、ヴォイドを中間領域化し、ヴォイドの平板化を逃れるための提案をした。



1. コンセプト。中間領域の作り出し方及び環境ダイアグラム
2. 左:ドーム内パース。自由な中間領域の使い方がなされている

- 右:ドーム外パース。後樂園の延長線上にある
3. 外観パース。ドームを中心とし、公共領域を少なくした

TWO-SIDED CITY

都市の二面性に棲まう

— 岸海星

地下に機能を与え、地上は小石川後樂園を延長した回遊式庭園的な空間にすることで、「開放」と「没入」という二面性をもった新たな都市を構想した。二面性をもつことで、都市そのものが個人の感性を受け入れる居場所となる。

先行形態を呼び起こし、重層化するという形態生成の手法によって、その土地の記憶と建築の強い結びつきを表現した。

Urban Ecovillage Dome

— 山田茜

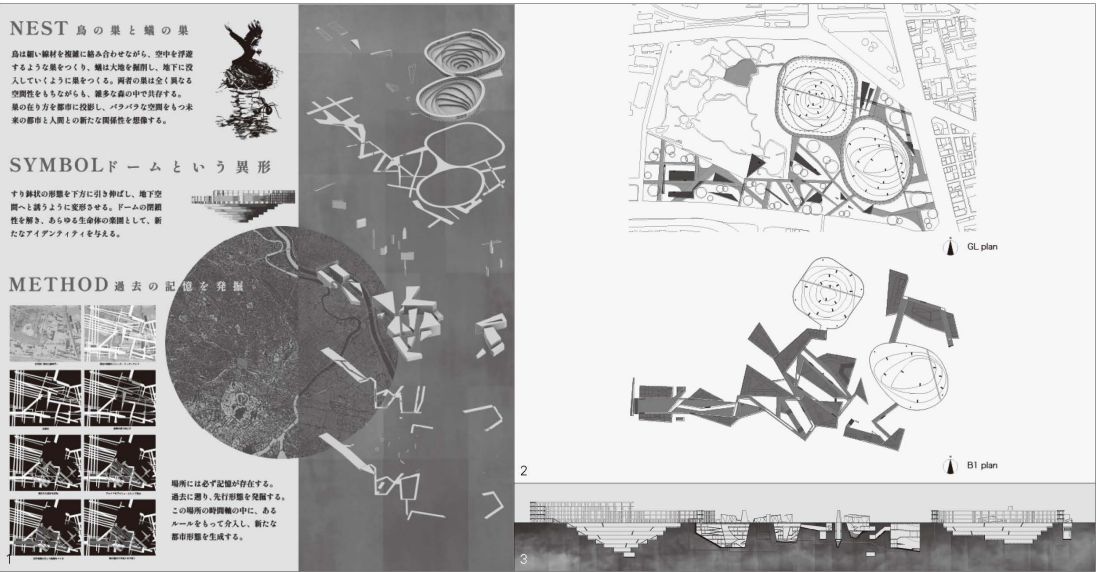
2050年までに文京区に流入してくる2万人が居住するエコビレッジの提案。住戸を水平方向にずらすことで棚田状の畑の空間、垂直方向にずらすことで水勾配ができ、それらの連続でドームの周りを生活排水が浄化されながら流れていく。住戸が向く方角によって様々な環境が生まれ、全方位がそれぞれの価値をもつ。

2050年東京ドームシティ構想

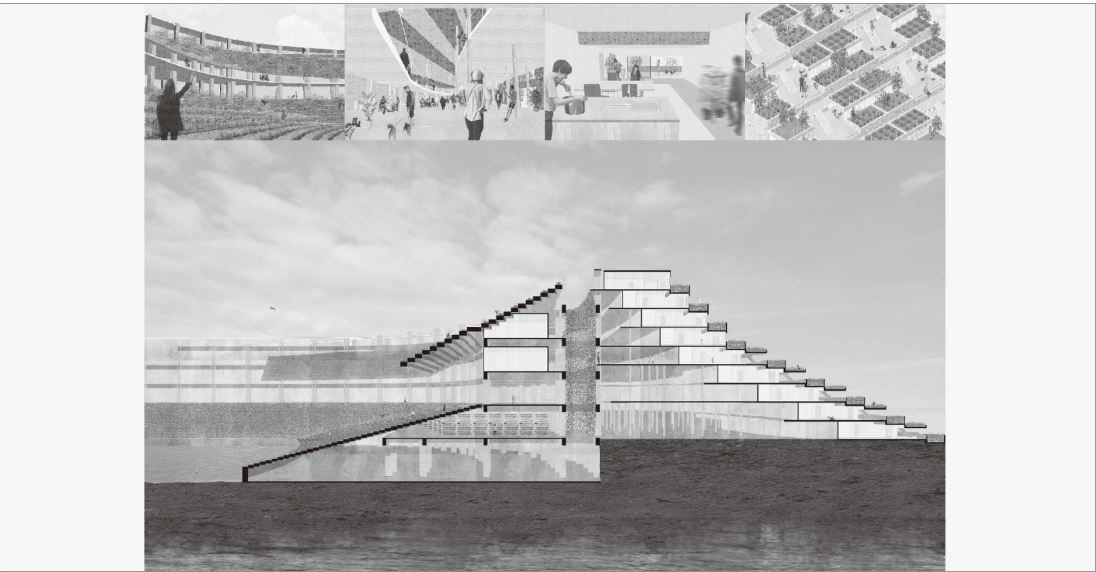
都市ストックとしてのヴォイドの再編とものづくりと林業の提案

— 森川颯斗

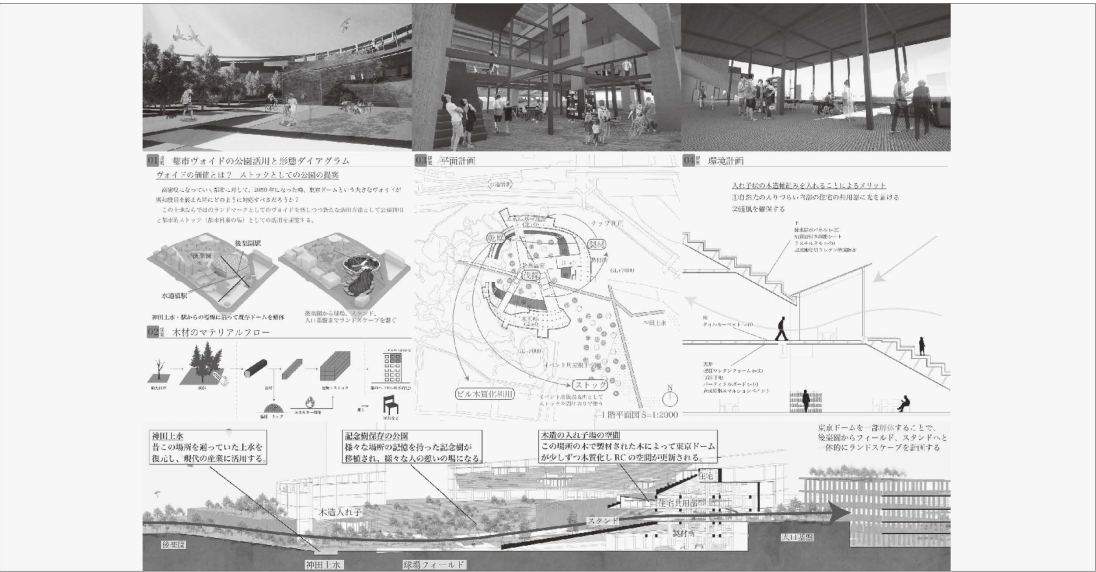
野球場としての役目を終えた都市ヴォイドは価値が大きいのではないか。ヴォイドとしての価値を公園として残しつつ、様々な場所の記念樹の記憶を継承した公園と木工所・住宅を提案する。既存のスタンドに対して木造の空間を入れ子状に配置することで光や風を取り込みながらスタンド外部は段々畑として住民に使われる空間となる。



- 1. コンセプト・リサーチ:先行形態から形態を導く
- 2. 平面図:リサーチを元にヴォリュームを生成する
- 3. 断面図 地下に存在する都市の形を示す



左上から:既存スタンドを改修した段々畑、
段々の住戸の下に広がる吹き抜け空間、住戸内観、
ドームの外周に現れる植生浄化槽の機能をもつ畑
下:断面パース



上:パース
中:設計手法と環境・構造計画
下:全体構想

博士前期課程 1年[秋学期]設計スタジオB

Graduate Program 1st year
Advanced Design Studio B

中山間地域の まち下仁田 における 実践的 ワークショップ

A Field-Based Design
Workshop in the
Mountainous Region of
Shimonita

指導教員

連勇太郎
宮崎晃吉
大河内学

課題パートナー

下仁田町

ゲストクリティーク

下仁田町のみなさま



1. 下仁田町の風景 2. 中間発表会の様子 3. 最終発表会の様子 4. 最終発表会の様子 5. フィールドワークの様子

・課題主旨

群馬県南西部、長野県との県境に近い中山間地域に位置する下仁田町。豊かな自然とともに、下仁田ねぎやこんにやくといった特産品で知られ、町の中心部にはかつての産業遺構や風情ある路地が今なお残されている。一方で、1980年代に1万6千人を超えていた人口は、現在では7千人台まで減少。町民の約半数が高齢者という急激な少子高齢化に直面しており、行政サービスや教育環境の維持も危ぶまれる状況にある。

しかし、都市のスプロール化から免れたコンパクトな市街地構造、空き家や産業遺産といった再活用の余地を持つ資源、個人経営の飲食店や都心部からの移住者による新しい試みなど、地域には持続的な未来

に向けた手がかりも随所に見られる。行政も「街なか活性化事業」に取り組み、市民参加によるまちづくりを推進している。

本スタジオでは、こうした下仁田町の現状と可能性をふまえ、現地に滞在しながら地域住民との対話を重ね、まちの未来像を建築的・都市的視点から構想する実践的なワークショップを実施した。

・設計の進め方

スタジオは三段階のフェーズで構成された。まず7月末に実施したイントロダクションにて地域の背景と課題を共有。その後、9月初旬には学生14名と教員陣で下仁田町に滞在し、町役場や地域住民の協力のもと、フィールドワークとリサーチ、中間発表を行った。滞在中は町内各所を歩いて観察し、

町民へのインタビューや実測調査を通じて、それぞれのグループが独自の視点をもとに地域の現状を読み解いた。

10月から12月にかけては、生田キャンパスでのエスキスを通じて提案を具体化。多様なアプローチを経て、建築的・都市的なスケールでの構想へと展開させていった。1月中旬には再び下仁田を訪れ、町民や行政関係者を前に、提案の成果発表会を開催。学生にとっては、地域に深く関わりながら学びをカタチにする貴重な実践の場となった。

・総評

本スタジオでは、学生たちは4つの班に分かれて取り組んだ。慣れないグループワークに最初は戸惑いも見られたが、次第にコラボレーションを楽

しむ姿が印象的で、それぞれの個性を活かしたチームワークが生まれていった。完成した4つの提案は、着眼点もアプローチもまったく異なるものでも、同じ地域を対象にしたながらも、多様な視点が浮かび上がったのは本スタジオの大きな成果である。

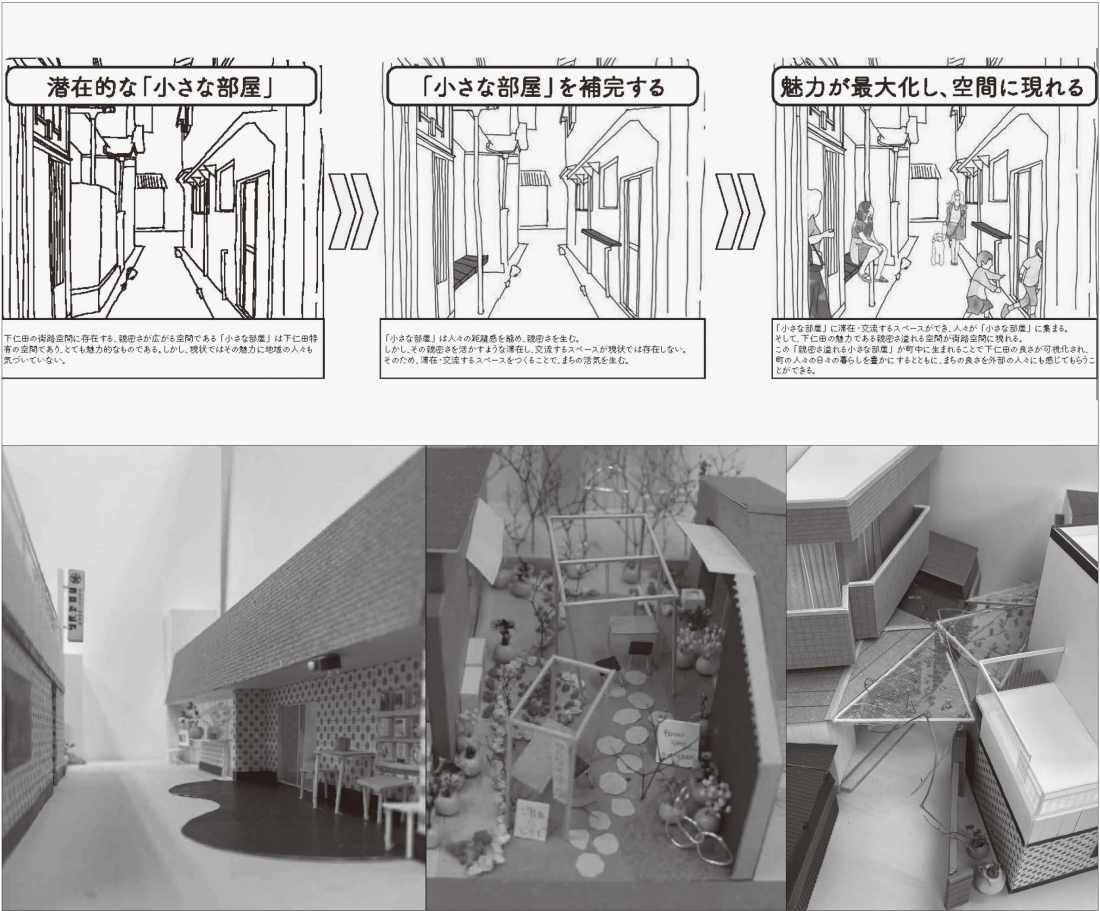
通常の設計課題では用途や敷地があらかじめ与えられるが、今回はまず現地に滞在し、自分の目で見て感じたことから

着想を得てプロジェクトを立ち上げるという、より開かれた設計プロセスを経験する機会となった。その経験を通じて、学生たちはプロジェクトの枠組みそのものを構想する力を養ったのではないだろうか。

最後に、本スタジオの実施にあたり、多大なるご協力をいただいた下仁田町役場の皆さま、そして温かく迎え入れてくださった地域住民の皆さまに心より感謝申し上げます。

スタジオ・スケジュール

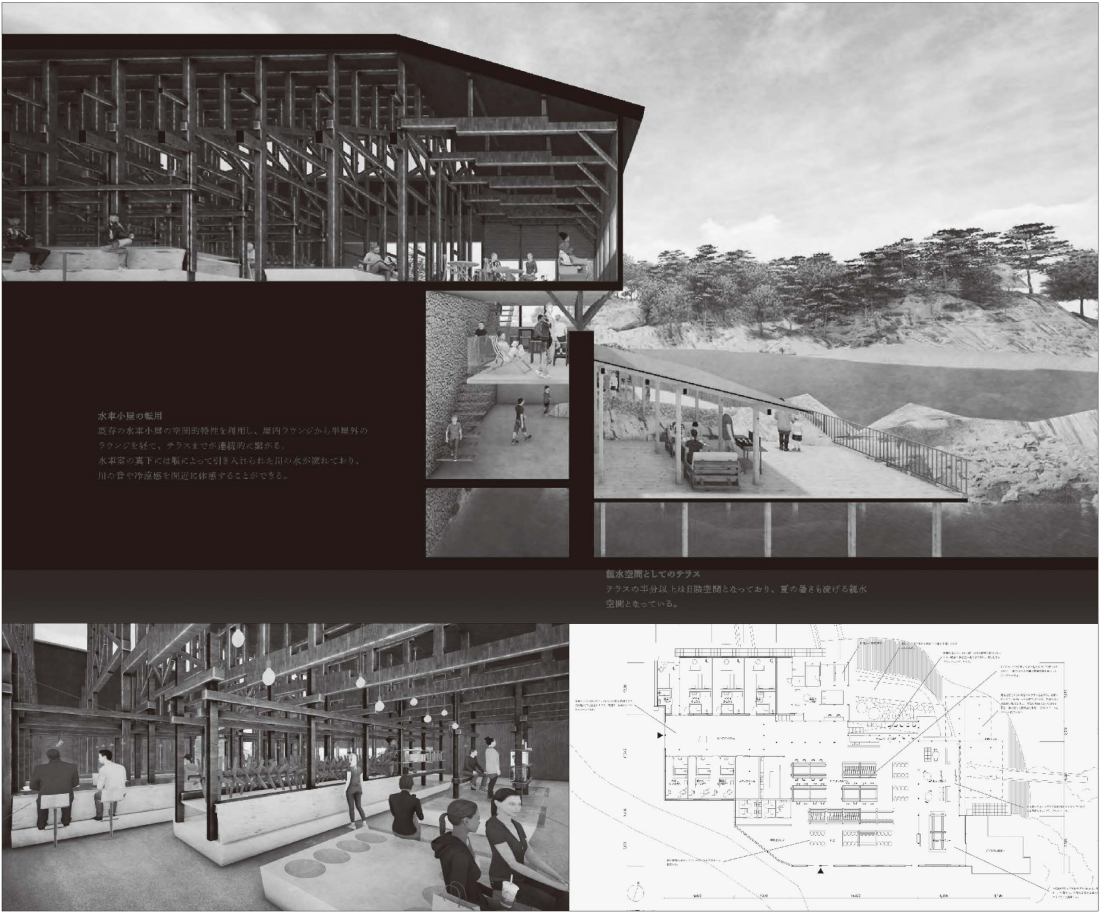
2024/07/29——課題説明+レクチャー
2024/09/02-09/06——現地合宿・フィールドワーク
2024/09/06——中間発表会(下仁田町役場)
2024/10/24——エスキス
2024/11/14——エスキス
2024/11/21——エスキス
2024/12/01——最終発表会(学内)
2025/01/17——最終発表会(下仁田町役場)、その後1カ月ほど役場で成果物展示



下仁田の ちいさな部屋

草山大成 | 見世真帆 | 外池梨々子
新沼達也 (聴講)

まちなかに点在する親密なスケールの空間を「小さな部屋」と名付け、その場に潜む魅力を「人間関係」「暮らし方」「住宅・まちのつくられ方」「時間と環境の変化」という四つの視点から読み取った。フィールドワークを通じて発見した場所のうち三箇所を選び、ささやかな空間的介入によって居心地や使われ方を豊かにする提案を行い、「小さな部屋」を増やしていくための仕組みの提案も行った。

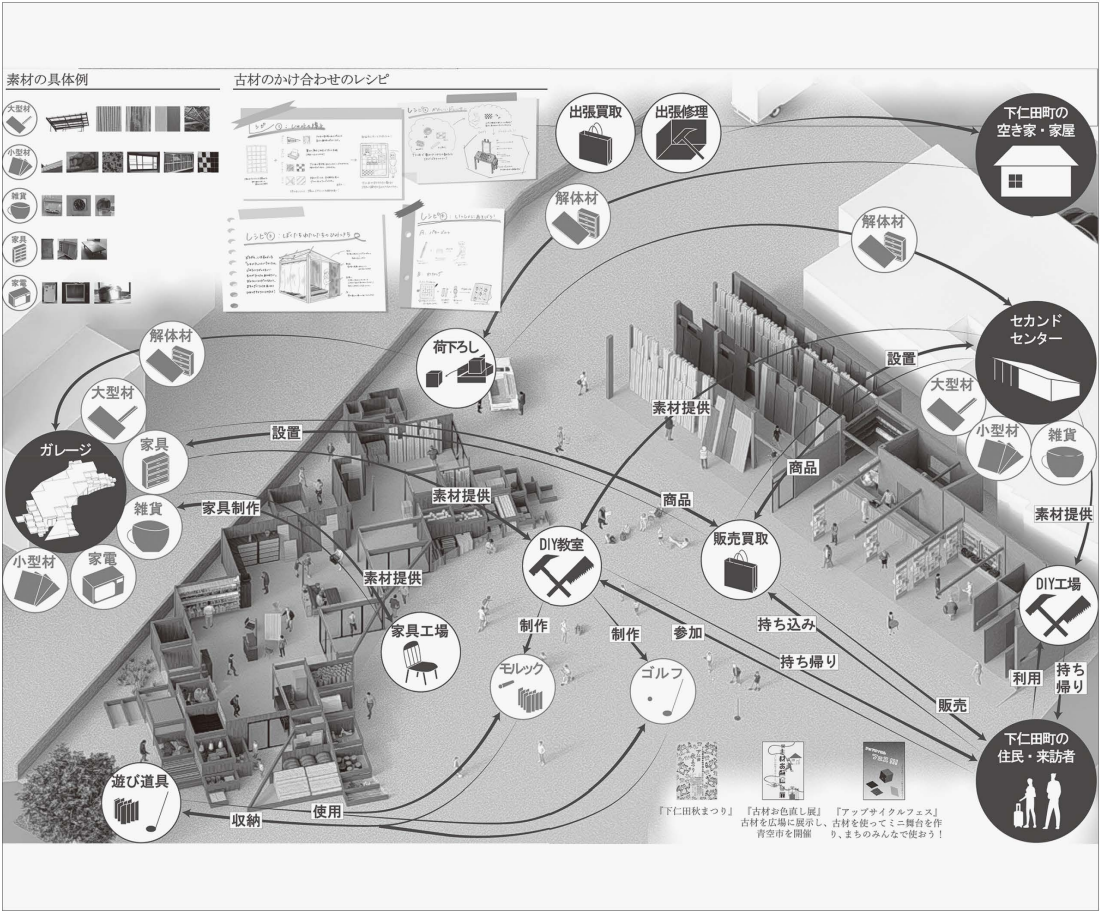


たじまや

産業遺産を起点とした川と暮らしの再編

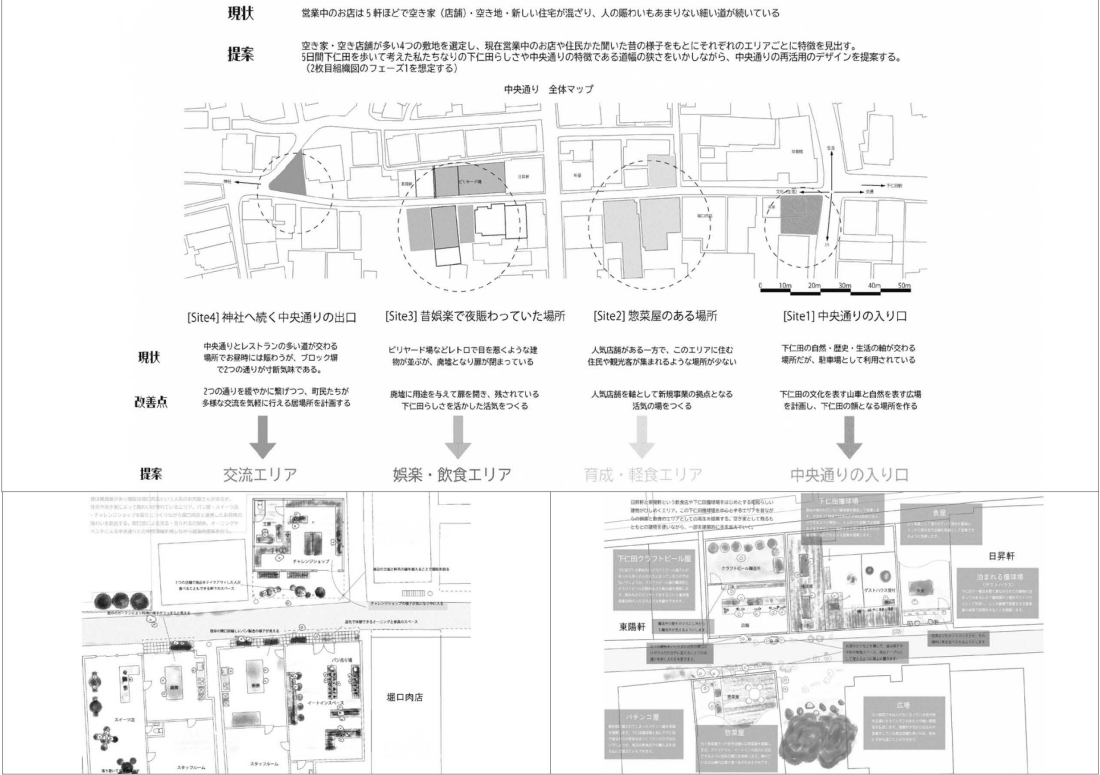
五島さくら | 川口敬 | 砂原芽生

滞在中に行ったフィールドワークを通して、川と地域産業の深い関係性を探った。豊かな水資源に支えられてきた町の歴史と生活に着目し、産業遺産である元こんにやく精粉工場を宿泊施設として再生し地域拠点とする提案を行った。精粉機を活用した家具、水車小屋を転用したラウンジ、精粉プロセスに即したブランニングなど、製粉と宿泊という異なるプログラムを結びつける建築的工夫を凝らした。



しもにた中央通り再生計画

下仁田駅を出てすぐ私たちを出迎えてくれる中央通り。数十年前は花街として栄え、高崎や高岡から多くの人が訪れていたと住民の方々は口を揃える。9月に行った5日間わたる下仁田町の調査を踏まえて、中央通りの再生計画を提案する。



2nd PARK

こんにやく道場から
作って・遊んで・遺す場へ

藤ノ木凌介 | 尾田明佳音 | 座間ゆず子

まちを歩く中で、建物の色づかいや素材、敷地からあふれ出す物たちに、住民の手の痕跡とまちの個性を見出した。こうした魅力が建売住宅の増加によって失われつつある現状に対し、まちの素材を集め掛け合わせる方法で更新する手法を提案。現在あるこんにやく道場をつくって・遊んで・遺す場として、新たな地域拠点として再編した。

しもにた中央通り 再生計画

鶴田航大 | 木村颯来 | 杉山諒丞

花街として栄えた下仁田の目抜き通りの再生プロジェクト。通り全体の状況を分析し、「中央通りの入り口」「育成・軽食エリア」「娯楽・飲食エリア」「交流エリア」の4つのエリアを選定し、それぞれの場所の特徴ごとに改修とプログラムの提案を行った。また、こうした状況を実現するために、下仁田町役場と連携し、地域おこし協力隊や個人事業主からなる再生計画委員会という組織を提案した。



Doctoral Thesis / Master Thesis

博士論文・修士論文／修士設計

博士論文
建築学系
環境・設備分野
建築環境デザイン 樋山恭助 研究室 Kyosuke Hiyama Laboratory
総合芸術系
映画論・都市論 清岡智比古 研究室 Tomohiko Kiyooka Laboratory
修士論文
建築学系
歴史・意匠・計画分野
建築史・建築論 青井哲人 研究室 Akihito Aoi Laboratory
建築空間論 大河内学 研究室 Manabu Okochi Laboratory
構法計画 門脇耕三 研究室 Kozo Kadowaki Laboratory
地域デザイン 川島範久 研究室 Norihsa Kawashima Laboratory
都市計画 山本俊哉 研究室 Toshiya Yamamoto Laboratory
構造・材料分野
木質構造 梶川久光 研究室 Hisamitsu Kajikawa Laboratory
シェル・空間構造 熊谷知彦 研究室 Tomohiko Kumagai Laboratory
構造力学 小林正人 研究室 Masahito Kobayashi Laboratory
建築材料 小山明男 研究室 Akio Koyama Laboratory
建築構造 富澤徹弥 研究室 Tetsuya Tomizawa Laboratory
建築生産 松沢晃一 研究室 Koichi Matsuzawa Laboratory
環境・設備分野
建築環境計画 上野佳奈子 研究室 Kanako Ueno Laboratory
建築環境工学 酒井孝司 研究室 Koji Sakai Laboratory
建築環境デザイン 樋山恭助 研究室 Kyosuke Hiyama Laboratory
建築設備 光永威彦 研究室 Takehiko Mitsunaga Laboratory
総合芸術系
批評理論 管啓次郎 研究室 Keiji Suga Laboratory
芸術学 倉石信乃 研究室 Shino Kuraishi Laboratory
環境人文学 鞍田崇 研究室 Takashi Kurata Laboratory
修士設計
構法計画 門脇耕三 研究室 Kozo Kadowaki Laboratory
地域デザイン 川島範久 研究室 Norihsa Kawashima Laboratory

博士論文・修士論文		
Doctoral Thesis / Master Thesis		
博士論文 Doctoral Thesis		
建築環境デザイン 樋山恭助 研究室 Kyosuke Hiyama Laboratory		

オフィス建築における快適性・知的生産性の評価及び最適運用の為の機械学習手法の適用

竹内健一郎	本研究では、オフィス運用の実態調査として最新のオフィスで働く執務者の快適性や知的生産性等の調査を行い、オフィス環境の制御・運用を行う上で課題を明らかにした。また、その運用の最適化を目的に物理シミュレーション手法と機械学習手法を組み合わせて両者の長所を活かし課題を補完し合う複合手法を提案し、その有用性を示した。
-------	---

映画論・都市論 清岡智比古 研究室 Tomohiko Kiyooka Laboratory		
増村保造論		
戦後日本の映画的身体		
中島晋作	映画監督増村保造を、映像身体論的なアプローチで捉えた作家研究。映画に映る身体は、物理的現実としての俳優の身体と、表象としての身体と	の混交物である。俳優の個性が映像表現に与える影響を鑑みつつ、分析方法としては映画テキストのスタイル分析を中心に研究を行った。
修士論文 Master Thesis		
建築史・建築論 青井哲人 研究室 Akihito Aoi Laboratory		

横浜港のコンテナリゼーション

先進的港湾ゆえの複合性をはらんだ社会＝空間の再編過程		
酒井達樹	本研究はコンテナリゼーションによる横浜港の再編過程を検証した。横浜は先進的港湾ゆえに漸進的な変容を遂げる。その結果、港湾地帯や近接背後地では在来体制下で機能していた空間がコンテナ体制導入のため	の空間的資源として転換されることを明らかにした。また港湾労働者住宅の建設事情にも着目し、港湾社会のより広域な連関を示した。

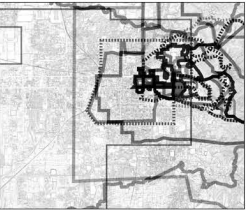
江戸の廃墟／廃墟からの東京

都市再編の揺籃としての武家地の田園化／再市街化を再現する		
佐々倉一紗	近代日本の首都「東京」は、その誕生において「廃墟」であった。そこで、先行研究が解明してきた歴史過程を前提に、「廃墟」をめぐる物理的・社会的な機相を復元的に描写する。これにより、「郭外」の武家地における	荒廃から復興への具体的な風景の変化と発展の速度を明らかにした。さらに、桑茶令と表長屋の町屋転用に関する実態を示した。

白浜町三段と戦後開拓地

地域史・生活史の調査と農村建築研究会の記録から		
敷地優	戦後開拓地は農業生産性の低い処女地に新たな自律的共同体が築かれたかのように捉えられがちである。本研究は南白浜開拓地を対象に①開拓地は既存集落との密接な関係のもと形成されたこと②経済成長に伴う社会・産業構造の変化は開拓地に変容を迫るということ③開拓地の変容が既存集落との関係を再編することの3つを論点に戦後開拓史を描いた。	

動物信仰と都市境界

聖性と世俗秩序とのせめぎあいの歴史としての「奈良の鹿」		
舘衿花	奈良の鹿を題材に動物と都市の境界の結びつきを解明する研究。筆者作成の境界地図の検証から、自然景観と聖域機能が持続的な人ー動物共生の基盤として機能していることがわかった。	

敷地優	戦後開拓地は農業生産性の低い処女地に新たな自律的共同体が築かれたかのように捉えられがちである。本研究は南白浜開拓地を対象に①開拓地は既存集落との密接な関係のもと形成されたこと②経済成長に伴う社会・産業構造の変化は開拓地に変容を迫るということ③開拓地の変容が既存集落との関係を再編することの3つを論点に戦後開拓史を描いた。
-----	--

東日本大震災の津波被災地における「記憶の場」の諸特徴

立地・軸性・展示		
寺嶋基紘	本研究は東日本大震災における震災伝承施設および復興祈念公園を対象として、記憶の場の形成に関わる基礎的把握を試みたものである。各施設では複雑で多様な記憶を内包し、後世に継承するための工夫が施され	ている。特に設置・管理主体の規模や政治過程で発生した葛藤が、建物の立地や祈りの対象、災害展示に影響を及ぼすことが明らかとなった。

周縁化された人々の「被爆」と「復興」

カトリック信徒・被差別部落民・朝鮮人労働者の「語り」の網目としての長崎市浦上地区の戦後空間		
宮田恵	これまで旧市街との対立構造の中でのみ捉えられてきた長崎市浦上地区の「被爆」と「復興」を、本研究は周縁化された3集団の「語り」とその形成過程を通じて再考する。1980年頃に「語り」の変化や創出が見られ、それらと環境整備が相互に作用していたことを明らかにし、浦上地区の戦後の空間形成に関わる多様なファクターを示した。	

大型障がい者収容施設「コロニー」の計画論

機関紙に記録された国立コロニーに関する証言群から		
山口脩人	「コロニー」とは障がい者の終生保護を可能にする大型障がい者収容施設である。本研究は入所者と職員の社会生活や施設環境に目を向けて、それらを復元的に捉える。国立コロニーを対象とした特養と比較した建築	計画の分析と、雑誌・機関誌掲載の証言から見る入所者・職員の暮らしの実情解明によってコロニーの計画学の解明を試みた。
建築空間論 大河内学 研究室 Manabu Okochi Laboratory		

ショッピングモールから庁舎建築への用途変更における改修手法

立地計画・配置計画・ゾーニングに着目して		
岡田泰一	近年、地方においてショッピングモールのデッドモール化が進む中、公共施設として転用される事例が見られる。本研究では、ショッピングモールから庁舎へと用途変更された7事例の従前従後の平面計画を分析した。	建築計画学の観点から多くの類似性があることが確認されるとともに、モール空間やバックヤード空間の活用法が明らかとなった。

国産材の流通フローから読み解く森林の空間特性

宮城県登米市・岐阜県郡上市・岡山県真庭市の比較を通じて		
金川拓海	設計者や施工者は一般的に流通している建材や内装材を工務店などから仕入れるが、その木材はどこで伐採された木材でどのような流通経路を辿って手元までやってきたのか知らないことがほとんどである。本研究で	は各地域の林業従事者へのヒアリング調査を通して、県境を横断する範囲で木材流通構造を図化し、森林の空間特性について明らかにした。

現代中層木造集合住宅にみる高度なインテグレーションと設計手法

スイス・オーストリア・ドイツと日本の比較を通して		
末吉祐貴	欧州3カ国の中層木造集合住宅を対象に、構法、構造、設備、生産体制等が統合された特徴が明らかになった。ここから、日本における課題として、各計画において最適なエンジニアリングウッドやプレファブ技術の活用が	重要であることが示唆された。また、環境負荷低減や施工効率向上の可能性も確認され、今後の発展に向けた方向性が見えてきた。

工場併用住宅の増改築を通して見た大田区大森南地区の変容

三橋裕希	大田区大森南地区には、長い歴史の中で繰り返された増改築の痕跡を持つ工場併用住宅が存在する。本研究ではこれらの増改築の種別が7つに整理できること、分布には地域ごとの偏りが見られることを明らかにした。	また、地域特性や土地利用の状況が増改築に影響を及ぼし、一定のエリアや産業構造の変化に基づいて変容してきたことも示された。
------	--	--

アートプロジェクトにおける芸術活動の展開と受容・協働の地域差

「大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ」を対象として		
山崎直人	本研究は、一様に見えるアートプロジェクトでも地域によって活動に違いがあると仮説を立て、大地の芸術祭を対象に、活動主体ごとの地域での取り組みについて分析した。その結果、地域ごとに活動の差異が見られ、	NPOや行政もそれぞれの状況に応じた運営を行っていることが明らかになり、今後のアートプロジェクトのあり方について考察した。

構法計画 門脇耕三 研究室 Kozo Kadowaki Laboratory

DIYにおける「女性らしさ」の形成と変容

メディア表象と実践者の語りの分析を通じて		
市花恵麻	本研究は、建築ジェンダー研究において、家庭内の女性を生産者として捉える新しい視点から、女性のDIYに着目し、ものづくりがジェンダーの形成に与える影響を明らかにする試みである。メディアが描くDIYのジェンダー規範を多重対応分析で抽出し、11名の女性DIY実践者へのインタビューを通して、規範との一致および逸脱の様相を明らかにした。	

都市における「材料空間」の変遷

明治期から現代の静岡県三島市の商店街・駅前広場を対象として		
漆畑昂明	本研究では、公共空間を構成する物的要素の集合を「材料空間」と定義し、都市空間の歴史的変遷を総体的に把握する。調査によって独自の時代区分を導き出し、さらにその転換の要因を生産、社会背景との関連から示すことによって、三島の公共空間の形成の特性、問題点を浮き彫りにし、今後の公共空間創造の足がかりをつかむことに繋がった。	

ガラスカーテンウォールのユニット構成とファサードの複雑性

2000 年以降の商業施設を対象として		
大野友莉	近年、ガラスの種類組み合わせや構法の進歩によりガラスカーテンウォールが、ファサードの差別化に重要な役割を果たすようになった。本研究では、カーテンウォールのユニット構成及びファサードの構成要素を	大別し、両者の関係を分析して5つの設計手法に集約した。さらに、それらの手法に属する建築の複雑性を評価し、有用性を明らかにした。

アニメーション映画における都市表現の研究と設計手法の開発

押井守作品を対象として		
川本航佑	押井守のアニメーション映画における都市空間の表現手法を分析し、設計手法の開発を行った。分析から香港の街並みに東京的な要素を組み合わせることで匿名的な都市を表現している点に着目し、東京性をパレ・ド・トーキョーに重ね合わせるにより、新たな様式の建築を設計することを試みた。さらにはそこでの体験を映画製作を通して検証した。	

圧縮軸力と曲げモーメントを受ける木製偏心圧縮材で補剛された鋼製軸力材の座屈性状

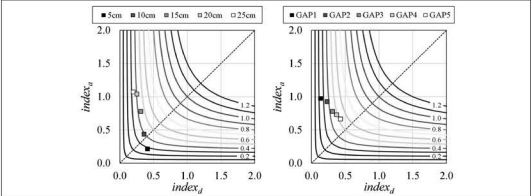
蔡俊雅	目的 木製偏心圧縮材で補剛された鋼製軸力材が圧縮軸力<i>N</i>に加えて曲げモーメント<i>M</i>を受ける場合の座屈性状をラチスシェル構造部材に発生する応力を参考に設定した<i>M</i>分布、荷重偏心量$eN/l(eN=M/N)$について、	弾塑性座屈解析により明らかにする。 結論 <i>M</i>分布により座屈性状は異なるが、座屈荷重低下率の差違は小さく、$eN/l=0.003$では2割前後となる。
-----	--	---

偏分布雪荷重を受ける部材細長比が異なる単層ラチスシェルの最適形状と信頼性指標の関係

茂田暁	目的 単層ラチスシェルを対象に、雪荷重の偏載度、部材細長比をパラメータとし、ひずみエネルギーを目的関数として形状最適化を行い、得られた最適形状を対象に信頼性解析を行う。	結論 細長比が大きいほど、同一の信頼性指標βを満たすのに必要な荷重係数は大きく、雪荷重が偏載するほど、同一のβを満たすのに必要な荷重係数は小さい。
-----	--	---

構造力学 | **小林正人 研究室** Masahito Kobayashi Laboratory

不感帯機構付きオイルダンパーを用いた免震建物の要求性能に着目した応答評価法の提案

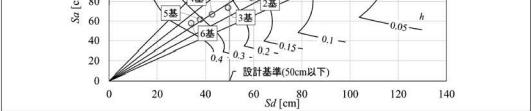
古澤海斗	大振幅地震動対策として開発された不感帯機構は、パラメータに対する免震性能の定量的な評価が行われていない。本研究では、要求性能に基づき定量的な応答評価法を提案した。	
------	--	--

免震層変位と上階加速度の応答評価

免震部材の繰返し変形による特性変化を考慮した応答スペクトル法に基づく免震建物の地震応答予測

鉛プラグ挿入型積層ゴムとオイルダンパーを併用した免震建物への適用

千田悠人	長周期地震動により生じるLRBおよびODの繰返し変形による特性変化を考慮した応答スペクトル法を構築し、応答を安全側に評価するとともに構築手法の有用性を示した。
------	--

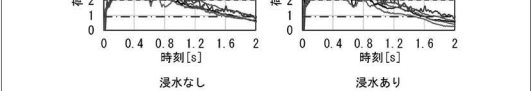


OD基数を変数とした提案手法による免震層設計の検討例

免震建物に作用する津波サージ力と応答性状に関する研究

免震クリアランスの実況を踏まえた動的応答評価

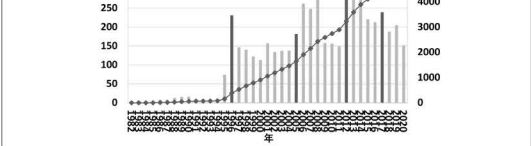
曽根克彦	免震クリアランスおよび免震ビットを再現した免震建物の縮小模型を用いて水理模型実験を実施し、免震ビットの浸水状態が津波荷重と応答変位に及ぼす影響を明らかにした。
------	--



各試験体作用する津波荷重と各津波荷重算定式より算出した津波荷重の比較

設計用入力地震動の変遷に着目した免震建物の設計データの分析

平田憲史	最初の建設から約40年が経過した免震建物の設計動向が把握されていないことを背景に、本研究では性能評定・評価シートに掲載されている免震建物の設計データを分析した。
------	---



免震建物の計画棟数と累積棟数

RC柱－S梁混合構造の梁端接合部の構造性能に関する研究

芳野瑠風	圧着接合法を用いたPC－S工法について、施工性の向上と実用化を目的とした梁端接合部を提案し、載荷実験及びFEM解析の双方から提案した梁端接合部の構造性能を確認した。
------	---



提案した梁端接合部の載荷実験の様子

設計用入力地震動に対する免震建物の損傷状態を考慮した確率論的余裕度評価

松田恭佑	設計用入力地震動を用いて漸増動的地震応答解析 (IDA) を実施し、免震建物の終局状態に至るまでの損傷状態を把握しながら、余裕度を確率論的に評価する方法の枠組みを示した。	
------	--	--

上部構造と免震層のIDA曲線

建築材料 小山明男 研究室 Akio Koyama Laboratory	
---	--

各種粒状化再生骨材およびそれを用いたコンクリートの諸性状に関する実験的研究

安田魁	余剰コンクリートの二次利用先として粒状化再生骨材を製造し、これを骨材として用いたコンクリートの普及促進を目的に、粒状化材や炭酸化が与える影響の検討を行った。実験の結果、粒状化材によって普通コンクリー	トと同等の品質を有するものもみられ、コンクリートへの適用性は十分であった。また、炭酸化による耐久性の向上が確認された。
-----	--	--

建築物の解体工事から排出される廃棄物発生量の推定および廃棄物の中間処理による環境負荷に関する調査研究		
渡邊洸太郎	解体工事から排出される廃棄物排出量の把握および廃棄物処理による環境負荷の算出を目的として、解体工事から発生する廃棄物量の推定に関する実態調査と、中間処理施設における廃棄物処理に係るCO ₂ 排出	量の調査を行った。その結果、解体工事業者の特徴と廃棄物発生見込み量の関係、中間処理施設の特徴とCO ₂ 排出量の関係を明らかにした。

石炭ガス化スラグ細骨材を用いたコンクリートにおける品質確保方法に関する研究

佐藤諭太郎	産業副産物である石炭ガス化スラグ細骨材（CGS）について、コンクリートに用いる場合の品質確保方法として、CGSの混合率や混和材の使用によるコンクリート諸性状への影響について検討を行った。その結果、CGSを	用いたコンクリートの品質確保方法として混和材の有用性を示し、また調査設計における手順および指針について提案を行った。
-------	---	---

コンクリートと鉄筋の付着特性に及ぼすブリーディングの影響

林歩云	コンクリートのブリーディング量と鉄筋付着強度との関係を定量化することを目的に、調査における諸要因がコンクリートのブリーディング性状および鉄筋付着性状に対する影響を実験的に検討した。その結果、単位水量、	結合材および鉄筋高さ位置の違いとブリーディング量の関係、ならびにブリーディング量と付着強度の関係を定式化した。
-----	---	--

建築構造 | **富澤徹弥 研究室** Tetsuya Tomizawa Laboratory

鋼構造建物の保有水平耐力計算における層間変形の算出方法に関する考察

小泉建人	本論文では、保有水平耐力計算法に基づき、極稀地震時の架構の応答層間変形を求める手法を考察している。具体的には、架構の塑性化に伴う長周期化を考慮した外力分布、限界耐力計算の安全限界変位を用いた到	達変形角に着目し、保有水平耐力計算における荷重増分解析結果から極稀地震時の層間変形を評価している。
------	---	--

有限要素法による風力発電設備支持物の応答分析と損傷度評価に関する研究

高橋恵介	本論文では、有限要素法解析により、風力発電設備支持物の応力状態と主要な振動モードを明らかにしている。解析結果から損傷度を評価し、実測結果に対して約15%の誤差で解析結果の妥当性を示した。また、高さ	方向の疲労損傷度と最大主応力RMS値の分布から、支持物の中間部から上部にかけて疲労損傷度が高くなる傾向を示した。
------	---	---

大振幅地震動に対する制振構造の変形集中を抑制する設計手法の提案

高柳優希	本論文では、大振幅地震動時に各層の応答分布が同時に最大値に達する状態を経済設計上の理想的な条件のひとつと考え、各層の最大応答層間変形角の一様化を目指した座屈拘束ブレースによる制振構造の設計法	を提案している。これにより、P-Δ効果を考慮した場合でも特定層への変形集中を抑制可能であることを示した。
------	--	---

等分布積雪荷重下における発泡ポリスチレンアーチ構造の開孔配置に関する構造・採光性能の多目的最適化と感度解析

永井薫哉	本論文では、農業ビニルハウスに代わる発泡アーチドームを対象としている。最適化手法を用いて、制約条件を満たすアーチ上の開孔位置を大局的に探索し、感度分析を通じ開孔配置と構造性能・採光性能との関係を	体系的に整理している。また、発見的手法によらず、構造性能を保ちながら採光性能を最大化する設計手法を提案している。
------	--	---

粘性ダンパーを用いた制振建物のエネルギー法に基づく長周期長時間地震動の応答評価法の提案

松尾安紘	本論文では、長周期長時間地震動による入力エネルギーの増大および粘性ダンパーの温度上昇による性能低下を考慮し、エネルギーの釣合いから粘性ダンパーの減衰効果をエネルギー法に基づく構造計算に陽に反映	し、粘性ダンパーを用いた制振建物の長周期長時間地震動に対する応答評価法を提案している。
------	---	--

懸架型パラレルリンク機構を用いた免震システムの水平鉛直動的力学特性に関する研究

矢部隆太郎	本論文では、鉛直方向も免震可能な懸架型パラレルリンク機構を研究対象としている。機構を構成する油圧シリンダ単体の要素試験を行い、機構全体の動的解析モデルを構築した。構築したモデルによる地震応答解	析、縮小装置を用いた振動台加振実験により、懸架型パラレルリンク機構の水平鉛直動的力学特性を明らかにしている。
-------	---	---

建築生産 松沢晃一 研究室 Koichi Matsuzawa Laboratory		
アンボンド PCaPC 壁の構造性能評価に関する研究		
根岸真子	目的 アンボンド PCaPC 壁の実用化に当たり、骨格曲線の評価手法を提案しその妥当性を検証した。 内容 4 体の試験体の載荷実験を行い、MS モデルを用いた弾塑性解析により実験結果の再現を図った。更に、マクロモデルを用い骨格曲線の評価法を検討した。 結論 実験の検討より当該部材の高優位性を確認し、提案した骨格曲線は実験結果と精度良く対応した。	
建築環境計画 上野佳奈子 研究室 Kanako Ueno Laboratory		
二つの BoSC 再生室を用いた聴取体験システムの構築		
他者との音場共有の効果の検討		
安念佑真	本研究では、従来の境界音場制御の原理に基づく音場再現システムを拡張して、三次元音コンテンツの聴取と三次元会話空間の生成を同時に行うことが可能な音場再現システムを構築した。三次元音コンテンツを聴取しながら二者間での共在感のある会話を行う心理評価実験を行い、楽しさや共有感において聴取体験の価値が増すことを示した。	
博物館における発達障害者のアクセシビリティ向上に関する研究		
感覚特性に配慮した情報提供方法の検討		
木下晏里沙	博物館利用における発達障害者のアクセシビリティ向上のための基礎研究として、感覚刺激となり得る環境要素の情報提供方法に関わる検討を行った。博物館利用に関する困りごとや要望、鑑賞型・体験型の博物館での刺激となり得る環境要素、休憩場所に求められる条件、情報提示手法に関する調査結果を踏まえ、施設向けのガイドを作成した。	
発達・知的障害者支援における音環境調整手法に関する研究		
栗山秀一郎	障害者の支援施設における音環境改善の可能性を探ることを目的として、未就学児童の療育施設及び重度知的障害者のデイケア施設における実験的研究を行った。局所的に静穏な場所をつくる小空間、室全体の残響を調整する吸音カーテン、音刺激によるトラブルの抑制をねらったサウンドマスキング等を導入し、有効性を確認した。	
小学校における音環境保全に向けた研究		
普通教室の音声明瞭度に着目した検討		
Wang Yutan	デジタル教科書など音を伴う教材の導入が進む中、ICT 教育を導入した教室の音環境整備の普及に向け、実態調査と吸音材設置実験を行った。本研究では、小学校の普通教室を対象として、音声明瞭度や残響時間などの物理的指標と意識調査を分析し、その結果を踏まえ、吸音材設置による音環境改善効果と教室活動への影響を検討した。	
建築環境工学 酒井孝司 研究室 Koji Sakai Laboratory		
植物工場内の生育環境把握と省エネ性能評価に関する研究		
井上倫菜	本研究では、気候変動の不安定化に伴う食物不作等への対応を背景に近年益々重要度が高まっている植物工場を対象に、生育環境に優れ、かつ省エネルギーな空調方式の提案を目的とし、従来方式に小型ファンを導入する方式を新たに提案した。また、CFD 解析を行い、断熱性向上による省エネ効果と局所換気導入効果を定量的に明らかにしている。	
集合住宅における暖房方式の差異が温熱環境に及ぼす影響の把握に関する研究		
王梓威	本研究では、中国北方地域の集合住宅を対象に、床暖房とセントラルヒーティングの暖房方式が室内温度分布に与える影響を、CFD 解析を用いて比較・分析した。また、断熱性能や換気条件が暖房効果に及ぼす影響を詳細に検討して各方式の特性を明らかにしている。更に、掘壕地における最適な暖房方式選定に向けた重要な知見を蓄積している。	
大空間内温熱環境の CFD 解析手法に関する研究		
郭暢	本研究では、3つの異なる大空間の温熱環境を対象に詳細な CFD 解析を行っている。空港ロビー解析では、スポット空調の実用性を示している。地下鉄構内解析では、非定常解析による地下鉄通過時の風圧変動特性を明らかにしている。体育館解析では、モーメント法を用いた簡易解析手法を提案し、その有用性を示している。	
GPU を用いた屋外気流の CFD 解析		
清水 理央	本研究では、LES にセミラグランジュ法を用いた GPU 解析を適用する手法を構築するとともに、風洞流入風データの補間方法を提案している。また、風洞ベンチマーク問題を対象として、解析精度の確認を行っている。	
建築環境デザイン 樋山恭助 研究室 Kyosuke Hiyama Laboratory		
ホールライフカーボン削減に向けたファサード設計に関する研究		
岡野 廉	建築分野におけるホールライフカーボン (WLC) 削減の観点から、ファサード仕様ごとの運用時と建材製造・輸送・廃棄時に排出される GHG を熱負荷シミュレーション・先行研究から分析し、排出量の比較を行った。結果、ファサードの選択が WLC に大きく影響し、削減には長期的視点での戦略的設計が必要であることが示された。	

PCM を用いた換気窓の開発と季節別の運用最適化

辻 悠太	本研究は、PCM を用いた換気窓を開発し、季節別の運用方法を検討した。夏季は排気窓として運用し、窓表面や中間層内の空気の温度上昇を抑制する。冬季は PCM の日射蓄熱により導入外気を昇温させる。また、外気導入量の低減やブラインドの下げ幅を調整し、更なる昇温や放熱の持続時間を延ばすことが可能であると示した。	
------	---	--

建築設備におけるエンボディドカーボンの実用的データ整備に関する研究

吉田裕紀	本研究では、仮想と実在の建物の BIM モデルを活用して空調設備のアップフロントカーボンの試算と評価を行い、その削減方法について検討した。またダクトに関して、製造データを用いて既存のものよりも評価範囲の	
------	---	--

建築設備 光永威彦 研究室 Takehiko Mitsunaga Laboratory

大学学生寮における水使用実態の把握および動的給水給湯負荷算定法の適用

細井美奈	利用者の吐水流量、占有時間等の設定により、瞬時負荷から日負荷まで給水負荷を算定できる動的給水給湯負荷算定法の活用が期待されている。その負荷算定精度を高めるためには実測に基づく実態把握が重要となる。本研究では、実測データに乏しい大学学生寮を対象に、給水給湯負荷に関するデータの蓄積、動的給水給湯算定法の精度検証をした。	
------	--	--

学生寮大浴場における浴槽の給湯熱量に関する研究

稲垣佳絃	大学学生寮にある大浴場を対象に、中央給湯方式および運用方法のシステム最適化を目的とし、その基礎となる大浴場に関連する機器や運用の基礎特性を分析し、浴槽の損失熱量の定量的評価に関して検討した。浴槽からの損失熱量の要因のうち、蒸発による損失熱量が最も大きかったため、浴槽 1/10 モデルを製作して、その損失熱量の低減策を提案した。	
------	--	--

批評理論 菅啓次郎 研究室 Keijiro Suga Laboratory

(詩集)『錨氷』 | (論文) 城山ダム建設と水没地不津倉について

大竹典子	詩集『錨氷』では、歴史や時代、戦争や国策に翻弄された人々の視点から、社会の在り方や時代を考察する詩作を試みた。論文「城山ダム建設と水没地不津倉について」では、城山ダム建設の経緯、水没予定地不津倉集落の人々の反対運動、伝統行事や日常生活の様子を旧住民への聞き書きにより記録した。また今後のダム建設の在り方について考察した。	
------	--	--

芸術学 倉石信乃 研究室 Shino Kuraishi Laboratory
--

グスタフ・クリムトのユーディット像

斬首と装飾について		
鳥山桜子	クリムトのユーディット像がフアム・ファタルに分類されてきた要因を、フロイトの「斬首＝去勢」とクリステヴァの「斬首の形象化」の理論に着目し分析した。斬首を主題とする《ユーディット I 》および類似した構図を持つ《パラス・アテナ》《彫刻の寓意》に共通する装飾についてジェンダー論的な解釈を試み、新たなユーディット像を提示した。	

環境人文学 鞍田崇 研究室 Takashi Kurata Laboratory

盆栽のモダニティ

観察対象としての「自然」		
武井一毅	近代盆栽における「自然」の位置づけを主題として、明治後期の盆栽に関わる社会的・思想的背景に焦点を当てた。主な論点は、盆栽における美術の受容と「自然」に対する認識モデルの変化である。そこから、近代盆栽は「自然」の再現を目的としながらも極めて人為的なものであり、「自然」に対する一つの認識的枠組みでもあることを明らかにした。	

ファッションを語る言葉

雑誌『GISELe』の記号論的分析		
寺門脩紀	ファッション誌の販売状況が厳しいとされている現代社会において、ファッション情報のみで健闘している『GISELe』。同誌が何を志向しているのかを明らかにすることで、雑誌をはじめとするファッションメディアの意義を問い、ファッションを語る言葉を探った。小野原教子 著『闘う衣服』を参考に記号論的分析を行い、雑誌メディアの可能性にも言及した。	

韓国舞踊サルプリにおける美学的考察

意匠性からみる白布を中心に		
邊昌世	本研究では、韓国舞踊「サルプリ」の美学的考察を通じ、芸術の歴史的実践の役割と人間の感性の関係を探索した。特に舞踊衣装の白布に着目し、身体性の拡張と空間への消失を哲学的視点から論究しつつ、研究者自身の舞踊実践との応答も試みた。かなしみを潜らせ遊ばせる神性を体現し、地面のない踊りとして歴史を身体化する芸術の可能性を示した。	

物と人との関係性の変容

所有における物質性に着目して		
前田英里佳	大量生産された商品が所有物となることで、所有者との関係がどのように変容するのかを物質性に着目して論じた。現代日本の消費社会の傾向を踏まえて、物の記号としての側面と物質としての側面の両方から検討し、その連続性についても示した。物質性は変化しつづける物の一時的な不変性を担っており、物と人との関係を支えていると結論づけた。	

離島における防風の『伝統知』を適用した空き家改修・空き地利用に関する実践的研究

瀬戸内・男木島を対象として

山田凌

Ryo Yamada

Profile

- ・1999年
埼玉県生まれ
- ・2018年
春日部高等学校 卒業
- ・2025年
地域デザイン(川島)研究室 卒業
- ・現在
株式会社山下設計 勤務

作品データ

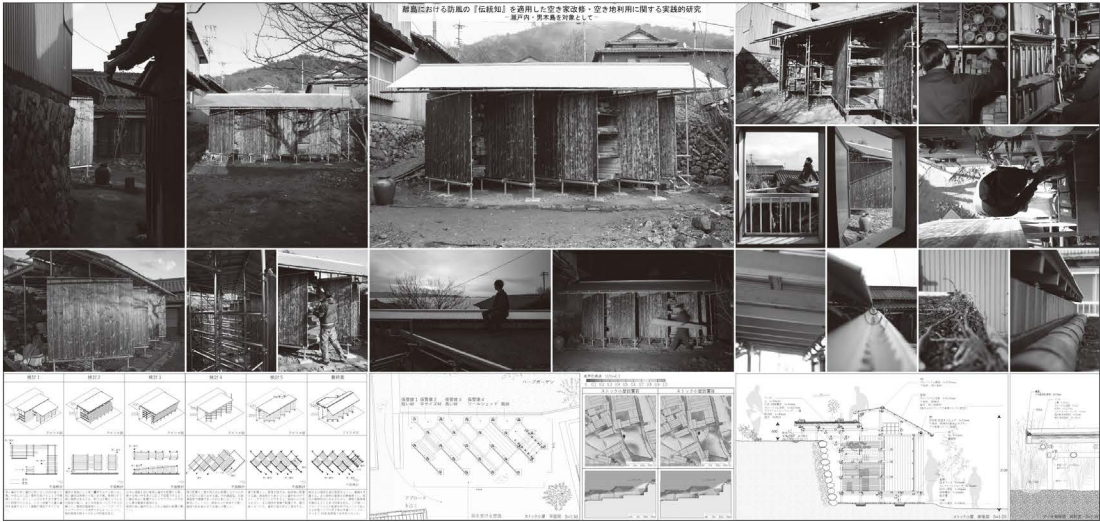
- ・建物用途:
資材小屋
- ・敷地所在地:
香川県高松市男木町
- ・作品総点数:
資材小屋1棟、A1図面3枚

・設計主旨

瀬戸内海の離島・男木島では、斜面に沿って石垣と住戸が並び建つことで強風を遮っていたが、近年の空き地の増加により風環境の悪化が懸念されている。そこで本研究では、防風の『伝統知』を島内の敷地に適用することで、防風効果を発揮しつつ、島内における空き家改修の課題も解決する建築的提案を行った。防風と施工・運用上の利点を総合的に満たす小屋を計画し、離島特有の制約を乗り越え、周辺エリア帯にも貢献可能な建築モデルの構築を目指した。

・講評

地域デザイン研究室で行ってきた『伝統知』を定量的に検証・活用する研究の一環として、離島集落に適用し、道や家屋を強風から守ると同時に資材保管機能を備えた小屋を提案。資源循環を促す実践的な地域再構築モデルを提示している。



1



2



3

1. 資材小屋を正面から見る
2. 資材小屋のデッキから海を見る
3. 路地から資材小屋を見る

人工層序学

房野広太郎

Kotaro Fusano

Profile

- ・2000年
神奈川県生まれ
- ・2019年
神奈川大学附属高等学校 卒業
- ・2025年
構法計画(門脇)研究室 卒業
- ・現在
株式会社日建設計 勤務

作品データ

- ・建物用途:
工場および住居など
- ・敷地所在地:
愛知県瀬戸市
- ・作品総点数:
A4〜A1パネル複数枚、模型2点など

・設計主旨

本設計は、環境問題を背景に循環社会を目指して行われる、廃棄資源の再生活動がオーバードライブした時に起きる、建築とランドスケープのシミュレーション的提案である。

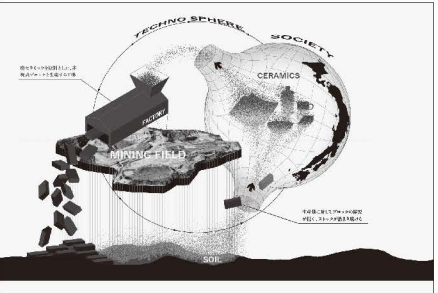
セラミックという物質を、非焼成ブロックとして社会で循環させる試みは、需給のアンバランスさによって過剰なストックを増やし続け、材料消費を自己目的化した構築物の生成を促す。大地に増殖する人工物は、建築へと読み替えられ、土に還らないセラミックによって、人工地層となるだろう。その姿は、未来に起こる人新世の建築といえるはずだ。物質循環社会と、その責務を負う建築の関係をスペキュラティブに描くことで、新たな建築の在り方とその可能性を提示する。

・講評

将来の人間活動と大地の形状の相互作用をスペキュラティブに描いた作品。しかしこの世界では、大地そのものがリサイクルされた未利用資源の集積なのだ。ここでは「エコ社会」が抱えるオブセッションが問われている。



1



2



3



4



5

1. 構築物を足がかりとして増築した、非焼成ブロックを生産する工場
2. マテリアルフローによる設計概念図
3. 工場の増築に伴い、生産フローの規模も増す
4. 敷地である採土場「瀬戸のブランドキャニオン」に構築物が増殖する
5. 工場は、その役目を終えたとき、構築物による暗く粗野な空間から、宗教建築へと改変される

修士設計

Thesis Project

SYN-CHRONIC-ITY

川本航佑

Kosuke Kawamoto

Profile

- 1999年
大阪府生まれ
- 2018年
東京都立国分寺高等学校 卒業
- 2025年
構法計画(門脇)研究室 卒業
- 現在
未定

作品データ

- 建物用途:
美術館・テルマエ・映画館
- 敷地所在地:
13 Av. du Président Wilson,
75116 Paris, France
- 作品総点数:
A1 図面 22枚、模型 4点

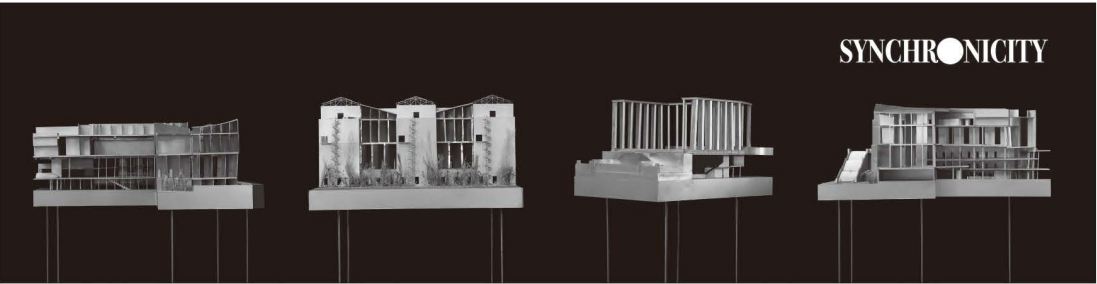
設計主旨

押井守のアニメーション映画における都市空間の表現手法を分析し、設計手法の開発を行った。分析から香港の街並みに東京的な要素を組み合わせることで匿名的な都市を表現している点に着目し、東京性をパレ・ド・トーキョーに重ね合わせることで、新たな様式の建築を設計することを試みた。さらにはそこでの建築体験を映画製作を通してシミュレーション検証した。本設計では近景、遠景のように空間に対して深度を設定したため、特定の動線での体験ではなく、3人の登場人物の体験を群像劇的に描いた。それぞれ別の経路を歩く過程で、パリと東京、そのどちらでもないアノニマスな空間・都市体験をすることができる。

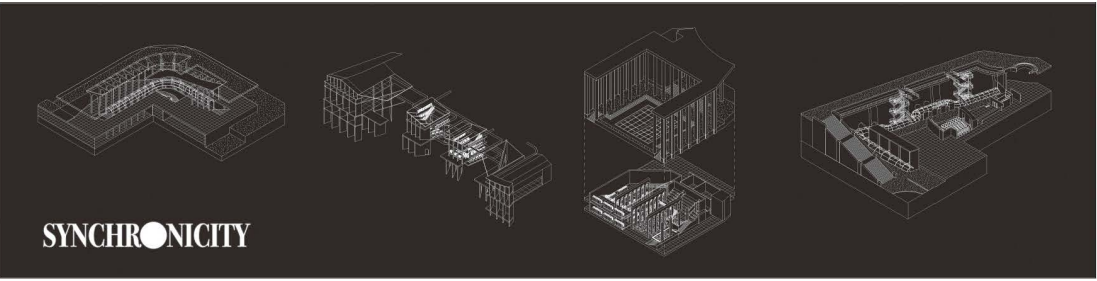
講評

都市が持つ「らしさ」に新しいアプローチで迫った作品。固い要素が折り重なり、シークエンシャルに展開していく動的作用に着目している。ここで「らしさ」は自身の運動とともに立ち現れ、そして消えていくのだ。

- model
- axonometric
- movie
- QR code



1



2



3



4

2024年度
卒業設計・卒業論文一覧

卒業設計

建築史・建築論 | 青井哲人研究室

- ・上田幹人 | 物性と知覚——光とファブリックが作り出す現象と効果
- ・小川海 | 知の境が折れ曲がる時——本が甞す専有と共有の再編と学びの拡張
- ・藤原李菜 | 赤い部屋
- ・奥畑後 | show-window recipe——「見せる」から始まる新しい生活を
- ・喜入格介 | 共有する食行動——住み方調査による食空間の模様替え
- ・手塚理紗 | 生活と「洗う」空間の関係の再考
- ・岩下新史 | 樹形山の散歩道——自然を感じる空間体験
- ・小林蒼生 | 風来法師勧進町道中
- ・三崎一輝 | 見立てと再構築——尺度変化をもたらす改修設計手法
- ・宮地幸助 | 日常と熱狂

建築空間論 | 大河内学研究室

- ・尾崎竜馬 | [Link——二つの拠点繋ぐ暮らし
- ・川口瞭介 | 解体と再生——穴が団地を進化させる
- ・児玉匠 | 変遷の道標——半空き家化した旧三等郵便局の利活用の手法
- ・美和駿佑 | 常滑焼資料館——創る、識る、繋がる
- ・吉田秀太郎 | The Plaza as a nodal point——新宿駅前空中広場の創出
- ・殿村拓茂 | [他者を受容する集住帯——相補的な中庭形式を用いた保土ヶ谷駅東口商店街改修
- ・石本善次郎 | 光に触れる場所——ローデングレーターにおける宿泊施設の提案
- ・丸山武蔵 | 極地建築 2.0——起伏のある地形に适应する可搬軽量建築と既存南極基地拡張の未来像
- ・吉原若奈 | Floating Fragments of Furniture

構法計画 | 門脇耕三研究室

- ・伊澤夢歩 | 美容建築外科——理想の美を求めて
- ・太田侑輝 | セイカツケン奉還セヨ
- ・内藤颯人 | 仮面都市 脱ぎ変える街 渋谷
- ・尾留川菜那 | 美少女
- ・藤辺彩花 | 一家一戸一台の解体——小さな書き換えから郊外住宅地の在り方を変える

地域デザイン | 川島範久研究室

- ・足立莉菜 | 道が繋ぐことも圏——都心の住宅街における自然体験につなげるこどもの居場所の提案
- ・高木晴生 | 私的領域の拡張による賑わいの創出——地方ベッドタウンにおける駅前集合住宅の提案
- ・中野耕太郎 | 人と共に自給する郊外型スタジアム——みちを介した資源循環のデザイン
- ・中村颯 | 首都圏郊外の漸進的コモンス化計画——田園都市 2.0
- ・野澤朋矢 | 里山に隣接した郊外都市における動物園の再編——アニマルウェルフェアと里山生態系の融合
- ・新井剛 | 嘉右衛門町 土蔵群再生計画——観光資源から暮らしの場としての重伝建へ
- ・神崎彩 | 備えあれば憂いあり——仮設住宅の公園備蓄
- ・部谷ひかり | こどもとわたしの食べる教室——郊外型キャンパスにおける新しいこども食堂の在り方
- ・小野寺陸人 | 往来人の探訪録
- ・平田彩乃 | 呼吸する沙留——風がつくる高密度ビル群改修計画

シェル・空間構造 | 熊谷知彦研究室

- ・下山拳汰 | FDM方式3Dプリンタで造形した接合部による単層ラチスシェルの模型製作方法の提案
- ・伊藤隼 | 人を殺す建築

構造力学 | 小林正人研究室

- ・田中彩愛 | 海の近くで暮らす——津波避難ビルと免震の集合住宅

建築・アーバンデザイン | 佐々木宏幸研究室

- ・石川雅登 | 東京自然——緑ある都市の構築
- ・諏訪結芽子 | 1.1 NEIGHBORHOOD
- ・横山晃大 | 新築復港——歴史を壊すのは津波か
- ・前田詩織 | 発酵するコミュニティ——大倉蔵が代謝する小商いのまち「大倉山」
- ・片岡学飛 | 記憶と寛容のブリコラージュ——阪田市安東邸はなれの改修プロセス参加を通した地域活性化への挑戦
- ・座間幹子 | アイチャクノカタチ——時にぶつかりすり減って、そしてまた埋め合って行けばいい。温かくなった想いは全部愛着のカタチです。
- ・髙橋直仁 | SolefulからSoulfulへ——視覚障害者が認知する多角的都市
- ・谷口直弥 | Σ[n=集中→協働] 1, n/ N = ABW
- ・三上優奈 | Give me some space, please——時空間の再編が紡ぎだすヤングケアラーの居場所
- ・山本若奈 | 等々力緑地のケ・ハレ・ケガレ——流と溜のデザイン
- ・遠藤秀 | INDIVIDUAL SQUARE——あなたの百景展におじゃまします

建築計画・設計 | 田中友章研究室

- ・川井拓真 | 街と人ととりまき場と
- ・斉藤奏斗 | 脱授業施設生活圏
- ・橋本萌花 | 記憶を走る——久留里線廃線跡を生かした交通と拠点の提案
- ・割石萌衣 | 研究のための多様化学校
- ・飯野聖博 | 聖と俗の境界
- ・Song Xinyu | 結びの街——木造密集地域の再生 高齢者向け環境改善
- ・山田和広 | ポノマド——現代都市の狩人
- ・岡山隼幸 | 回遊団地——崩壊した構想の再検討
- ・山本隼大 | 半島は復興する——輪島マリンタウン復興計画

建築構造 | 富澤徹弥研究室

- ・後藤藤心 | 竹を結び竹に結ばれ

建築環境デザイン | 樋山恭助研究室

- ・中野瑞菜 | ボロノイを用いたダブルスキンプァサードの設計——有機的開口面による採光とクレアの最適化

建築計画 | 道勇太郎研究室

- ・大倉里桜 | 色即是空
- ・大田祥悟 | 私は、
- ・上田侑果 | メイチャクウカン
- ・久保奏音 | まちのビクセル
- ・田口麗 | 多文化分生——旅人による衰退コミュニティへの介入とその暴力性の映画の現れ
- ・後藤雄大 | 水へのもたれかた
- ・櫻井一光 | 解——私たちは知らない
- ・佐藤萌 | 宇宙トウキョウ わたし
- ・末松龍 | 海の話——プラットフォームへの抵抗、或いはゆらぎが生むコレクティブに抗うの覚悟

都市計画 | 山本俊哉研究室

- ・太田葉々子 | Spore Cycle——里うみと里やまをつなぐグリーンプロジェクト
- ・信利泰成 | ハコの中を散策する
- ・辻賢人 | 京島のシャコに mes を——街路一体型土間空間の形成
- ・木本恵太 | 首都高日本橋脱胎構想——首都高幹体の減築と歩行者空間への転用
- ・寺島絵七 | 石積みを見歩く——水害の遺物 再利用計画
- ・中野蓮 | 都市の継ぎ目——開発の新旧をつなぐ人流誘導装置
- ・藤巻胡桃 | 足跡
- ・高松優 | 農を結わくこども基地

卒業論文

歴史・意匠・計画分野

建築空間論 | 大河内学研究室

- ・清水杏珠 | 渋谷パルコの可視領域——「街を見下ろす場」と「街から見られる建築」

建築計画 | 道勇太郎研究室

- ・能美通 | 空間把握における身体尺の特質——人間の身体各部を指標とする単位とそれが与える感覚的な空間把握

都市計画 | 山本俊哉研究室

- ・笹原孝心 | 人口減少の進む災害危険のある地域での都市計画の実態と課題——横須賀市北部の谷戸地域を事例として
- ・杉田紗理奈 | 花街地域における景観意匠の変容プロセスと関係主体の意向——八王子市中央町における黒塚風意匠の増加に着目して

構造・材料分野

木質構造 | 梶川久光研究室

- ★鈴木北斗・村中その | 浄土宗西念寺本堂における耐震補強技術に関する実験的研究——木質接着パネル補強及び高減衰ゴムを用いた制震デバイス補強
- ・生住廉+大西ひかる | 木質接着パネルを複層して構成した超高耐力耐力壁の力学的性状に関する実験的研究
- ・磯村綾 | 高減衰ゴムを組み込んだ木質構造接合部の引抜耐力及び剛性に関する実験的研究——高減衰ゴムの付着面積および厚みの影響
- ・南野真優子 | 中間接合部をもつプレストレスト木質合成果の鉛直荷重における力学的性状に関する研究
- ・檜山盛大 | 高減衰ゴムダンパーを用いた木質制震耐力壁の水平加振実験
- ・田中柊叶 | 浄土宗西念寺本堂におけるSFM三次元点群をCAD基本座標系に変換する実験的研究——STLP点群連結装置を映り込ませた写真を用いた場合

シェル・空間構造 | 熊谷知彦研究室

- ・竹中こゆき | 半開角の異なる単層ラチスドームの弾塑性地震応答解析による許容変形量と静的地震荷重に対する変形の関係
- ・内田瑞人 | 屋根面に設置したTMDの振幅限界への到達が屋根型円筒ラチスシェルの地震応答低減に与える影響
- ・吉田瑠斗 | 表層の地盤条件が柱と基礎梁の曲げ剛性の異なる屋根型円筒ラチスシェルの地震応答性状に与える影響
- ・高橋翔大 | ひずみエネルギーと座屈荷重の形状初期不整合感性について2段階で形状最適化された単層ラチスシェルの信頼性解析
- ・福村碩豪+松岡佑次朗 | 木製偏心圧縮材で補剛された鋼軸心力材の座屈性状に部材間隔の制御が与える影響

構造力学 | 小林正人研究室

- ・内藤正宗 | 応答スペクトル法による免震建物の地震応答予測——長周期・高減衰領域における減衰補正
- ・竹澤佳祐 | 免震部材の繰返し変形による特性変化を考慮した応答スペクトル法に基づく地震応答予測——長周期地震動が上部構造の応答予測に及ぼす影響
- ・高橋海里 | 免震建物の損傷状態を考慮した余裕度評価に関する研究——鉛プラグ挿入型積層ゴムの面圧—せん断ひずみ関係に基づく検討

- ★相羽祐希 | 不感帯機構付オイルダンパーの基数が多様な地震動に対する免震建物の応答に及ぼす影響
- ・木村遥人 | 津波定常流を受ける免震建物の水理模型実験——免震建物の固有周期が津波荷重と応答変位に及ぼす影響
- ・穂積智咲 | 免震建物に作用する津波サーჯ力と応答評価に関する実験的研究——免震層の浸水状態が津波荷重と応答変位に及ぼす影響
- ・加藤涼 | RC柱にS梁を直接圧着接

合した接合部の構造性能に関する研究——有限要素法解析による接合部の応力伝達機構の分析

建築材料 | 小山明男研究室

- ・加藤加奈 | 低分子量セルロースエーテルのコンクリートへの適用に関する研究——最適添加量の解明と初期ひび割れ発生のメカニズム
- ・飯屋善 | コンクリートのグリーンディングが鉄筋との付着特性に及ぼす影響に関する実験的研究——鉄筋配置高さ、鉄筋径と付着強度の関係
- ・小林祐太 | 各種セメントを用いた再生骨材コンクリートの基礎性状に関する実験的研究
- ★山田篤 | 石炭ガス化スラグ細骨材を用いたコンクリートの諸性状に混和材が及ぼす影響——中性化および乾燥収縮
- ・赤塚隆介 | 炭酸化による粒状化再生骨材の品質改善効果に関する基礎的研究
- ・馮逸明 | 炭酸化粒状化再生骨材がコンクリートの品質に及ぼす影響
- ・猪子熱 | 熱および紫外線が仕上塗材の品質に及ぼす影響に関する実験的研究
- ・大内田健太郎 | RC造建築物におけるコンクリートによる環境影響評価に関する基礎的研究
- ・吉岡優太 | 建材由来廃棄物によるCO₂排出量の将来予測に関する研究

耐震構造 | 菅沂雄研究室

- ・坂田啓太+近藤慶佳 | アンボンドPCaPC壁の構造性能評価に関する実験的研究
- ・小出知希 | 十字形骨組におけるアンボンドPCaPC梁部材の骨格曲線評価の高度化

- ・小栗和哉 | CLTパネルを有するRC骨組の構造性能評価——変形レベルに応じたCLTパネルの荷重-変形関係
- ・鈴木天彩 | CLTパネルを有するRC骨組の構造性能評価——コッターの有無による構造性能
- ・劉炎林 | 降伏破壊する柱梁接合部の残存耐震性能評価に関する研究
- ・長江萌夏 | 中空断面を有する鉄筋コンクリート梁部材の構造性能評価
- ・郷輝 | セルフビルド補強組積部材を用いた高床式住居の構造システムの提案及び構造安全性の評価

建築構造 | 富澤徹弥研究室

- ・佐藤恵佑 | 非比例減衰配置された粘性ダンパーのエネルギー法に基づく応答評価法
- ・磯貝亮太 | 鋼構造建築物のエネルギー法に基づく塑性変形評価に関する研究
- ・石橋賢治 | せん断型超高層建物の非線形性によるねじれ振動助起現象に関する研究
- ・鳥居佑有理 | 懸架型パラレルリンク機構を用いた免震システムの鉛直動的力学特性に関する研究——作動油の粘度による特性変化
- ・日高光稀 | 小規模建築物を対象とした滑り基礎免震構造の地震時応答性状に関する研究
- ・吉田凌大 | 応答スペクトル法による大型風力発電設備鋼製タワーの地震応答評価
- ・大家菜摘 | 風力発電設備支持物の長期実測に基づく機械学習を用いた累積損傷度評価
- ・野末琉生 | 偏分布積雪荷重を受ける発泡アーチドームの開口配置に関する研究
- ・田中慧朗 | 皮膚電位量による生体反応計測を用いた振動に対する不安定度評価に関する研究

環境・設備分野

建築環境計画 | 上野佳奈子研究室

- ★杉本まこり | ホール客席部の聴感印象に対する視覚情報の効果——三次元音場再現システムとHMDを用いた検討
- ・中村日和 | 声楽者の練習におけるホール音場シミュレータの効果
- ・山田奈々 | 声楽者の演奏場所のイメージが演奏行動に与える影響
- ・田口恵蓮 | 発達障害者の公共的余暇施設利用の支援に向けた研究
- ・國島海 | 障害者支援施設における個人

- ・特性に配慮した音環境調整に関する研究
- ・浅倉郁 | 児童養護施設における生活空間の改善に向けた研究
- ・坂上大介 | 児童養護施設の共有空間における環境調整手法の研究
- ・浅井幸菜 | 児童養護施設の個室における環境調整の導入に向けた研究
- ・田中悠葉 | 小学校の児童支援教室における環境整備の取り組み
- ・花畑祐貴 | オープンプラン小学校における児童主体での居場所づくりの実践

建築環境工学 | 酒井孝司研究室

- ・内田武蔵 | 屋外放射環境の簡易評価手法の開発に関する研究
- ・大森慶人 | 自動スライドドア開閉制御時の風環境の実測
- ・平井愛美 | 戸建住宅の断熱等級別温熱環境に関する研究
- ・古賀龍之介 | CFDによる非等温水噴流流れ場の詳細解析
- ・佐藤琉生 | モーメンタム法を用いたスロットランディフューザーパーツの開発
- ・善方枝美華 | 完全人工光型植物工場における気流・温熱環境のCFD解析
- ・田中郁也 | 生田キャンパスの新校舎建設に伴う屋外気流の変化に関する検討
- ・深澤光星 | ZEB改修前体育館温熱環境の実測
- ・戸塚尚志 | 土蔵き建築における気流・温熱環境の解析
- ・渡邊響子 | 中学高等学校体育館のCFDを用いた換気解析
- ・大家晃平 | CFDによる既存体育館における断熱改修前後の温熱環境比較

建築環境デザイン | 樋山恭助研究室

- ・津田陸斗 | ニューラルネットワークによる建築設計用気象データの日射量推定に関する研究
- ・都村良樹 | 住宅の内窓改修によるGHG排出量削減効果とカーボンペイバックタイムの試算
- ・五十川大地 | ウェルネスオフィスにおける評価項目間の相関分析と各種設計要素の対応状況の評価
- ・立川楓馬 | ダクト製造におけるGHG排出量の試算とその削減可能性の検討
- ・日置凌+有馬魁人 | PCMを用いた換気窓の開発と最適運用に関する研究
- ・松延実優 | 建物外皮のLCAとGHG排出量による地域最適化

建築設備 | 光永威彦研究室

- ・嶋峯鈴 | ZWB普及のための雨水利用の実態調査に基づくCO₂排出量評価に関する研究
- ・鈴木岳斗 | 真空便器を用いた真空排水システムの基礎性能の実験的検証と適用効果の考察
- ・所駿人 | サイホン雑排水システムの維持管理に関する研究——ファインパブルを用いた台所排水管内の油污に関する検証
- ・小池竜輝 | ZEB化を目的とした既存体育館の改修設計プロセスに関する研究
- ・田口詩織 | マンホールトイレ用雨水貯留槽の常時利用に関する研究
- ★廣美音 | 屋内型アクアポニックスの植物育成に関する研究——果菜生長期と紫外線殺菌灯の効果
- ・吉川(廉川) | 崎市岡上地域を題材とした農業関連施設のための基礎調査と改善案
- ・白石晃太 | 中山間地域におけるタイニーハウスの水のオフグリッド化の研究
- ・高吉慶一郎 | タイニーハウスのオフグリッド化のための電力収支に関する検討

- ・黒坂大朗 | 国際学生寮の大浴場を対象としたエネルギー消費に関する現状把握と改善提案
- ・和田里希 | UPC-IPCを用いた日米の給排水衛生設備規準・規格の比較と考察
- ★ = 「建築学科卒業論文優秀賞」受賞論文
- ☆ = 空気調和・衛生工学会賞

『Archives 2025』は、明治大学理工学部建築学科／理工学部研究科建築・都市学専攻の2024年度における学生の主要な成果を記録する公式イヤーブックである。

2024年度の明大建築の大きな出来事は、堀口捨己設計の本校舎について、学科をあげた研究成果を発表したことであろう。堀口捨己(1895－1984)は、いうまでもなく20世紀日本を代表する建築家のひとりであり、本学工学部建築学科にとっては創立教員としていつまでも重要な象徴的存在である。その堀口の残した図面・書籍・写真等の諸資料はこれまで堀口捨己資料アーカイブズ([本学元教授]木村儀一、[元助手]藤岡洋保)が管理・整理の努力を続けてこられたが、2024年に文化庁国立近現代建築資料館への寄贈が成り、同館により学術的な整理と公開が促進される運びとなった。本学科では前年度から明治大学のキャンパス・校舎に関する図面資料について教員と院生による共同研究を展開していたが、2024年8月には日本建築学会大会の駿河台キャンパスでの開催にあわせ展覧会「堀口捨己と明治大学校舎建築1955－65」(2024年8月27日－30日、於明治大学グローバルフロント)を実施した。これは国立近現代建築資料館の展覧会「建築家・堀口捨己の探求——モダニズム・利休・庭園・和歌」(2024年8月9日－10月27日)との同時開催というかたちで連携をはかった企画でもあった。また、明治大学での展示内容は、明治大学出版会より書籍として刊行予定である。

この堀口校舎研究の要点は、1955年から65年に竣工した堀口設計の鉄筋コンクリート校舎とキャンパス計画を、戦後史のなかで、大学史と建築史の交差する場として読み解くことにあった。この場合戦後史とは、農村社会から工業社会への転換、都心の過密化と郊外化の進展、建築生産の変質、高等教育の大衆化などに現れるドラスティックな変容のパースペクティブである。この流れを見据えた明治大学は数百人を収容できる巨大な階段教室群のコンプレクスと、新しい郊外キャンパスを計画した。設計者としてこれに向き合った堀口らにおいて、近代建築はいかに変質したか、いかなる技術と美学が獲得されたか——これが研究課題であった。その堀口設計の校舎群は1990年代以降徐々に解体されており、現存建物は生田キャンパスの2棟を残すのみとなった。本稿執筆時点で、そのうち第二校舎2号館の解体準備作業が進められている。本冊子に収録した明大建築シンポジウムではこの建物の多面的な検討が行われているのでじっくりお読みいただきたい。

他方、かつての登戸研究所本館の位置には、図書館・教室とアクティブラーニングのスペースを複合させた新校舎「センターフォレスト」の供用が4月に開始されたが、まもなく学生たちの居場所として定着した。私たちの教育もその環境も、21世紀に入ってまったく新しいフェーズに移ってきたことを思わずにいられない。それは何か。そして堀口から受け継ぐべきものは何か。

さて今回も、制作にあたってはスベルブラーツの皆さんに編集・進行全般を、また中野豪雄さんとスタッフの皆さんにアートディレクションとデザインをお願いした。皆さんに心から感謝したい。

Archives編集統括

青井哲人



明治大学 生田キャンパス

〒214-8571

神奈川県川崎市多摩区

東三田1-1-1

TEL.044-934-7171

—
小田急線「生田駅」下車
徒歩10分

新宿駅から急行20分、
「向ヶ丘遊園駅」で乗り換え
1駅目

「向ヶ丘遊園駅」北口から
小田急バス「明大正門」
約15分

明治大学 駿河台キャンパス

グローバルフロント

〒101-8301

東京都千代田区神田駿河台1-1

TEL.03-3296-4142

—
JR中央線・総武線、
東京メトロ丸ノ内線
「御茶ノ水駅」下車徒歩約2分

東京メトロ千代田線
「新御茶ノ水駅」下車
徒歩約5分

都営地下鉄三田線・新宿線、
東京メトロ半蔵門線
「神保町駅」下車徒歩約8分

ホームページアドレス

—
明治大学理工学部
<http://www.meiji.ac.jp/sst/>

明治大学建築学科／
大学院建築・都市学専攻
<http://meiji-architecture.net/>

同専攻
国際建築都市デザイン系
<https://iaud.jp/>

発行：
明治大学理工学部建築学科

編集統括：
青井哲人

編集・制作：
スベルブラーツ
〒162-0067
東京都新宿区富久町16-9-1003

デザイン：
中野豪雄＋李敏楽
[中野デザイン事務所]